

上野遺跡・竹ノ崎遺跡

中国横断自動車道尼道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9

(本文編)

日本道路公団中国支社
長県教育委員会

2001年

通輸の経緯について。

- ・最下端の支社がある、CMC、3段目では方面
・輪番で新規の車両の購入。
・203の便運送車両が最も多く運ばれる。
・口輪部輪番を除く外車化車両。
・最下端の支社は輸送量が少ない。

前段

上級管理 3号車体

→ 後期の車両登場
大和工場製造車両

初期

初期の車両 1-73341

(N形車両)

→ 初期の車両登場

- ・大和工場型の通輸の車両
- ・地理的では北派と呼ぶ

頭に入れる。

- ・大和工場型の車両
- ・頭に入れる。
- ・時期的には遅い。

前段

1-73341-73363.

→ 後期車両

→ 後期車両

→ 後期車両

2台目。

① 徒歩行動者登場

1-73340-733

② 前方確認確保登場

③ 乗用

上野遺跡・竹ノ崎遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 9

(本文編)

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

2001年

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成9年3月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である宍道町における上野遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる敬意を表すものであります。

平成13年3月

日本道路公团中国支社松江工事事務所

所長 村田一廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成8年度から中国横断自動車道尾道・松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このたび報告書第9集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成9・10年に実施した、宍道町の上野遺跡・竹ノ崎遺跡での発掘調査の記録であります。今回の発掘調査では、古墳時代を中心とする多量の土器や横穴墓、弥生時代後期の集落など多くの成果を得ましたが、中でも上野1号墳の調査では、銅鏡や勾玉、槍などの武器類、県内で初めての発見となる鱗付円筒埴輪など貴重な資料の発見が相次ぎました。これらの調査結果は、宍道町の古代史の一端を明らかにしただけでなく、出雲地方や日本の歴史を解明していくためにも極めて貴重な資料になるものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明していく糸口となり、郷土の歴史と文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、本書を刊行するあたり御協力いただきました地元宍道町住民の方々、日本道路公団、宍道町教育委員会をはじめ、関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

島根県教育委員会

教育長 山 崎 悠 雄

例　　言

1. 本書は、日本道路公团中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9・10年度に実施した、中国横断自動車道尾道・松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県八束郡宍道町大字佐々布2608-1番地他 上野遺跡

2611-2番地他 竹ノ崎遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

(平成9年度) 上野遺跡・竹ノ崎遺跡現地調査

事務局　勝部 昭(島根県教育府文化財課長) 宮道正年(埋蔵文化財調査センター長)
古崎藏治(同課長補佐) 渡谷昌宏(同企画調整係主事)

調査員　林 健亮(同調査第1係文化財保護主事) 原田敏照(同主事) 東山信治(同主事)
植田良司(同教諭兼文化財保護主事) 梶田勝彦(同教諭兼主事) 難波孝之(同教諭兼主事) 越野幹司(同臨時職員) 岩田和郷(同臨時職員) 内田直美(同臨時職員) 松尾充晶(調査補助員)

(平成10年度) 上野遺跡現地調査

事務局　勝部 昭(島根県教育府文化財課長) 宮道正年(埋蔵文化財調査センター長)
秋山 実(同課長補佐) 松本岩雄(同課長補佐) 川崎 崇(同企画調整係主事)

調査員　林 健亮(同調査第1係文化財保護主事) 石橋俊郎(同教諭兼主事)
岡本育子(同臨時職員)

(平成12年度) 上野遺跡・竹ノ崎遺跡報告書作成

事務局　宍道正年(島根県教育府埋蔵文化財調査センター所長) 内田 瞳(同総務課長)
松本岩雄(同調査課長) 今岡 宏(同総務係長) 渡辺紀子(同主任主事) 川崎 崇(同主事)

調査員　林 健亮(同調査課第1係文化財保護主事) 石橋俊郎(同教諭兼文化財保護主事)
原田敏照(同第6係主事) 田中玲子(同臨時職員) 岡本育子(同臨時職員) 池橋こずえ(同臨時職員)

4. 平成9・10年度の発掘作業(発掘作業員雇用・重機借上げ・発掘用具調達等)については、日本道路公团中国支社松江工事事務所、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

平成9年度

〔現場担当〕 布村幹夫(現場事務所長) 永原正寛(技術員) 倉橋博之(技術員)

〔事務担当〕 飯塚春美(事務員)

平成10年度

〔現場担当〕布村幹夫（現場事務所長） 永原正寛（技術員） 藤原 恒（技術員）

〔事務担当〕深山明子（事務員） 馬庭明美（事務員）

5. 現地調査、及び資料整理に際しては、以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

伊賀高弘（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター） 池田朋生（熊本県教育委員会） 池田満雄（島根県文化財保護審議会委員） 稲田 信（宍道町教育委員会） 宇垣匡雅（岡山県立吉備文化財センター） 梅本康広（財団法人向日市埋蔵文化財センター） 大澤正己（たら研究会九州委員） 大谷晃二（島根県立松江北高校教諭） 岡田文男（京都造型芸術大学芸術学部助教授） 置田雅昭（天理大学教授） 高木正文（熊本県教育委員会） 高島 徹（大阪府教育委員会） 高橋克壽（京都大学大学院助手） 田中義昭（島根県文化財保護審議会委員） 塚本利夫（財団法人元興寺文化財研究所） 汗 美紀（財団法人大阪市文化財協会） 水井 泰（モニュメント・ミュージアム来侍ストーン館長） 成瀬正和（官内庁正倉院事務所） 西山要一（奈良大学文学部教授） 野崎貴博（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター） 遠岡法暉（島根県文化財保護審議会委員） 増永二之（島根大学生物資源科学部講師） 水口晶朗（安来市教育委員会） 美濃口雅郎（熊本市教育委員会） 三宅博士（安来市教育委員会） 村上 降（奈良国立文化財研究所） 森下章司（京都大学大学院） 山岸良二（東邦大学付属東邦中高等学校教諭） 若月利之（島根大学生物資源科学部教授） 渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

藤井寺市教育委員会

6. 採図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。
7. 第2図は、建設省国土地理院発行の地形図を使用した。また、第5・39・120図は（株）ジエクトが、第98・101・109図は㈱アイシーが作成したものを元にしている。
8. 本書に掲載した写真の内巻頭図版5は奈良国立文化財研究所牛島茂氏に撮影していただいた。その他の写真は、各調査員で撮影した。
9. 本書に掲載した実測図は各調査員の他、田中芳文（調査課第6係臨時職員）、大野芳典（同）、守山博義（同）、丸谷万美子（同）、赤井和代（島根大学生）、石田為成（同）、厚見崇（同）、野津研吾（隠岐島後教育委員会）が作成し、河野真由美、小豆沢美貴、高橋啓子、野田清美、金森千恵子、大畑真由美、川津 史（以上整理作業員）が繪書した。
10. 本書の執筆は第7章を除き各調査員が分担して執筆し、その文責を目次に記した。
- 第7章については岡田文男（京都造型芸術大学芸術学部）、成瀬正和（官内庁正倉院事務局）、若月利之（島根大学生物資源科学部）、佐藤邦明（島根大学生物資源科学部）、（株）元興寺文化財研究所の諸先生、機関に執筆いただいた。
11. 本書の編集は、林・原田が行った。
12. 本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯と調査の経過	(林)	1
第2章	調査地の位置と歴史的環境	(林)	3
第3章	上野遺跡I区	(林)	11
第1節	上野遺跡I区の位置と調査概要		11
第2節	弥生時代の遺構・遺物		15
第3節	時期不明の遺構		38
第4節	遺構に伴わない遺物		39
第5節	小結		43
第4章	上野遺跡II区	(林)	46
第1節	弥生時代の遺構・遺物		48
第2節	上野古墳群		66
第3節	遺構に伴わない遺物		95
第4節	小結		97
第5章	上野1号墳・埴輪棺群	(林)	99
第1節	上野1号墳の墳丘		99
第2節	上野1号墳の主体部		106
第3節	上野1号墳出土遺物		117
第4節	埴輪棺群		129
第5節	中世と考えられる遺物		148
第6章	竹ノ崎遺跡の調査	(原川)	162
第1節	調査経過と概要		162
第2節	検出遺構と出土遺物		168
1.	1区の調査（土坑とピット群）		168
2.	2区の調査（土坑とピット群）		173
3.	3区の調査（焼土土坑群）		174
4.	4区の調査（横穴墓群）		175
第3節	遺物包含層中の出土遺物		183
1.	概要		183
2.	分類		183
3.	縄文土器・弥生土器（前期～中期）		188
4.	弥生土器（後期）		188
5.	土師器		194
6.	須恵器		229
7.	鉄器		264
8.	石器		265

第4節	まとめ	299
第7章	自然科学的分析	305
第8章	まとめにかえて	(林) 316
第1節	上野1号墳の墳丘・主体部について	316
第2節	上野1号墳出土土器について	318
第3節	上野1号墳出土金属器について	319
第4節	上野遺跡II区出土埴輪について	320
第5節	上野1号墳のその他の副葬品	321
第6節	上野1号墳の位置付け	321

挿 図 目 次

第1図	調査地の位置	1
第2図	上野遺跡・竹ノ崎遺跡の位置と周辺の遺跡	4

上野遺跡

第3図	野津原II遺跡(西区)の出土土鍤	6
第4図	上野遺跡の調査範囲	12
第5図	上野遺跡I区トレンチ配置図・造構配置図	13
第6図	上野遺跡I区トレンチ土層堆積状況	14
第7図	1号建物跡土層堆積状況	16
第8図	1号建物跡遺物出土状況	17
第9図	1号建物跡断面図(1)	18
第10図	1号建物跡断面図(2)	19
第11図	1号建物跡出土遺物(1)	20
第12図	1号建物跡出土遺物(2)	21
第13図	2号建物跡土層堆積状況	22
第14図	2号建物跡上面造構実測図	23
第15図	2号建物跡下面造構実測図	24
第16図	2号建物跡出土遺物実測図	25
第17図	3号建物跡実測図	26
第18図	3号建物跡出土遺物実測図	26
第19図	4号建物跡・加工段3、4実測図	27
第20図	加工段出土遺物実測図	28
第21図	4号建物跡出土遺物実測図	28
第22図	土器溜まり土層堆積状況	29
第23図	土器溜まり付近地形測量図	30

第24図	土器溜まり付近遺物出土状況	31
第25図	土器溜まり出土遺物実測図（1）	32
第26図	土器溜まり出土遺物実測図（2）	33
第27図	土器溜まり出土遺物実測図（3）	34
第28図	土器溜まり出土遺物実測図（4）	35
第29図	土器溜まり付近出土砥石実測図	35
第30図	加工段1実測図	36
第31図	加工段2実測図	37
第32図	1号溝付近実測図	38
第33図	2、3号溝付近実測図	39
第34図	土壤1実測図	40
第35図	遺構に伴わない遺物実測図（1）	41
第36図	上野遺跡I区出土遺物実測図	42
第37図	遺構に伴わない遺物実測図	43
第38図	上野遺跡I区出土金属器実測図	43
第39図	上野遺跡II区遺構配置図	47
第40図	5号建物跡平面図・土層堆積状況	48
第41図	5号建物跡遺物出土状況	49
第42図	5号建物跡平面図・断面図	50
第43図	5号建物跡出土遺物実測図（1）	51
第44図	5号建物跡出土遺物実測図（2）	52
第45図	6号建物跡平面図・土層堆積状況	53
第46図	6号建物跡平面図・断面図	54
第47図	6号建物跡遺物出土状況	55
第48図	6号建物跡出土遺物実測図	55
第49図	7号建物跡平面図・断面図・遺物出土状況	56
第50図	7号建物跡出土遺物実測図	57
第51図	加工段3、4平面図・断面図・遺物出土状況	58
第52図	加工段3出土遺物実測図	58
第53図	加工段5平面図・断面図・遺物出土状況	59
第54図	加工段5出土遺物実測図	60
第55図	上野4号墳付近出土遺物実測図	61
第56図	上野2、3号付近弥生土器出土状況	62
第57図	上野2、3号墳付近出土遺物実測図（1）	63
第58図	上野2、3号墳付近出土遺物実測図（2）	64
第59図	上野遺跡II区出土弥生土器実測図	65
第60図	上野2、3号墳調査前地形測量図・土層断面図	67
第61図	上野2、3号墳地形測量図・断面図	68

第62図	上野2号墳主体部実測図	69
第63図	上野3号墳主体部実測図	70
第64図	上野2、3号墳道出土状況	71
第65図	上野2号墳出土遺物実測図	72
第66図	上野3号墳出土遺物実測図	72
第67図	上野4号墳墳丘測量図・土層断面図	73
第68図	上野4号墳調査後地形測量図	74
第69図	上野4号墳第1、2主体部実測図	75
第70図	上野4号墳第2主体部実測図	76
第71図	上野4号墳付近遺物出土状況	77
第72図	上野4号墳付近出土遺物実測図	78
第73図	上野4号墳出土遺物実測図	78
第74図	上野6号墳調査前地形測量図・土層断面図	79
第75図	上野6号墳主体部実測図	80
第76図	上野6号墳遺物出土状況	81
第77図	上野6号墳出土土器実測図	82
第78図	上野7号墳調査前墳丘測量図・土層断面図	83
第79図	上野7号墳測量図	84
第80図	上野7号墳主体部実測図	85
第81図	上野8号墳地形測量図・土層断面図	86
第82図	上野8号墳遺物出土状況	87
第83図	上野8号墳出土遺物実測図	88
第84図	上野5号墳調査前地形測量図・土層断面図	89
第85図	上野5号墳調査後地形測量図・断面図	90
第86図	上野9号墳調査前地形測量図・土層断面図	91
第87図	上野9号墳調査後地形測量図・断面図	92
第88図	上野9号墳出土遺物実測図	92
第89図	土壤基実測図・遺物出土状況	93
第90図	土壤基出土土器実測図	94
第91図	土壤基出土金属器実測図	94
第92図	上野遺跡II区出土石器実測図	95
第93図	上野遺跡II区造構に伴わない遺物実測図	96
第94図	上野遺跡出土古銭実測図	97
第95図	上野1号墳調査前地形測量図	100
第96図	上野1号墳墳丘土層断面図	101
第97図	上野1号墳墳丘測量図	102
第98図	上野1号墳盛土除去後地形測量図	103
第99図	上野1号墳墳丘埴輪片出土状況	105

第100図	上野1号墳墳頂部・主体部配置図	106
第101図	第1主体部実測図	107
第102図	第1主体部土壙断面図	108
第103図	第1主体部直上七器出土状況	109
第104図	第1主体部遺物出土状況	110
第105図	上野1号墳第1主体部遺物出土状況	111
第106図	第1主体部玉類出土状況	112
第107図	第2主体部実測図	113
第108図	第3主体部実測図	115
第109図	上野1号墳盛土除去状況	116
第110図	第1主体部直上出土標石実測図	117
第111図	第1主体部直上出土土器実測図(1)	118
第112図	第1主体部直上出土土器実測図(2)	119
第113図	第1主体部出土玉類実測図	120
第114図	上野1号墳彷彿斜綠神獸鏡実測図	122
第115図	第1主体部出土金属製品実測図	123
第116図	第3主体部出土埴輪実測図	126
第117図	上野1号墳第3主体部出土土器実測図	127
第118図	上野1号墳墳丘出土ガラス小玉実測図	127
第119図	上野1号墳墳丘出土埴輪実測図	128
第120図	上野遺跡I区埴輪棺の位置図	129
第121図	1号埴輪棺実測図	130
第122図	1号埴輪棺下面実測図	131
第123図	1号埴輪棺出土埴輪実測図(1)	132
第124図	1号埴輪棺出土埴輪実測図(2)	133
第125図	1号埴輪棺出土埴輪実測図(3)	134
第126図	2号埴輪棺実測図	135
第127図	2号埴輪棺出土埴輪実測図(1)	136
第128図	2号埴輪棺出土埴輪実測図(2)	137
第129図	3号埴輪棺実測図	138
第130図	3号埴輪棺下面実測図	139
第131図	3号埴輪棺出土埴輪実測図(1)	140
第132図	3号埴輪棺出土埴輪実測図(2)	141
第133図	4号埴輪棺実測図	142
第134図	4号埴輪棺出土埴輪実測図(1)	143
第135図	4号埴輪棺出土埴輪実測図(2)	144
第136図	5号埴輪棺実測図	145
第137図	5号埴輪棺出土埴輪実測図(1)	146

第138図	5号埴輪棺出土埴輪実測図(2)	147
第139図	上野1号墳表土除去状況	148
第140図	上野1号墳出土遺物実測図(中世)	149

竹ノ崎遺跡

第141図	周辺地形測量図	163
第142図	調査前測量図	164
第143図	調査後測量図(調査区配置図)	165~166
第144図	1A区遺構配置図	168
第145図	1~3区土層断面図	169
第146図	1A区土坑実測図	170
第147図	1区遺構内出土須恵器実測図	171
第148図	1区遺構内出土土師器実測図	171
第149図	1C区ピット群実測図	172
第150図	1D区ピット群実測図	172
第151図	2区SK01実測図	173
第152図	2区ピット群実測図	173
第153図	2区遺構内出土土師器実測図	174
第154図	3区土坑実測図	174
第155図	4区1号横穴墓実測図	176
第156図	4区1号横穴墓遺物出土状況実測図	177
第157図	4区1号横穴墓出土直刀実測図	177
第158図	4区2号横穴墓奥壁線刻壁画拓影	179
第159図	4区2号横穴墓奥壁線刻壁画拓影	180
第160図	4区2号横穴墓奥壁線刻壁画実測図	181
第161図	4区出土須恵器実測図	182
第162図	出土繩文土器・弥生土器実測図	188
第163図	出土弥生土器実測図(壺・壺)	189
第164図	出土弥生土器実測図(壺・壺)	190
第165図	出土弥生土器実測図(壺・壺・瓶形土器)	191
第166図	出土弥生土器実測図(文様拓影)	193
第167図	出土弥生土器実測図(壺・壺底部)	194
第168図	出土弥生土器土師器実測図(鼓形器台)	195
第169図	出土土師器実測図(壺・壺)	196
第170図	出土土師器実測図(壺)	197
第171図	出土土師器実測図(壺)	198
第172図	出土土師器実測図(壺)	199
第173図	出土土師器実測図(壺)	201

第174図	出土土師器実測図（壺）	202
第175図	出土土師器実測図（壺）	203
第176図	出土土師器実測図（壺）	204
第177図	出土土師器実測図（壺）	206
第178図	出土土師器実測図（小形の壺）	207
第179図	出土土師器実測図（特異な壺・壺）	208
第180図	出土土師器実測図（小形壺・壺）	209
第181図	出土土師器実測図（鉢・壺・手捏ね・埴輪）	210
第182図	出土土師器実測図（高杯環部）	211
第183図	出土土師器実測図（高杯接続部周辺）	213
第184図	出土土師器実測図（高杯脚部）	214
第185図	出土土師器実測図（低脚高杯・低脚杯）	215
第186図	出土土師器実測図（壺）	217
第187図	出土土師器実測図（壺・鉢）	219
第188図	出土土師器実測図（瓶）	221
第189図	出土土師器実測図（瓶底部・把手）	222
第190図	出土土師器実測図（瓶把手・把手状製品）	223
第191図	出土土師器実測図（壺）	225
第192図	出土土師器実測図（竈ひさし）	226
第193図	出土土師器実測図（土製支脚）	227
第194図	出土土師器実測図（土製支脚2）	228
第195図	出土土製品実測図	228
第196図	出土須恵器実測図（杯壺）	230
第197図	出土須恵器実測図（壺蓋）	231
第198図	出土須恵器実測図（つまみ付き杯蓋）	232
第199図	出土須恵器実測図（つまみ付き杯蓋）	233
第200図	出土須恵器実測図（杯身）	235
第201図	出土須恵器実測図（杯身）	236
第202図	出土須恵器実測図（壺）	238
第203図	出土須恵器実測図（壺）	239
第204図	出土須恵器実測図（壺底部）	240
第205図	出土須恵器実測図（高台付き壺）	241
第206図	出土須恵器実測図（皿）	242
第207図	出土須恵器実測図（高杯）	245
第208図	出土須恵器実測図（高杯）	246
第209図	出土須恵器実測図（高杯）	247
第210図	出土須恵器実測図（直口壺・短頸壺・長頸瓶）	249
第211図	出土須恵器実測図（壺・瓶頸・口縁・底部）	250

第212図	出土須恵器実測図（壺・瓶類底部）	251
第213図	出土須恵器実測図（瓶類）	252
第214図	出土須恵器実測図（把手付き壺）	253
第215図	出土須恵器実測図（蓋・その他異形器種）	254
第216図	出土須恵器実測図（装飾器台）	255
第217図	出土須恵器実測図（大鉢）	256
第218図	出土須恵器実測図（中形壺）	257
第219図	出土須恵器実測図（大形壺）	258
第220図	出土須恵器実測図（大形壺・胴部片）	259
第221図	出土須恵器実測図（壺胴部片）	260
第222図	出土須恵器実測図（ヘラ記号拓影）	261
第223図	出土須恵器実測図（ヘラ記号・底部拓影）	262
第224図	出土須恵器実測図（皿底部拓影）	263
第225図	出土鉄器実測図	264
第226図	出土石器実測図	265
第227図	出土砥石実測図	266
第228図	出土玉類・五輪塔実測図	267
第229図	上野1号墳第1主体部構築過程復元想像図	318

表 目 次

第1表	上野遺跡・竹ノ崎遺跡の位置と周辺の遺跡	5
第2表	上野遺跡土器観察表	151
第3表	上野遺跡石製品観察表	158
第4表	上野遺跡玉類観察表	159
第5表	上野遺跡古錢観察表	160
第6表	上野遺跡金屬製品観察表	160
第7表	竹ノ崎遺跡土師器・弥生土器の分類一覧	184
第8表	竹ノ崎遺跡須恵器の分類一覧	185
第9表	竹ノ崎遺跡土師器・弥生土器の分類対応表	186
第10表	竹ノ崎遺跡須恵器の分類対応表	187
第11表	竹ノ崎遺跡土器観察表	268
第12表	竹ノ崎遺跡石製品観察表	298
第13表	竹ノ崎遺跡小玉観察表	298
第14表	竹ノ崎遺跡鉄器観察表	298
第15表	竹ノ崎遺跡出土土器時期別消長表	300
第16表	埴輪棺土壤分析結果	315

第17表	標本土壤土色	315
第18表	埴輪棺土壤サンプル	315
第19表	埴輪棺觀察表	321

図 版 目 次

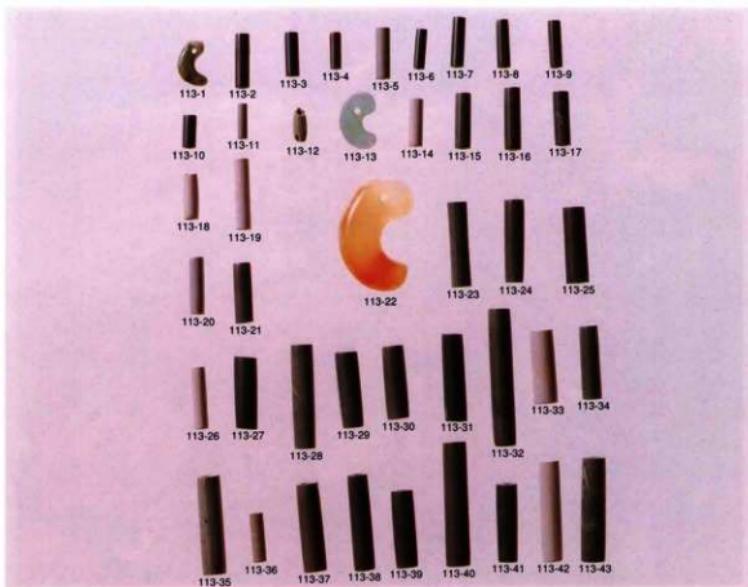
卷頭図版 1	上野 1 号墳出土仿製銅鏡
	上野 1 号墳第 1 主体部出土玉類
卷頭図版 2	上野遺跡近景（南から）
	上野 1 号墳近景（北から）
卷頭図版 3	上野遺跡 I 区・上野遺跡 II 区
	上野 1 号墳検出状況（西から）・上野 1 号墳盛り上除去状況（北から）
卷頭図版 4	竹ノ崎遺跡調査前全景（東から）
	竹ノ崎遺跡 4 区 2 号横穴墓奥壁、線刻壁画拓影
卷頭図版 5	竹ノ崎遺跡 1 区土層断面
	竹ノ崎遺跡 2 区土層断面
卷頭図版 6	竹ノ崎遺跡出土遺物

カラー図版 1

上野遺跡



上野 1 号墳出土仿製斜線神獸鏡



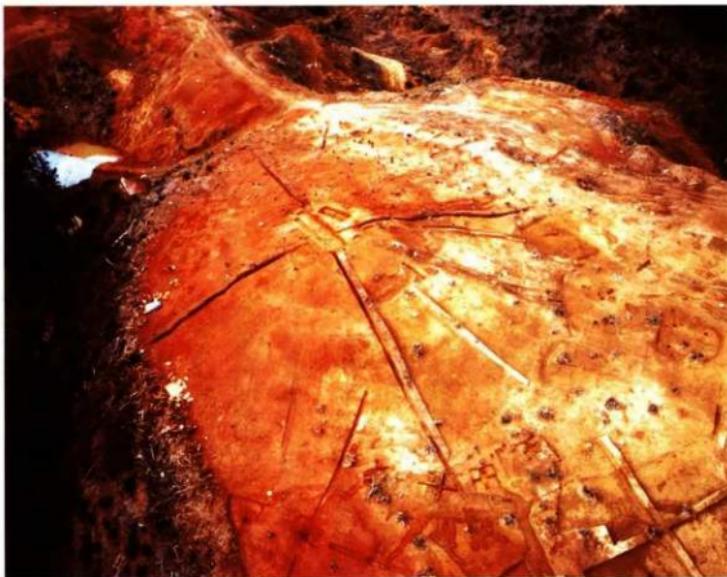
上野 1 号墳第 1 主体部出土玉類

カラー図版 2

上野遺跡



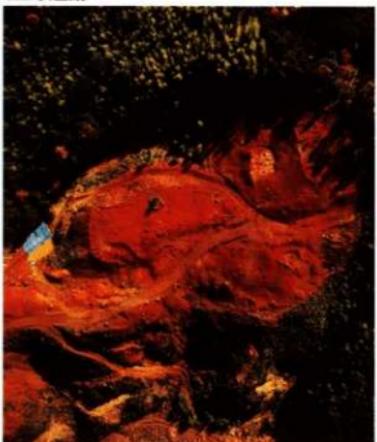
上野遺跡近景(南から)



上野 1号墳近景(北から)

カラー図版 3

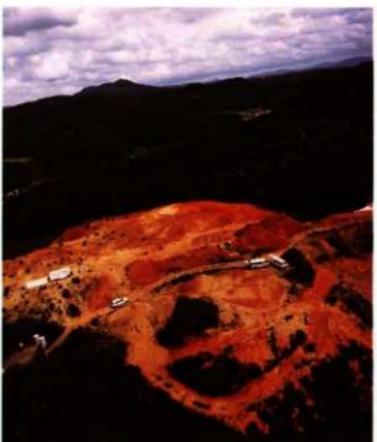
上野遺跡



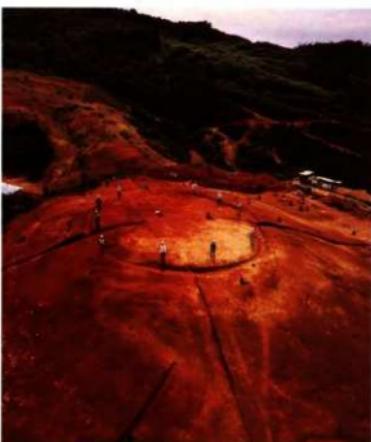
上野遺跡 I 区



上野遺跡 II 区



上野 1 号墳検出状況(西から)



上野 1 号墳盛り土除去状況(北から)

カラー図版4

竹ノ崎遺跡



調査前全景(東より)



4区2号 横穴墓拓影

竹ノ崎遺跡



1区 土層



2区 土層

カラー図版 6

竹ノ崎遺跡



出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国縦貫自動車道と接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の発掘調査は、平成4年1月に建設省道路局長から日本道路公团に三刀屋・松江間について調査開始の指示があり、同年4月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いているが、平成5年9月には工事実施計画が認可された。この様な状況を受け、県教育委員会では平成6年3月から500m幅を対象に分布調査を実施し、三刀屋・松江間の9割あまりについて踏査した。

県教育委員会では、この調査結果をもとに、同年6月と8月に道路公团と調査の打ち合わせを行ったが、500m幅での分布調査であったことから、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を公團に要望した。翌平成7年4月には残りの分布調査を終え、公團に回答した。

平成7年4月には、日本道路公团、島根県教育委員会、島根県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、第1回の連絡会を8月に行った。この会議では平成8年度から埋蔵文化財の発掘調査にはいることを前提に用地買収等の調査環境整備について協議を行い、さらに2回に及ぶ連絡会で調整し、平成8年度から発掘調査にはいることが決定した。これを受け、発掘調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根支部に委託するため、平成8年3月26日に日本道路公团、島根県教育委員会、社団法人中国建設弘済会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を交わし、本格的に調査にはいることとなった。

本格的な発掘調査は平成8年度から開始した。同年の調査は主に宍道町内の遺跡が対象となっており、試掘調査を含め、白石大谷I遺跡など7遺跡について実施した。

平成9年度には調査対象地を玉湯町内にも広げた。試掘調査を含め22遺跡について発掘調査を行い、本書に掲載した上野遺跡・竹ノ崎遺跡も同年の調査である。

平成10年度も玉湯町・宍道町の遺跡を対象に、試掘調査を含め22遺跡の調査を実施した。上野遺跡については平成9年の調査で、上野1号墳の調査の一部が残ったため、同年8月まで発掘調査を行った。また、玉湯町内での調査は同年に終了した。

平成11年には宍道インターチェンジ以南の宍道町、加茂町、三刀屋町の遺跡を対象に試掘調査を含め15遺跡の調査を実施した。

平成12年には、三刀屋町馬場



第1図 調査地の位置

遺跡の発掘調査を実施し、本報告書にかかる遺物整理を行っている。

本書で報告する遺跡は穴道町内に所在する上野遺跡、竹ノ崎遺跡である。上野遺跡は平成9年5月から平成10年8月まで、竹ノ崎遺跡は平成9年4月から同年10月まで調査を行った。

上野遺跡は、分布調査時に山城の可能性を指摘され調査地とした遺跡であったが、平成9年2月に伐採が行われ、大型古墳が存在することが明らかになり、予定を変更して調査開始を早め、平成9年5月から試掘調査を開始した。その結果、古墳時代前期に遡る大型円墳である可能性が高まったため、現状保存の可能性を模索していたが、インターチェンジ予定地内であったため設計変更ができず、発掘調査による記録保存とすることになった。平成9年6月19日には主体部の存在を確認、トレチから銅鏡・玉類が出土、同年11月には剣が出土している。同年には5月・6月・9月、12月の数次に亘り調査指導を受け、12月には現地説明会を行い、約50名の見学者が訪れた。同年の調査は、I区とした南半の弥生集落の全てとII区とした古墳群の大半の調査を終えたが、上野1号墳主体部付近の掘削を残し、12月28日に調査を終了した。翌平成10年には、上野1号墳の中心主体部の構造と墳丘の築造過程の解明を目指し、4月初より調査を再開した。粘土構の被覆粘土を調査中の6月4日には被覆粘土中から柄の漆皮膜を残した全長約2mの槍が出土している。これを受け6月12日には現地説明会を行い約50人の見学者が遺跡を訪れた。槍と、それと一緒に出土した剣については、漆皮膜部分の依存状況が良好であったため、(株)京都科学に依頼し、7月24日に切り取りを行った。8月6日には先鋒し㈱アイシーによる空中写真撮影を行って調査を終了した。

竹ノ崎遺跡は、国道54号線に接する東向きの谷で、北側斜面には凝灰質砂岩の路頭があり、調査前より横穴墓2穴が開口しており、時代が特定できないが、横穴墓内に線刻壁画も見られた。調査は、平成9年4月9日から開始し、谷地形の内側からは明確な遺構は検出できなかったが、弥生時代後期から古墳時代を中心とする多量の遺物が出土した。排土の搬出ができないため遺跡を4分割して排土を持ち送りながら発掘を行い10月8日に調査を終了した。その後、竹ノ崎遺跡2号横穴墓内の線刻壁画部分については来待ストーンミュージアムが切り取りを行い、同館で展示保存している。

第2章 調査地の位置と歴史的環境

上野遺跡・竹ノ崎遺跡は島根県八束郡宍道町佐々布に所在する。宍道町は宍道湖の南西岸に位置し、松江市からは西へ約17kmの距離にある、人口約9,500人の町である。町内で山陰を東西に貫く国道9号線と山陰山陽を結ぶ国道54号線が交わり、出雲空港（斐川町）も間近に位置する交通の要所である。東は八束郡玉湯町に、西は簸川郡斐川町に、南は大原郡大東町と加茂町に接している。

宍道町は、宍道湖に注ぐ佐々布川、同道川、来待川によって形成された小さな谷平野が点在する地形となっており、古代から形成されたと思われる広い平野は見られない。来待地区では凝灰質砂岩である来待石が産出され、石灯籠などに加工された製品は地場産業になっているが、この石材は、古墳時代から石棺の石材などに利用されている。

天平5年の年記を記された「出雲國風土記」には、所造天下大神が追いかけた猪の像が在るとして「宍道」の地名の由来と記されている。^(註1)この猪の像（猪岩）については近世以来多くの研究が見られるが、大字白石にある女夫岩と呼ばれる巨石をこれに当てる説も見られる。^(註2)女夫岩は現在界指定史跡女夫岩遺跡として、上野遺跡・竹ノ崎遺跡の東500m程の所に位置している。

宍道町内で旧石器時代の明確な遺跡は知られていないが、白石の堤平遺跡ではナイフ形石器^(註3)1点が出土している。また、佐々布の首谷遺跡では、玉削製の細石核が採集されており、当時の生活跡の発見が期待される。

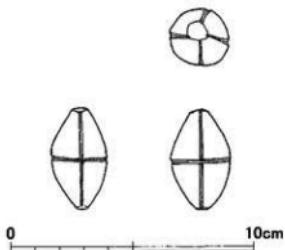
縄文時代の遺跡も少ないが、東来侍の弘長寺遺跡からは多量の石器が出土したことが知られている。また、近年の調査では白石の野津原Ⅱ遺跡から有茎尖頭器^(註4)が出土するなど縄文時代でも草創期からの活動の痕跡が見える。野津原Ⅱ遺跡では、落とし穴も確認されており、狩猟の場であったことがうかがえる。東来侍の三成遺跡からは後期から晩期の土器が出土しており、漁労に関わる遺跡と考えられている。

弥生時代になると遺跡の数は急増し、白石から佐々布地区にかけては白人谷Ⅰ・Ⅱ^(註5)遺跡、野津原Ⅱ^(註6)遺跡、山守免遺跡、矢頭遺跡、北ヶ市遺跡など後期の集落が多く見られる。本書に収録した上野遺跡も同時期の集落であり、北ヶ市遺跡を除き、平地から離れた尾根上に立地する集落が目立つ。平成8年と10年に調査を行った野津原Ⅱ遺跡は標高約90mの高所に所在する集落で、弥生後期の一定期間に存在した単位集落と考えられる遺跡である。竪穴建物跡や加工段などの遺構に多数の土器が伴って検出されている。平成10年度に行った調査では、高所に所在する遺跡に限らず、土鍤^(第3図)が出土している。平成11年に調査された佐々布の上野Ⅱ遺跡では、鐵素材と考えられる鉄片など鍛冶の痕跡がうかがわれる資料も出土しており、注目されるものである。弥生時代の遺跡としては、集落遺跡の他に東来侍の知原1号墓や白石の清水谷2号墓と言った墳墓も知られており、近年では東来侍の三成遺跡の墳墓も弥生時代のものと考えられるようになった。宍道町の木幡家には出土地不明ながら1点の銅鐸が伝えられている。この銅鐸は、いわゆる「福田型」と呼ばれるもので、邪視文と呼ばれる目や水鳥が描かれている。出土の経緯は明らかでないが、宍道町周辺で出土した可能性が高く、弥生墳墓の存在と合わせ、宍道町域に弥生中期から後期にかけて大きな勢力が存在した可能性を示すものとして注目される。

古墳時代の集落は白石の山守免遺跡・矢頭遺跡、佐々布の上野Ⅱ遺跡など少数の遺跡しか知られ

第2図 上野遺跡・竹ノ崎遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:35,000)





第3図 野津原II遺跡(西区)
出土土錐(S=1:2)

野1号墳がある。平成12年に発掘調査を行った杓子観音I-1号墳は遺物を伴っていないが、古墳時代前期に含まれる可能性がある。

中期になると古墳の数は急増する。佐々布から宍道にかけて足頭古墳群・水溜古墳群などが築かれる他、上野遺跡の上野1号墳を除く古墳群も、多くがこの時期に含まれるものと思われる。水溜古墳群は宍道湖南岸地域では最大級の古墳群で、現在30基の古墳が確認されている。この内5号墳は1辺約25mの大型方墳で、円筒埴輪・朝顔形埴輪の存在が確認されている。来待地区では、松石古墳群や横田古墳が知られる。西来待の横田古墳は、「白米待」とか「白粉石」と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩で造られた舟形石棺の蓋が出土している。同様の石材は玉湯町でも多く見られ、徳通場古墳・玉造築山古墳で、同様の石材を利用した舟形石棺が見られる他、岩屋遺跡では箱形石棺にも使用されている。

後期にはいると横穴式石室を持つ古墳と横穴墓が多く造られるようになる。同道川流域では、前方後円墳である椎山1号墳や石棺式石室を持つ伊賀見1号墳・下の空古墳が造られており、これらの古墳の石室には来待石が使用されている。来待川流域では知原2号墳、知原B古墳が横穴式石室を持つ古墳であるが、これらの石室の石材は自然石等を組み合わせたもので、この地域の横穴式石室としては来待石を使用しない点が却って注目されている。鏡川流域に位置する鏡北堀古墳の石室も来待石を加工したもので開塞石には門を表現した浮き彫りが施されている。

河川を臨む斜面や宍道湖に面した低丘陵には横穴墓が多く見られる。来待地区的弘長寺横穴群や白石地区の才横穴群など古くから知られる横穴墓がある一方、近年に行われた宍道インター線建設に伴う発掘調査でも荻田地区の鷹崎古墳群・屋敷古墳群・長廻古墳群で横穴墓が多数発見された。

奈良時代にはいると、全国で唯一完本で伝えられる「出雲國風土記」によって、当時の様子をうかがうことができる。それによると当時の宍道町は、意宇郡押志郷の一部と宍道郷・宍道駅家から成り、一部が出雲郡健部郷に掛かる可能性がある。

佐々布の荻田遺跡は鐵冶炉を持つ集落遺跡で、奈良時代の鐵生産に関わる遺跡として注目される。白石の堤平遺跡は、布堀建物跡や埴垣柱建物跡を持つ奈良～平安時代の遺跡であるが、この遺跡の出土遺物には鐵鉢形土器や灯明皿型須恵器、銅製品、ヘラ書き土器や墨書き土器などの文字史料も出土しており、仏教に関係する遺跡として注目される。古代寺院の範疇に含まれるものとすると町内唯一の遺跡となる。

平安時代の遺跡は多くは知られていないが、西来待小松古墳群は平安時代の須恵器窯跡として

ていない。一見、弥生時代に比べ減少するように見えるが、現在の集落に重なる平野部に分布しているものと想像される。生産遺跡では白石大谷I遺跡の炭窯が知られている。また、前出の女夫岩遺跡からは古墳時代中期の土器が出土しており、女夫岩の巨石信仰が古墳時代にまで遡る可能性を示した。一方で、古墳・横穴墓は数多く知られており、現在では100あまりの遺跡が確認されている。

前期の古墳としては、東来待の知原1号墳、佐々布の佐々布下1号墳が知られているほか、本書に掲載した上

⁽³¹⁾

⁽³²⁾

⁽³³⁾

⁽³⁴⁾

⁽³⁵⁾

⁽³⁶⁾

野1号墳は遺物を伴っていないが、古墳時代前期に含まれる可能性がある。

⁽³⁷⁾

⁽³⁸⁾

⁽³⁹⁾

⁽⁴⁰⁾

⁽⁴¹⁾

⁽⁴²⁾

知られている。また、白石大谷Ⅱ遺跡では、平安時代末から鎌倉時代初め頃と考えられる土器が出土している。^(注30)

穴道町周辺で中世の集落の実体は明らかでないが、町内では数多くの中世山城が知られている。当時からも重要な交通路であったと思われる現在の国道54号線を見下ろす丘陵上には、数多くの中世山城が知られており、穴道氏の本拠地と伝えられる金山要害山城は標高148mの雄大な山塊を利用して造られたものである。町内に数多く知られる山城について表面観察による研究は多く行われてきたが、来待地区の勝負廻Ⅰ遺跡^(注41)と佐々布地区の城山遺跡^(注42)については、中国横断道建設に伴って発掘調査が行われ、中世山城の実体をかいま見ることができた。

西来侍の知原古墓群は、中世末から近世初頭と考えられる墓が確認されている。この内4号墓からは、「京都系」と言われる手づくねの土師器が3点出土している。^(注43)

以上のように、穴道町周辺は弥生時代より特色ある集落や墳墓が数多く造られており、古くから交通の要所として栄えたことがうかがわれる。

註1 『修訂出雲国風土記参究』

森田喜久男「第三章古代」「穴道町史史料編」穴道町史編纂委員会1999年

註2 森田喜久男「猪と犬のゆくえ」「鳥根の古代文化三」鳥根県古代文化研究センター1996年 『女夫岩遺跡を考える』穴道町教育委員会1996年

註3 丹羽野裕「一 堤平遺跡」「穴道町史史料編」穴道町史編纂委員会1999年

註4 丹羽野裕「鳥根県における旧石器時代研究の現状と課題」「鳥根考古学会誌第8集」1991年

註5 丹羽野裕「穴道町弘長寺遺跡出土の石器について」「穴道町歴史叢書3」穴道町教育委員会1998年

註6 「勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡」
鳥根県教育委員会2000年

註7 池田満雄・東森市良「四、三成遺跡」「山陰本線玉造温泉・来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告」1968年

註8 「(6)白石大谷Ⅰ遺跡」「鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報V」鳥根県教育委員会1997年
『勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』

鳥根県教育委員会2000年

註9 「勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡」
鳥根県教育委員会2000年
『野津原Ⅱ遺跡(西区)・女夫岩西遺跡・城山遺跡』鳥根県教育委員会2000年

註10 「勝負廻Ⅰ遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡」
鳥根県教育委員会2000年

註11 『清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書』穴道町教育委員会1985年

註12 木下誠「一二 北ヶ町遺跡」「穴道町史史料編」穴道町史編纂委員会1999年

註13 「(4)上野Ⅱ遺跡」「鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報V」鳥根県教育委員会2000年

註14 山本清・西尾克己・稻田信・木下誠「知原墳墓群とその性格」「穴道町歴史叢書4」穴道町

教育委員会1999年

西尾克己「穴道町の古墳時代」穴道町教育委員会1992年

- 註15 「清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書」穴道町教育委員会1985年
- 註16 池田満雄・東森市良「四、三成遺跡」「山陰本線玉造温泉・来侍間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告」1968年
- 註17 近藤正「島根県下の青銅器について」「島根県文化財調査報告第二集」島根県教育委員会1966年
春成秀爾「最古の銅鋒」「考古学雑誌 第70巻第1号」1984年
- 註18 「女夫岩遺跡第1次発掘調査報告書」島根県教育委員会・穴道町教育委員会1999年
- 註19 「杓子鏡音I-1号墳」「島根県教育府埋蔵文化財調査センター一年報IX」島根県教育委員会2001年
- 註20 稲山 信・宮本正保「三二 足頭古墳群」「穴道町史史料編」穴道町史編纂委員会1999年
- 註21 「水溜古墳群」穴道町教育委員会1988年
- 註22 「松石古墳群」穴道町教育委員会1978年
- 註23 稲山 信「穴道・横田古墳」「島根県埋蔵文化財調査報告書XIV」島根県教育委員会1986年
- 註24 山本 清「山陰の石棺について」「山雲の古代文化」1989年
- 註25 山本 清「山陰の石棺について」「出雲の古代文化」1989年
- 註26 「(s)岩屋遺跡」「島根県教育府埋蔵文化財調査センター一年報VI」島根県教育委員会1998年
- 註27 「椎山古墳群調査報告書」穴道町教育委員会1989年
- 註28 山本 清「穴道町の古墳及び出土品」「穴道町誌」穴道町1963年
『穴道町埋蔵文化財調査報告2』1980年
角田徳幸「石棺式石室の系譜」「島根考古学会誌第10集」1993年
- 註29 山本 清「穴道町の古墳及び出土品」「穴道町誌」穴道町1963年
『穴道町埋蔵文化財調査報告2』1980年
『石と人』穴道町教育委員会1995年
- 註30 山本 清・西尾克己・稻田信・木下 誠「知原墳墓群とその性格」「穴道町歴史叢書4」穴道町教育委員会1999年
西尾克己「穴道町の古墳時代」穴道町教育委員会1992年
- 註31 「石棺式石室の研究」出雲考古学研究会1987年
『松石古墳群』穴道町教育委員会1978年
- 註32 「松石古墳群」穴道町教育委員会1978年
- 註33 「穴道町埋蔵文化財調査報告2」穴道町教育委員会1980年
- 註34 「(s)屋敷古墳群」「(s)長廻古墳群」「(s)勤崎古墳群」「島根県教育府埋蔵文化財調査センター一年報VII」島根県教育委員会1999年
- 註35 森田喜久男「穴道町史史料編」穴道町史編纂委員会1999年
- 註36 村上 勇「穴道・荻田住宅団地遺跡I」「島根県埋蔵文化財調査報告書XII」島根県教育委員会1986年
村上 勇「穴道・荻田住宅団地遺跡II」「島根県埋蔵文化財調査報告書 XIV」島根県教育委員会1990年

員会1988年

西尾克己・稻田信・木下誠「出土品から見た荻田遺跡の性格」『宍道町歴史叢書3』宍道町教育委員会1998年

註37 林 健亮「五五 堤平遺跡」『宍道町史史料編』宍道町史編纂委員会1999年

林 健亮「灯明皿型土器から見た仏教関係遺跡」『出雲古代史研究第一〇号』2000年

註38 『小松古窯跡群範囲確認調査報告書』宍道町教育委員会1983年

註39 『勝負廻 I 遺跡・白石大谷 II 遺跡・シトギ免遺跡・野津原 II 遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』島根県教育委員会2000年

註40 『島根県中世城館分布調査報告書第2集 出雲・隠岐の城館跡』島根県教育委員会1998年
山根正明「宍道町の山城」宍道町教育委員会1991年

山根正明「宍道の中世城館について」『尼子氏の総合的研究』1992年

註41 『勝負廻 I 遺跡・白石大谷 II 遺跡・シトギ免遺跡・野津原 II 遺跡・山守免遺跡・石地蔵遺跡』島根県教育委員会2000年

註42 『野津原 II 遺跡（西区）・女大岩西遺跡・城山遺跡』島根県教育委員会2000年

註43 山本 清・西尾克己・稻田 信・木下 誠「知原墳墓群とその性格」『宍道町歴史叢書4』宍道町教育委員会1999年

第3章 上野遺跡I区

第1節 上野遺跡I区の位置と調査の概要

上野遺跡は、宍道町佐々布の国道54号線を見下ろす標高約70mの南北に延びる丘陵尾根上に位置する。遺跡中程に山道が横断しており、便宜的に山道より南側を上野遺跡I区、北側をII区とした。上野遺跡II区は上野1号墳を中心とする古墳群からなり、調査区北側の尾根筋まで古墳群が続くようである。この付近は中世に山城として利用された可能性が考えられ、多くの古墳は頂部に削平を受けている。調査対象地は、尾根上を中心に南北に長細く設定し、約13,000m²となった。

上野遺跡I区は、佐々布要害山から北に派生する尾根の最高所（標高約75m）から北に延びる尾根上に立地する。尾根筋は比較的幅のある平坦面が連続する地形となっているが、東西の斜面は急傾斜となって大きく落ち込んでいる。遺跡南側は中世の山城である佐々布要害山城跡があり、北側は宍道町の市街地や宍道湖、北山などを見通せる。東側は国道54号線を挟んで女夫岩遺跡、水溜古墳群などがある。西側には弥生後期と古墳中期の集落である上野II遺跡が間近に見える。上野II遺跡との間は、深い谷が入り込んでいるが、調査区南側で尾根が廻っており、尾根伝いに廻れば、短時間で行き来することができる位置関係となる。

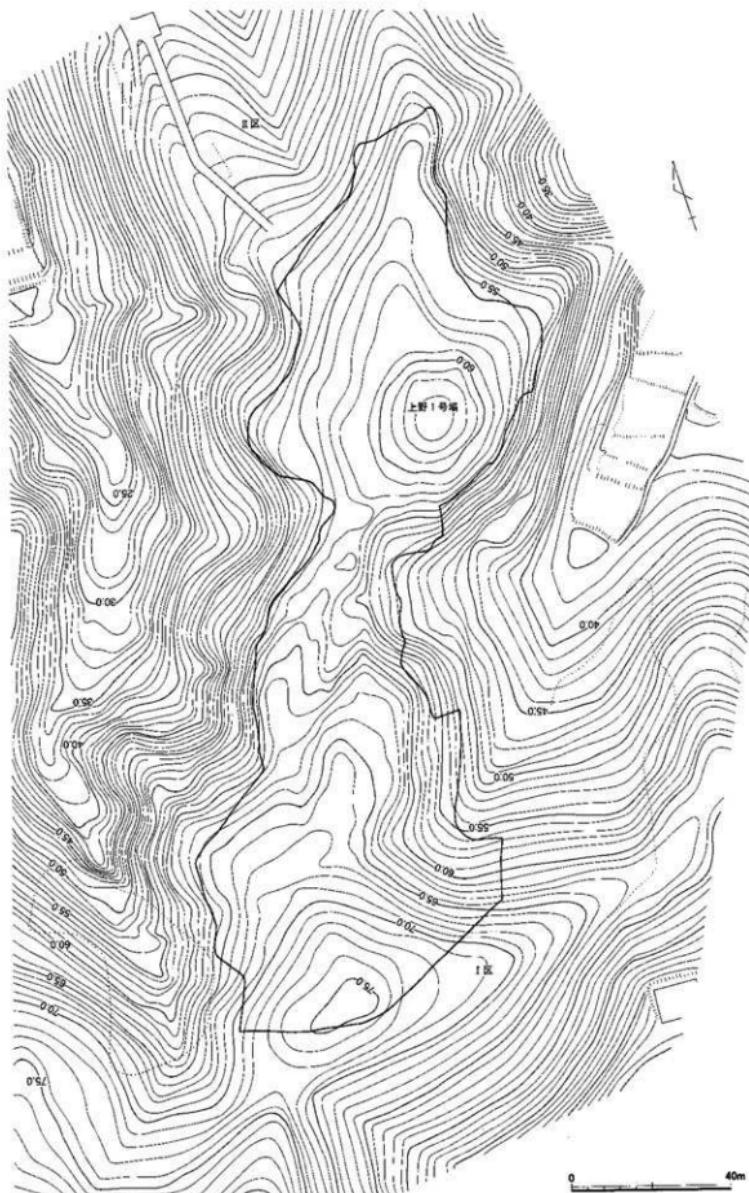
調査区南端は、遺跡最高所にあたり標高は約75mである。注連縄を張った才の神さんが見られ、付近は完全に半らに削平されている。この付近に設定したトレンチ10では、遺構は見られず、数点の弥生土器小片を探査したにとどまった。表土直下に地山ブロックを含む褐色土が見られたが、時期を示す遺物は見られなかった。周囲の状況から、中世の山城による造成土ではないかと想像している。この平坦面の周囲の斜面は急傾斜で落ち込んでいるが、トレンチ14から多量の弥生土器が出土したほか、トレンチ13から平坦に造成した面が、トレンチ12では弥生後期と考えられる建物跡の遺構を確認した。トレンチ10からも弥生土器小片が出土していることから、最高所の平坦面上にも弥生時代の遺構が広がっていたものと考えられる。

上野遺跡I区には、尾根筋をほぼ南北に継断する道が走っており、道部分では幅3mに亘って、削られ、落ちくぼんでいた。そのため、トレンチ22・23・25など、道を避け、その両側斜面での遺構の広がりを確認しようとした。トレンチ22では、道に関わるものか、数次に亘り土砂を積み重ねた痕跡が見られたが、その時期を示す遺物は見られず、明確な遺構も見られなかった。尾根筋に設定した各トレンチからはいずれも少量の弥生土器片が出土しているほか、上野遺跡I区北端に設定したトレンチ26からは上野1号墳のものと考えられる埴輪片も出土している。

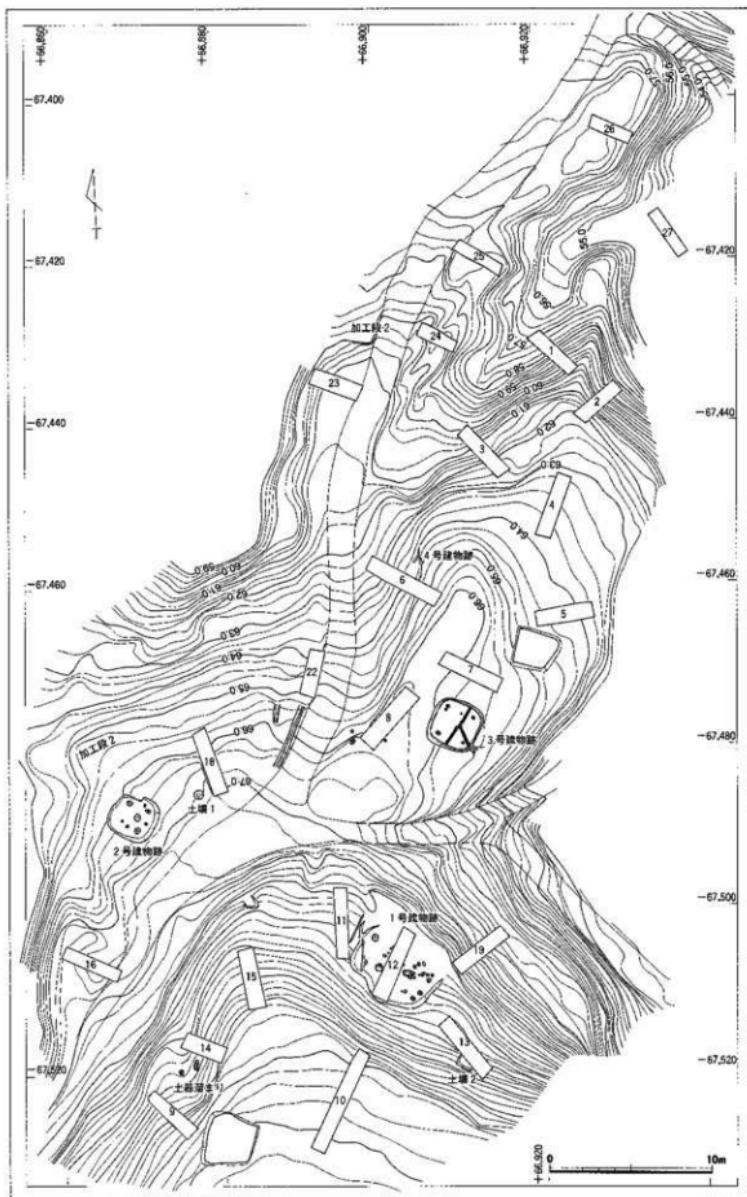
トレンチ1～8を設定した部分は、尾根筋との間に小さな谷を挟んだ標高約66mの幅の広い尾根で、遺跡最高所と同様に才の神さんがあり、周囲は平坦に造成されていた。トレンチからは、遺構・遺物はほとんど確認できなかったが、中世山城の可能性が考えられたため、全面掘削を行った。

I区北端にあたる部分は、尾根上を南北に継断する道と東側の谷に降りる道がT字路になっている。東へ向かう道の両側斜面は急峻に削られており、上野1号墳周辺と、トレンチ26付近の標高がほぼ一致しており、元々一連の尾根筋だったものと考えられる。周辺から遺物は出土していないが、この部分の加工は、中世山城の堀切であった可能性が高い。

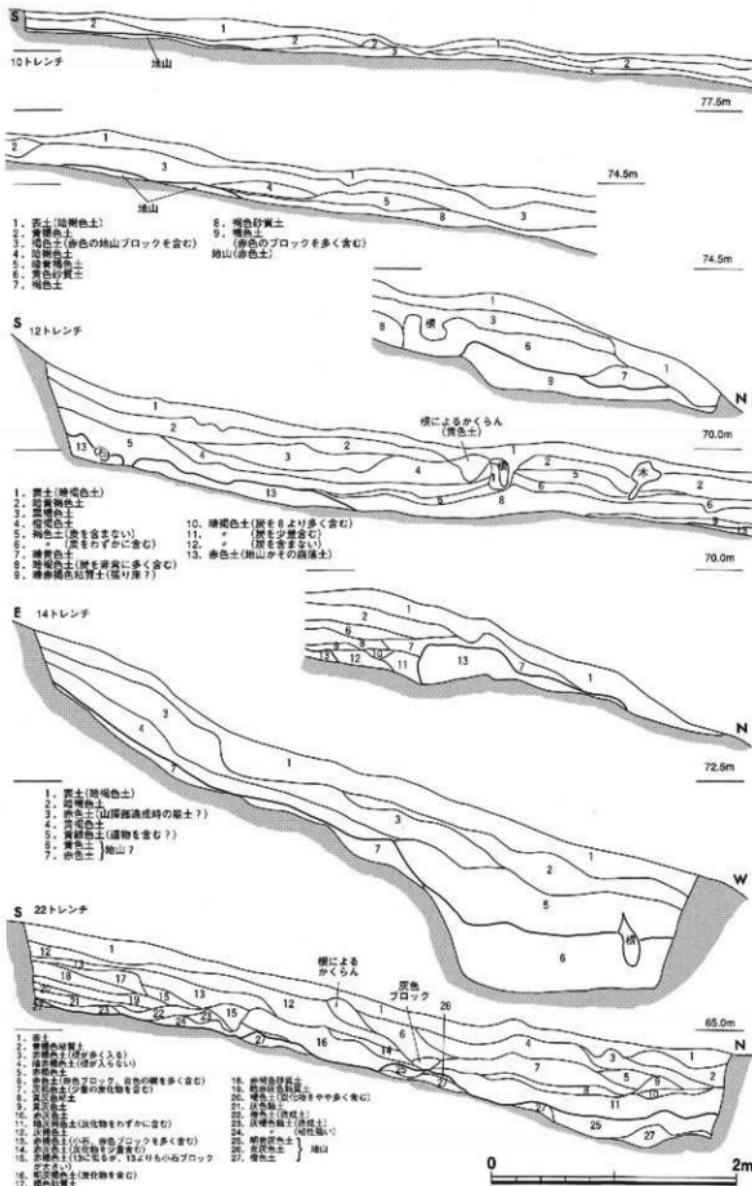
トレンチ調査の結果、上野遺跡I区では、後世の削平が多く見られるものの、弥生後期の遺構が



第4図 上野遺跡の調査範囲(S=1:1,200)



第5図 上野遺跡I区トレンチ配置図・遺構配置図(S=1:300)



第6図 上野遺跡I区トレンチ土層堆積状況(S=1:40)

残存している可能性が高いと考えられた。全面調査の結果、弥生時代後期の建物跡4棟の他、加工段・土壌・溝を検出した。また、トレンチ14付近からは、一括性が高いと考えられる上器群を検出している。以下、遺構ごとに説明する。

第2節 弥生時代の遺構・遺物

1号建物跡 1号建物跡（第7図）は、調査区南端近くの標高約70mを測る北向き斜面で検出した大型の建物跡である。ほぼ半周以上と思われる部分の床面と壁体溝を確認したが、盛り土によるとと思われる北側部分は検出できなかった。床面はほぼ水平で、南側の壁面は高さ約80cmを測る。南側の壁面より上方は、急斜面となっており、周囲の状況から斜面の傾斜変換点を狙って造られたものと思われる。周辺の北ヶ市遺跡や野津原Ⅱ遺跡などでの豊穴建物跡では建物跡の周囲に溝をめぐらすものが多く見られたが、上野遺跡ではそうした施設は見られない。土層断面では、山手側（南側）から流れ込んだと考えられる土砂（第7図6・7層）を除くと、いずれの土層も炭や焼け土を含んでいたことが注意される。壁体溝周辺には炭化材が残っており（第8図）、建物が焼失したものと考えられる。また、床面直上では、上方から流れ込んだとは思えない拳大から人頭大の礫が多く見られることから、建物が意図的に放棄された可能性も想像される。

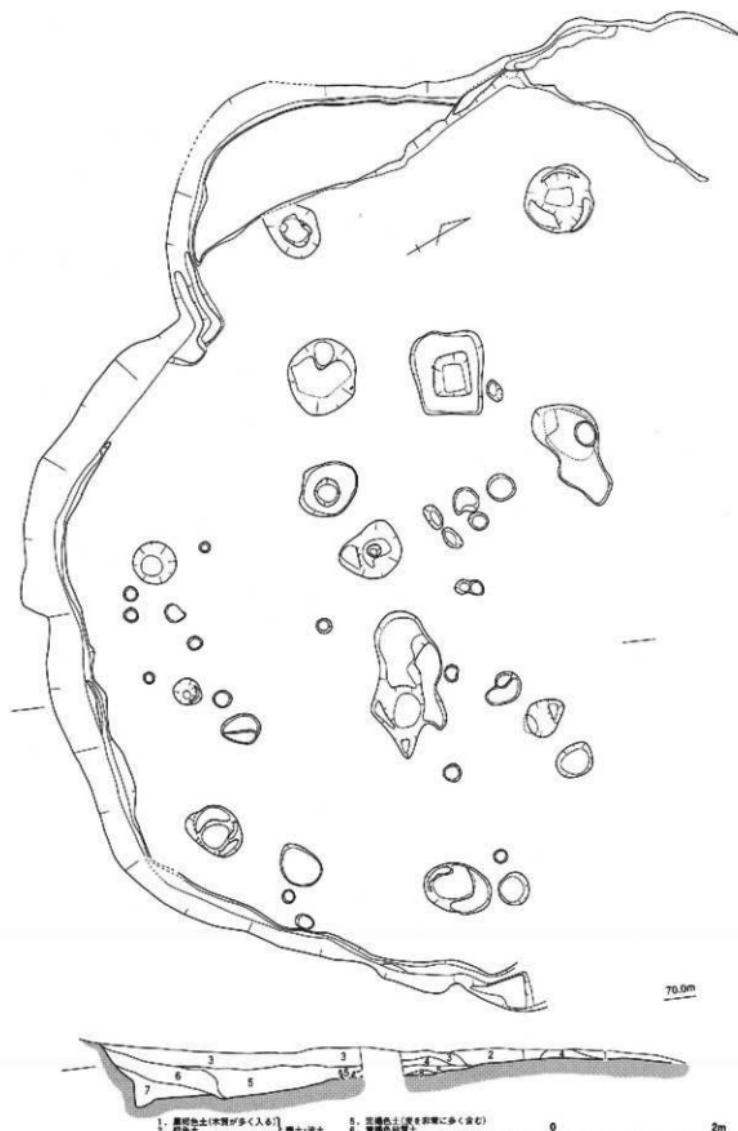
遺構全面を検査すると、遺構西側の一画が、不自然な段差（第7図）となって現れた。西側に飛び出して見える部分は、他の部分の床面より20cm程高く、床面との間に数センチの隙間が見られる部分も見られたことから、地滑り断層と考えられる。周囲の形状から他の建物跡との切り合いである可能性も検討したが、西側部分については、柱穴が全く見られず、壁体溝に見える部分も断面V字形を呈し断層の亀裂である可能性が高い。段差の周辺でだけ全く遺物が出土しないと言った事から、建物跡等の遺構ではなく、地滑りによる自然地形と判断した。

1号建物跡床面からは前述のとおり、炭化材や礫が出土している他、遺構中央よりやや南東寄りの位置で、山陰系瓶型土器がつぶれた状態で出土している（第8図）。1号建物跡から出土した他の土器片は、いずれも小片で、床面から完形に近い形状で出土したものはなく、この山陰系瓶型土器だけが意図的に残されていたかの様な印象を受ける。

1号建物跡は、幅約11m、奥行き約7mの範囲で床面を検出し、壁体溝が確実に残る南西側から判断すると、平面6角形を呈するものと考えられる。床面からは、大小40か所にも及ぶ柱穴状の落ち込みを検出しているが、この内、壁体溝のコーナーに接して位置する3穴や、東西方向に一直線に並ぶ4穴などが柱穴になるもの（第9・10図）と考えられる。確認できた範囲内では、入り口にあたるような部分は確認できない。床面の北西側には、1×0.7mの長方形の土壌が見られる。この土壌は、深さ約40cmを測る2段に掘られた土壌で、他の落ち込みとは明らかに形状が異なり、柱穴以外の用途が考えられる。埋土には、少量の炭を含んでいたが、他の部分の埋土にも炭を含む部分が多く見られることから、火に觸れる施設とは思えない。

柱穴位置が確実ではなく、遺構の約半分が検出できなかったことから、建物の上屋の構造は不明であるが、6角形のコーナー毎に補助柱穴を配し、1対角線上に主柱穴があると仮定すると、1条の長い棟から3面ずつの屋根が延びるような形状が想像される。

1号建物跡で出土した遺物は、前述の山陰系瓶型土器の他、少量の弥生土器片（第11図）が見られる。小片となって出土しており、ほとんど接合資料もなく図示できたものは僅かであった。磨



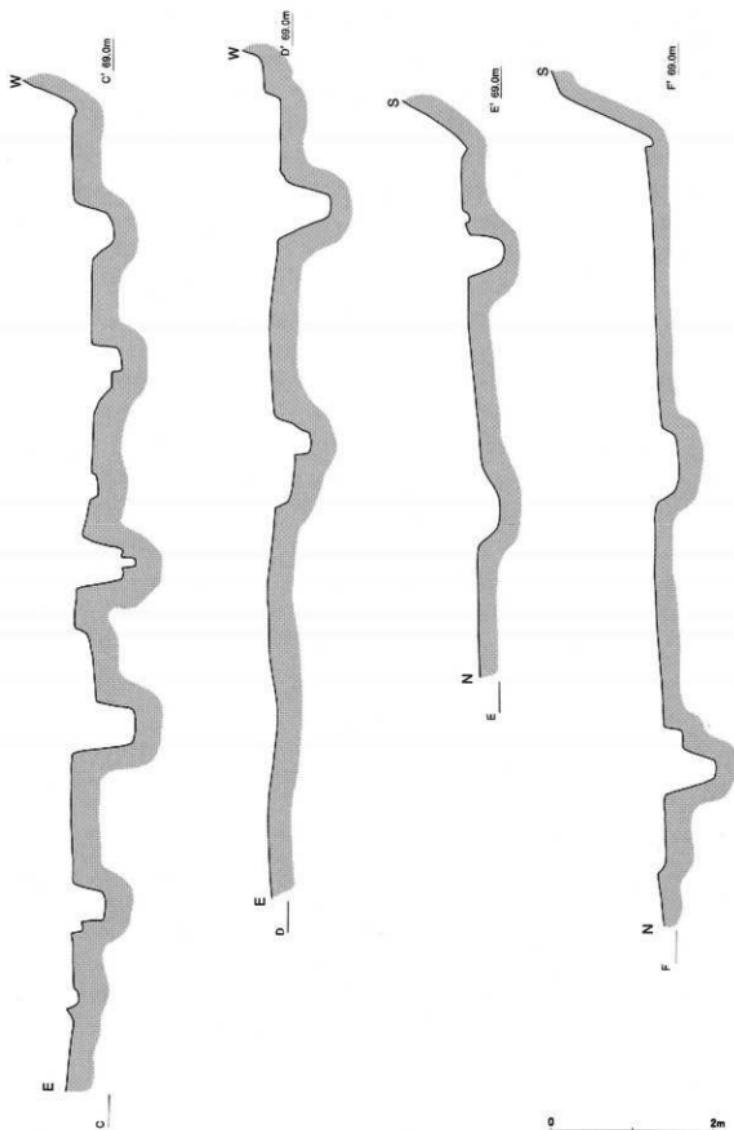
第7図 1号建物跡土層堆積状況(S=1:60)



第8図 1号建物跡遺物出土状況(S=1:60、遺物は1:12)



第9図 1号建物跡断面図(1)(S=1:60)



第10図 1号建物跡断面図(2) (S=1:60)

減が進んでいるものが多く、小片であることから、1号建物跡に伴わない流れ込みによるものである可能性が高い。

11-1～4は壺である。いずれも器壁の薄い口縁部の小片で、複合口縁を呈し、口縁部は外反しながら高く延ばしている。複合口縁の外向はヨコナデされ、口縁部先端を尖り気味にする。複合部の稜は、いずれもほとんど突出させない。口縁部内面はヨコナデし、11-1は頸部より下方をヘラケズリしている。松本編年のV-4様式に当たるものと思われる。⁽²⁴⁾

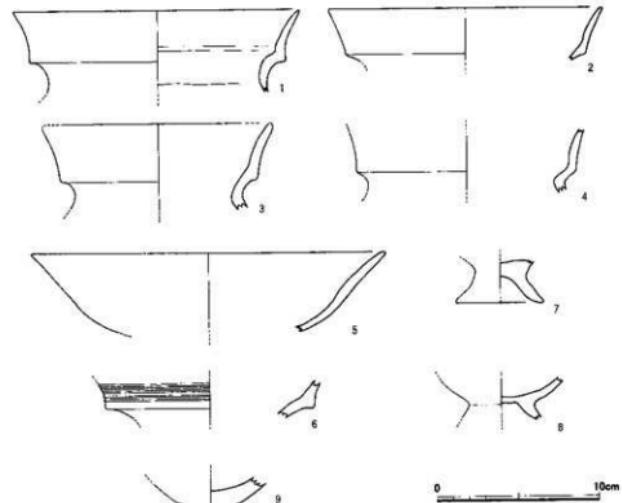
11-5は高壺の坏部である。坏部は緩やかな丸みを持ち、口縁部近くは直線的で、僅かに外反する。坏部中程で、口縁に向けて直線的になる部分から上方は、やや器壁が厚くなっている。口縁部先端は、外面に向けて僅かに面を持つように丸める。内外面ともに磨滅が進んでおり、調整は見えない。松本編年のV-4以降であろうか。

11-6は鼓形器台の受け部である。口縁部の先端を欠く複合口縁の下半部分の小片で、複合部の稜は僅かに下方に垂下させる。口縁部の外面には、貝による疑凹線を巡らせてある。内面調整は磨滅のため不明である。松本編年のV-3様式に含まれるものと思われる。

11-7は低脚坏である。脚部の小片で、坏部の形状は不明である。緩やかに外反しながら延びる脚部は、端部を丸みをもって納めている。磨滅しているが、ナデ調整に見える。松本編年のV-4様式に含まれるものであろうか。11-8も同様の脚部の小片であるが、器壁が薄く、脚部の取り付け位置が、坏底部中央からやや離れ、高台状に付くものである。低脚坏か、脚付きの鉢のような器形が想像される。

11-8は赤生土器底部の小片である。直径約3cmの平底となっており、器壁は厚い。内外面とも磨滅が進み、調整は明瞭でないが、外面はナデ、内面はケズリであろうか。

第12図に図示したものは、1号建物跡床面で出土した山陰系瓶型土器である。出土した破片の量



第11図 1号建物跡出土遺物(1) (S=1:3)

からすると、完形品であったと思われるが、磨滅が著しく接合できた破片は僅かで、特に胴部中程の破片はほとんど接合できなかった。ほぼ一周を復元できた口縁部付近の形状から無理のない復元を試みたつもりであったが、歪みが大きくなり高さや口径の口徑は不

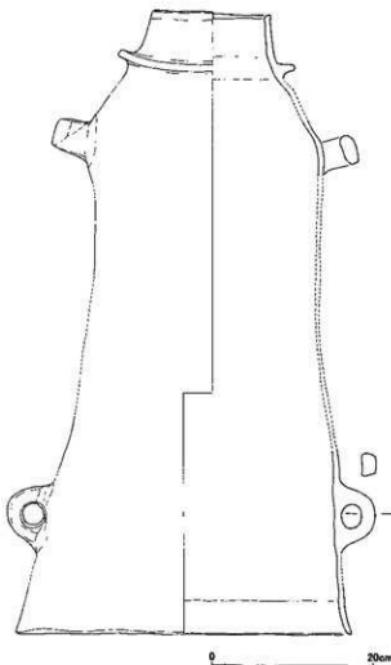
明であり、全体のプロポーションも復元実測図とは異なるものであったかもしれない。

僅かに内傾して立ち上がる口縁部は、端部に面を持っている。また、口縁端部内面にも明確なアクセントが見られる。口縁端部から6cm程下がった位置に高さ2.5cmを測る断面台形の鉢状の突出部を巡らせていく。胴部上方に一対、下方に一対の半環状の把手を付けている。把手は、上方のものは水平方向からやや傾斜させ、下方のものはほぼ垂直方向に、器壁側に穿孔して張り付けられている。前述のとおり、胴部の形状は明らかでないが、下端部は僅かに外反し、端部に狭い面を持つ。磨滅のため明瞭ではないが、下端部は被熱しているように見える。

1号建物跡で出土したものの内、時期を特定できる遺物は、鼓形器台と甕であるが、それらの時期は松本編年のV-3~4様式に含まれるものであった。前述のとおり、これらの遺物が1号建物跡に直接は伴わない可能性も大きいが、確実に伴う山陰系瓶型土器(第12図)の形状も大きく矛盾しないと考えられ、1号建物跡の年代もそれらと同時期と考えたい。

2号建物跡 2号建物跡(第13~15図)は、調査区南端の遺跡最高所から西に広がる緩斜面で検出した竪穴建物跡である。上野遺跡の西側斜面は、大半の位置で急傾斜になっているが、調査区南側の標高67m付近では、一段緩やかになった場所が見られ、この周辺では、2号建物跡の他、加工段・溝・土壌などが見られた。

2号建物跡は、標高約66m付近で検出した竪穴建物跡である。一辺約5mの隅丸方形を呈した落ち込みとして検出されたが、斜面下方に当たる西側の1辺は明瞭ではなく、北側の一部も大きな木の根があったことから掘削できなかった。遺構を十字に切断するようにサブトレンチを設定し十層(第13図)を確認したところ、少なくとも2面以上の遺構面があり、建て替えたある竪穴建物跡であることが判った。土層堆積状況(第13図)では、検出面から約30cm下方に、6炭層が広がっており、その下層の10灰緑色粘土の上面が立て替えた床面であることが判る。10灰緑色粘土は、炭を含んだ不明瞭な土で、平面的に検出することはできなかった。土層断面では壁体溝も見られる。立て替えた後の建物が、建て替えた前よりも小さかったことから、壁面は残っておらず、地山風化土と考えられる4橙色土が斜めに落ち込んでいる。また、床面直上の11橙灰色粘質土も部分的にしか見られない土で、10灰緑色粘質土の下面に入っていることからさらにもう一回の建て替えが考えられ、



第12図 1号建物跡出土遺物(2) (S=1:6)

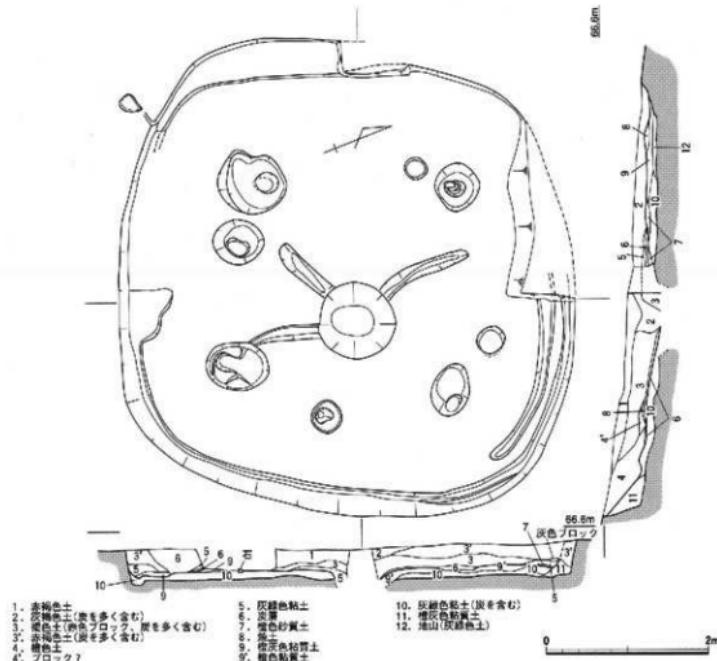
土器(第12図)の形状も大きく矛盾しないと考えられ、1号建物跡の年代もそれらと同時期と考えたい。

床面にもそれに対応する壁体溝が検出できた。以上の事から2号建物跡は、少なくとも2回の建て替えを行っており、その度に建物を小さくしていったものと思われる。

土層断面に見られた10灰緑色土上面の遺構は検出できなかったが、床面近くで2面の遺構面を面的に検出することができた。

上面側の遺構面(第14図)は、壁面が検出できなかったが、柱穴の位置関係から下面遺構に対し、約45°傾いて造られており、平面形も円形に近いものと想像される。柱穴は4穴で、柱間は約2.4mである。北側の2穴は遺存状況が悪かったが、南側の2穴は、2段に掘り進められている。いずれも直径約30cmで、深さは約50cmである。遺構の中央に長径90cm、短径70cm、深さ60cmの中央土壇があり、中央土壇からは2条の溝が延びている。溝は2条とも1m程しか検出できなかったが、断面は半円形を呈し、必ずしも直線的には延びていない。この遺構面に伴うと思われる壁体溝は、遺構北東側で、約2.1mに亘って検出した。下面遺構の壁体溝からは20cm程内側に位置し、検出した範囲内では、柱の位置関係から想像される位置にコーナーは見られない。壁体溝の断面形は緩いV字形を呈しており、5cm程の深さしかなかった。

2号建物跡上面遺構からは遺構東側の壁体溝近くで少量の土器片を検出しているが、いずれも小



第13図 2号建物跡土層堆積状況(S=1:60)

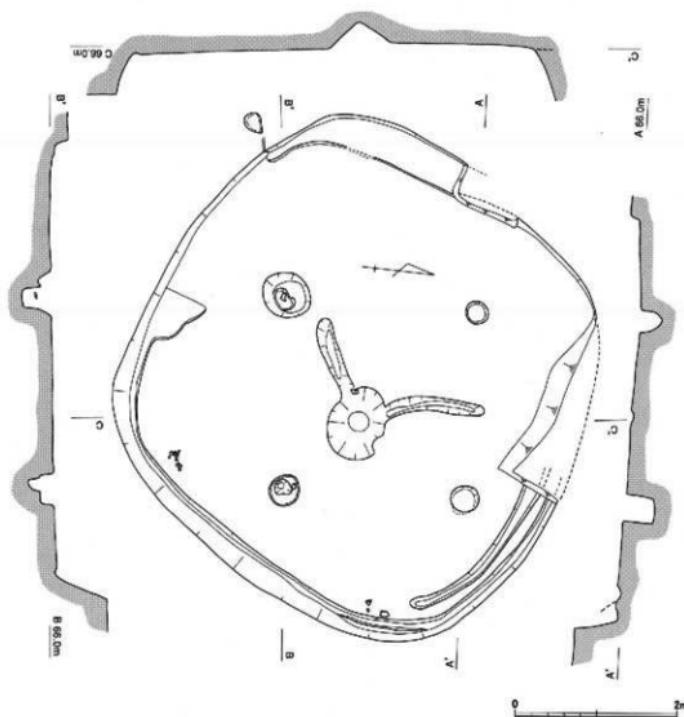
片で、図示でなかった。

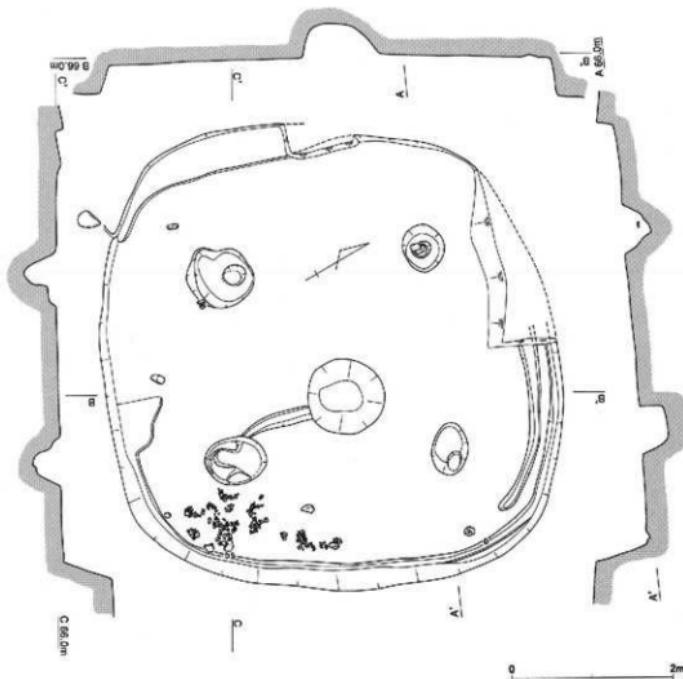
2号建物跡下面遺構(第15図)は、平面隅丸方形を呈した4本柱の竪穴建物である。柱穴は、上面遺構よりもやや大きい直径約50cmで、2段に掘られ、深さは約30cmである。遺構中央には直径約90cmの、ほぼ円形を呈した中央土壙があり、中央土壙から1条の溝が南に延びている。中央土壙から延びる溝は、検出面での見かけ上は、柱穴の1基に連続している。

2号建物跡下面遺構からは、南東側を中心に土器片が出土しており、第16図に図示した。ただし、この付近の埋土は、第13図11櫻灰色粘質土で、下面遺構に伴うものと最上面の平面検出できなかつた遺構の遺物が混じっていると考えられる。

16-1~6は、臺である。いずれも器壁が薄く、複合口縁を直線的に高く延ばすもので、小型のもの(16-1)は、口縁部先端を尖らせている。大型の臺(16-4~6)は3点を図示したが、出土位置が近く、小片であったことから同一個体であった可能性がある。16-4・5は、口縁部先端を丸く納めている。16-1~3は、松本編年のV-4様式に、16-4~6はV-4様式でもやや新しい要素を持つものと思われる。

16-7~11は鼓形器台である。口縁部外面の直線文は見られず、複合部の突出(16-10)も小





第15図 2号建物跡 下面遺構実測図(S=1:60)

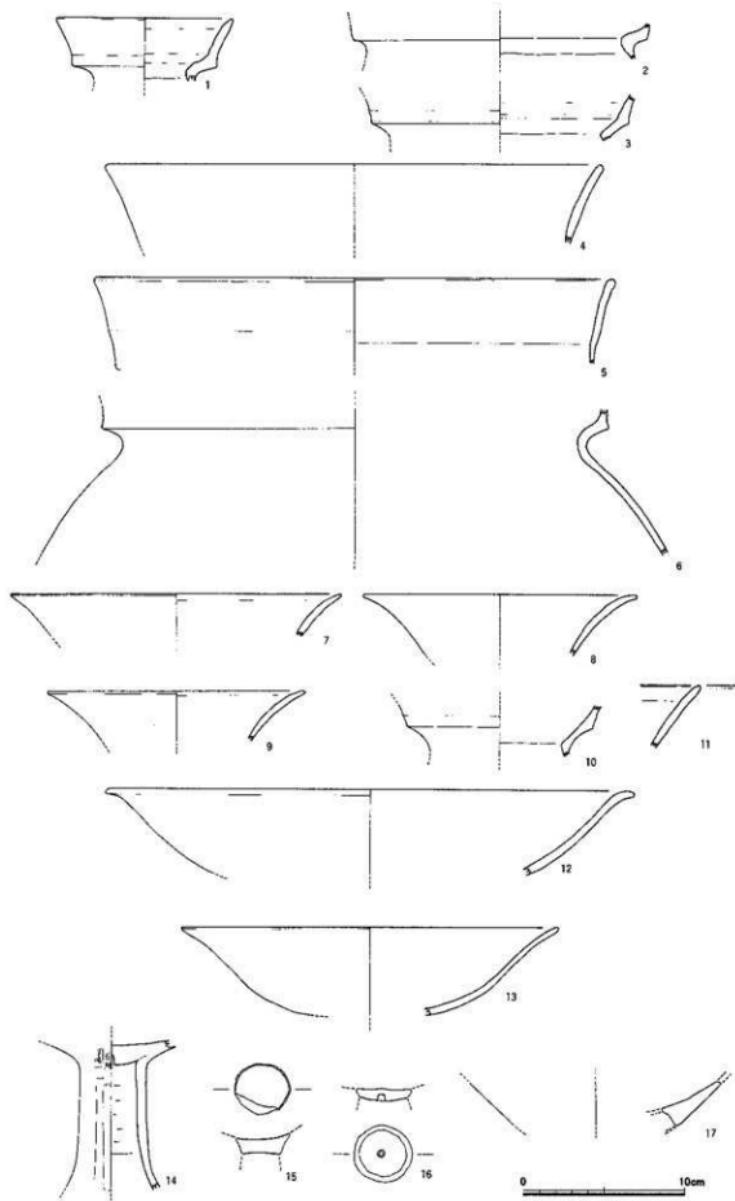
さい。松本編年のV-4様式以降のものと考えられる。

16-12~16は高坏である。坏部(16-12・13)は、丸みを持っており、段は見られない。脚部との取り付け(16-14~16)は円盤充填法を使用し、下方からの刺突痕を持つもの(16-14・16)も見られる。V-4様式でも新しいものかそれ以降のものと考えざるを得ない。

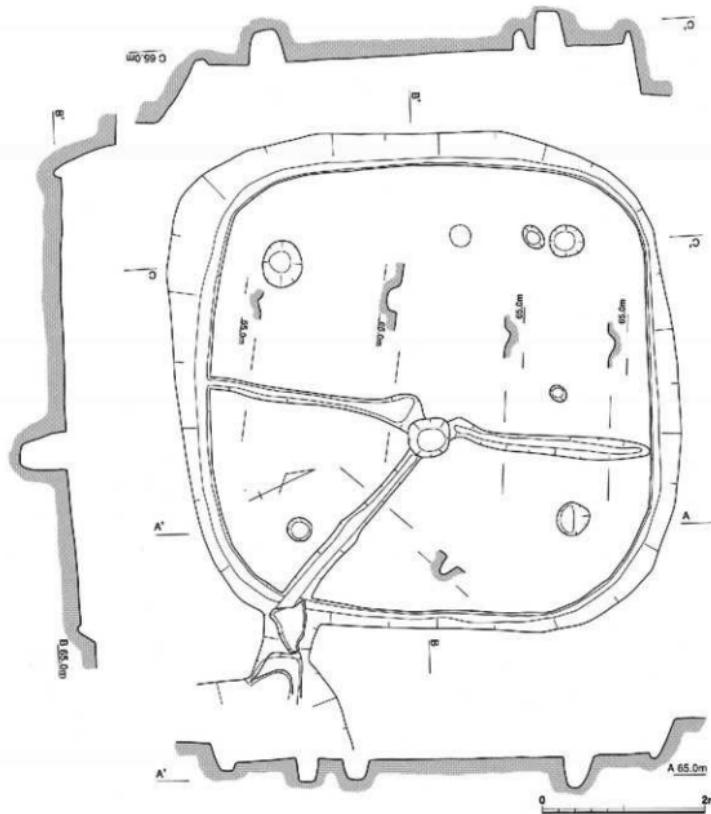
16-17は、壺か甌の底部が抜けたものであろうか。

2号建物跡から出土した遺物の内、16-1は床面直上から出土しており、下面遺構の年代を表すものと思われる。また、最上層の遺構は16-12~16の高坏が伴うものと思われる。高坏の形態自体は、古墳前期に下る可能性も考えられるが、建物の建て替え状況から、できるだけ古く考えたい。よって、2号建物跡は、松本編年のV-4様式でも古相段階に始まり、建て替えを繰り返してV-4様式新相段階まで存続したものと思われる。

3号建物跡 3号建物跡は、尾根筋の東側に広がる平坦面上で検出した竪穴建物跡である。壁体溝が完全に一周した状態で検出できたが、片づけられたかのように遺物を含んでいなかった。一辺約6mの隅丸方形で、主柱穴は4穴、中央土壙から3方に溝が出ており、その内の1条は壁体溝を抜け、建物跡外まで続いている。主柱穴はいずれも小さく、直径45~30cm、深さ30~45cmである。



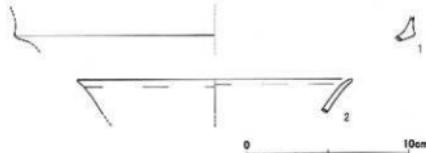
第16図 2号建物跡 出土遺物実測図 (S=1:3)



第17図 3号建物跡実測図(S=1:60)

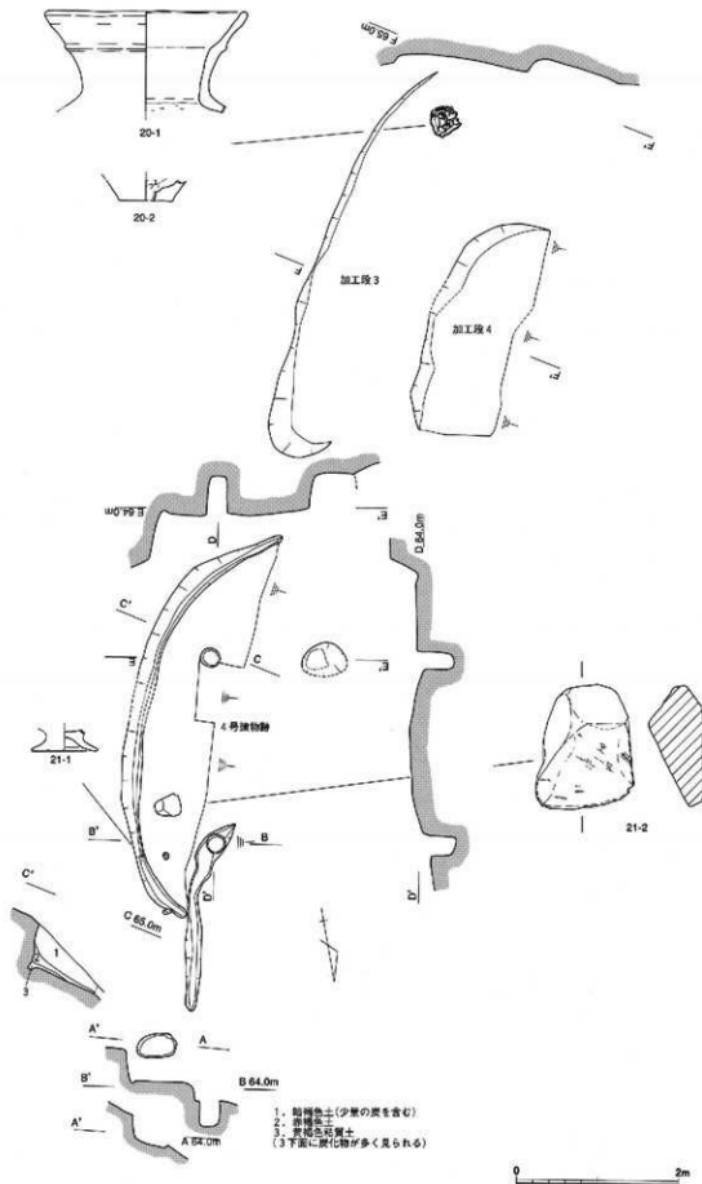
中央土壙は直径約45cmのやや隅丸方形気味の円形で、深さは62cmである。3方向に延びる溝の内、南北に延びる溝は断面半円形を呈した浅いものであるが、南東方向に延び、建物外につながる1条は断面箱形を呈し、場所によっては深さ30cmにもなる。この溝は、建物外で土壤状の深い落ち込みに繋がっている。

前述のとおり、3号建物跡は、放棄時に片づけられたかのように遺物がなかった。第18図に図示したものは、埋土中に僅かに含まれていた土器で、床面出土のものではない。

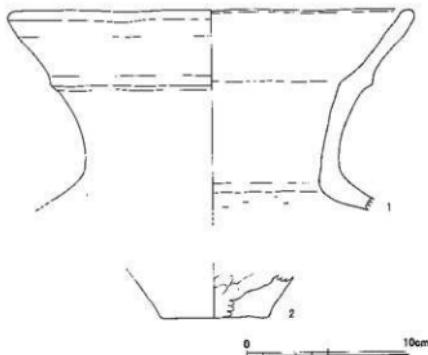


第18図 3号建物跡出土遺物実測図(S=1:3)

18-1は、複合部の接付近の小片と考えられ、甕であろうか。複合部は、僅かに横方向に突出させる。磨滅により調整は見えない。18-2は、鼓形器台の口縁部である。器壁が薄く、端部近くを僅かに外反させる。



第19図 4号建物跡・加工段3、4実測図(S=1:60)

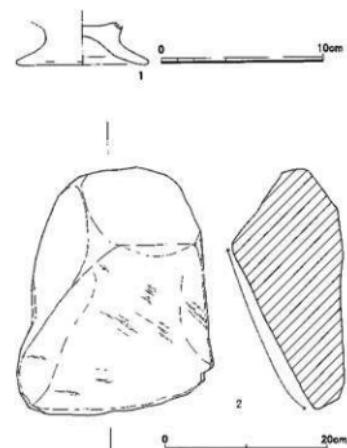


第20図 加工段3出土遺物実測図(S=1:3)

4号建物跡北側には、別の建物跡と考えられる溝状の遺構が切り合っており、北側に、もう1棟以上の建物跡があったものと思われる。

4号建物跡南側には、2段の加工段(加工段3・4)が見られる。上段の加工段3は、幅4.8m、奥行き1.8mで、床面は西側に向けて僅かに傾斜している。下側に位置する加工段4は、幅2.9m、奥行き1.1mで、ほぼ水平になっている。埋土の状況から、3号建物跡とはほぼ同時期に機能していたものと思われる。いずれの加工段からも壁体溝や柱穴が検出できず、その用途は不明であるが、加工段3の床面からは土器(20-1・2)がつぶれた状態で出土している。

20-1・2は、加工段3から出土した土器である。胴部の接合ができなかったが、出土状況から同一個体と考えられる。複合口縁状の長い口縁部を持ち、端部は丸い。ほぼ完全な平底であり、松木編年のV-4様式の間に含まれるものであろう。



第21図 4号建物跡出土遺物実測図
(1はS=1:3、2は1:6)

4号建物跡・加工段3・4 4号建物跡・加工段3・4は、尾根筋の東側に広がる平坦面と尾根筋の間を通る小さな谷地形の内側で検出した懸穴建物跡と用途不明の加工段である。4号建物跡は、急斜面上で検出したため、壁体溝と柱穴の一部を検出したいため、壁体溝の形状からほぼ円形を呈する4本柱の建物と思われ、柱穴3基を検出した。4号建物跡北東隅では、自然石を利用した砥石(21-2)が出土している。

21-1は、4号建物跡の壁体溝付近から出土した低胸環の脚台部である。厚手の脚部を持ち、脚内面に屈曲するような稜が見られる。V-4様式でも新しい段階であろうか。

21-2は、4号建物跡床面で出土した砥石である。一抱えほどもある自然石の一面を、荒く使用している。使用面以外の面は自然面と考えられる。使用面を建物内側方向に向けて出土していることから、原位置を保っていたものと思われる。遺構に伴わないものも含めると、上野遺跡からは比較的多くの砥石が出土している。また、隣接する上野II遺跡は弥生時代後期の鉄生産に関わる遺跡と考えられており、4号建物跡の砥石も、それに関わる可能性がある。

4号建物跡・加工段3・4は、遺構の位置関係などから、ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。これらの遺構からは、出土遺物が少ないが、数

少ない遺物の年代は、ほぼ一致しており、これらの遺構の年代は、松本編年V-4様式でも比較的新しい段階のものと考えられる。

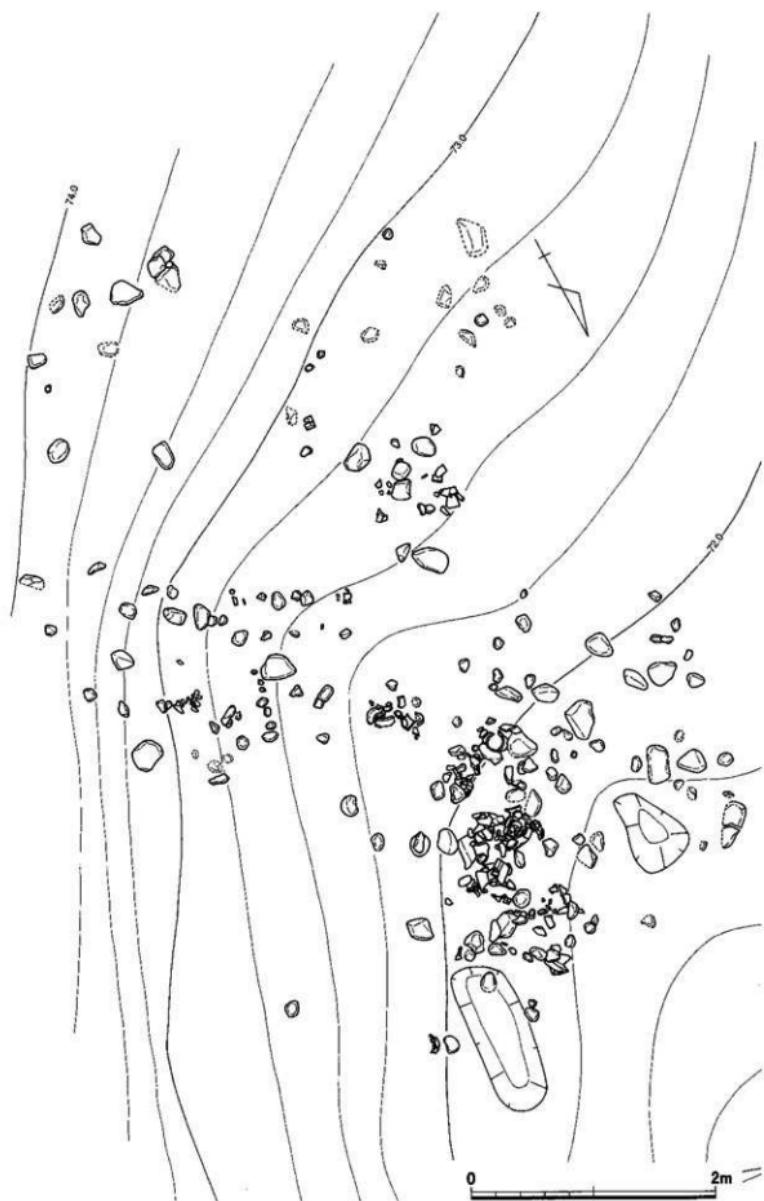
土器溜まり 遺跡最高所にあたる調査区南端は、前述のとおり、完全に削平され、遺構を残していなかったが、その西側斜面、標高73m付近に見られる小さな窪みからは、礫石とともに多量の土器片が、まとまって出土した。付近は西に向かって落ちる急斜面で、遺物出土地周辺だけが、周囲の斜面に対して窪んだような地形になっており、上方を削平した際に、偶然に堆土が溜まったかのような印象を持った。

この部分の土層（第22図）は、薄い表土直下に1赤褐色土が被っている部分が僅かにあり、1赤褐色土の下面は、遺物を含む2褐色土である。2褐色土には遺物の他に炭化物を含んでいる点が注意される。遺物を包含する面の下面は地山と判断したが、3橙色土には、拳大から人頭大の礫を多く含んでおり、遺物と共に多量に出土した礫は、地山に含まれていたものである可能性がある。礫は、遺物と共に、南から北方向へ転落してきたものと思われ、遺物と共に標高72m付近に最も多く見られた。横方向の土層断面では、2褐色土は、この窪みの内側にしか見られず、表土直下に地山が見られた。

遺物・礫を取り上げ、3橙色土まで掘り下げると、2基の土壤状の落ち込み（第23図右下）が見られた。調査当初は、これらの落ち込みを遺構と考えていたが、埋土が周囲と同様の2褐色土であったこと、遺物の出土地点がこの付近より上方に限られること、落ち込みの内部からは遺物が出



第22図 土器溜まり土層堆積状況(S=1:60)

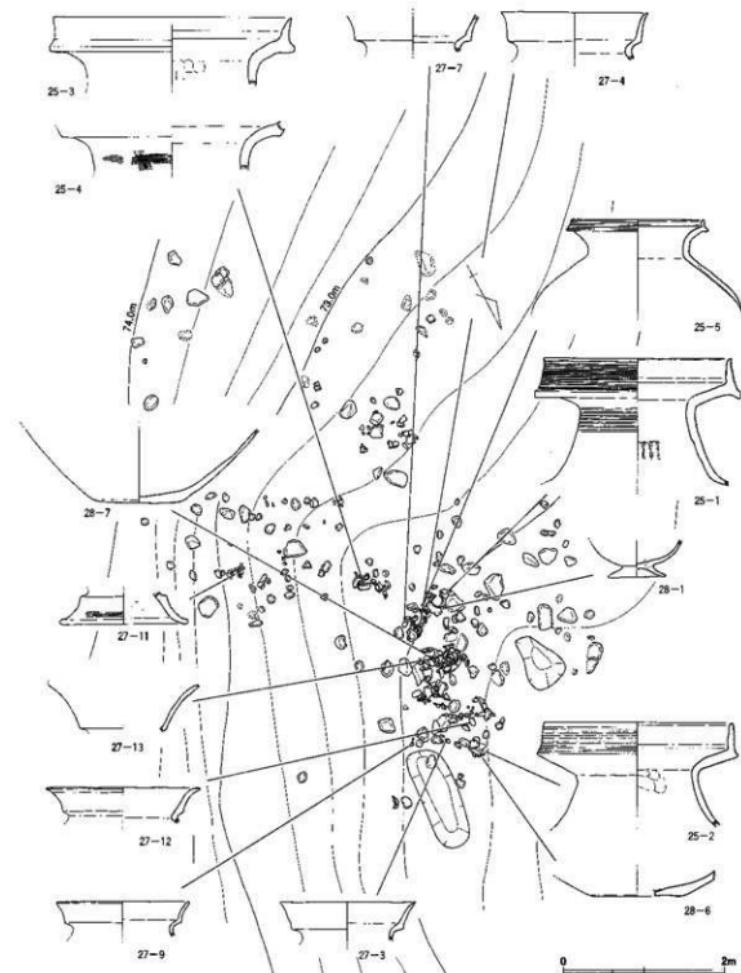


第23図 土器溜まり付近地形測量図 (S=1:40)

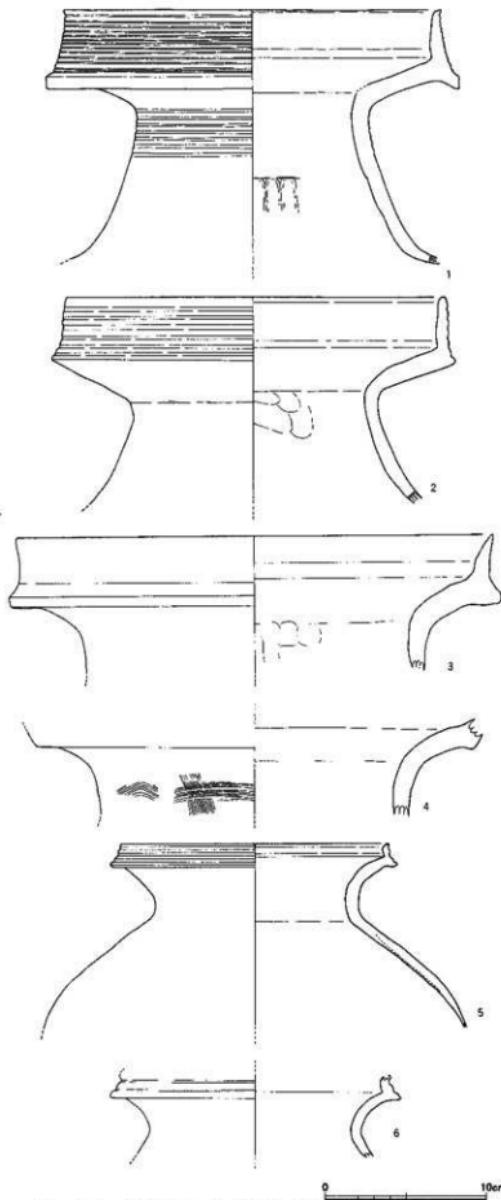
土しなかったことなどから、遺物とは関わりのない自然地形と判断した。

遺物は大半が弥生土器で、出土地点は標高72m付近に集中している（第24図）。小片が目立ったが、25-1等は口縁部がほぼ一周した状態で出土しており、原位置からは、さほど離れてはいないものと想像される。直上の削平された平坦面付近からは、比高差にして2m程、直線距離にして3mしか離れていない。

25-1は、吉備系特殊壺^(国6)と考えられるものである。角閃石を含んだチョコレート色を呈しており、



第24図 土器溜まり付近遺物出土状況 (S=1:60)

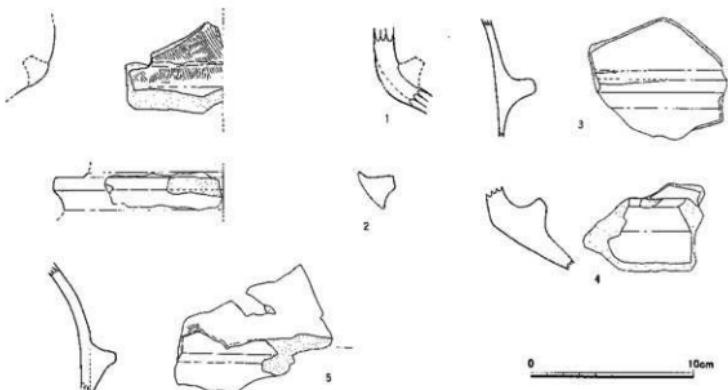


第25図 土器瀬まり出土遺物実測図(1) (S=1:3)

明らかに他の上器とは異なる胎土である。一般的な特殊壺に比べ頸が太くて短い。器面は風化によりひび割れており、細かい調整は不明であるが、複合部の縁は断面台形を呈し、強く外側に突出し、口縁部外面に13条の平行線文を施している。頸部から肩部にかけては非常に残りが悪いが、凹線を入れているものと思われる。外面に赤色顔料を使用していたと考えられ、表面に僅かに残るほか、胎土の継ぎ目の中に赤い部分が見られる。内面の調整は、ほとんど見えないが、頸部の胎土の接合部より下方には、下から上にナデ上げた強い指ナデの痕跡を残している。特殊器台に乗るものと思われるが、上野遺跡からは特殊器台は出土していない。

25-2は、大型の壺の口縁部である。25-1を模したものと思われ、器形や大きさは近いが、黄褐色を呈し、胎土が明らかに異なる。外面から内面頸部直上まで赤色顔料が僅かに見られる。

25-3も同様の壺であろうか。口縁部先端を内面側から傾斜させ尖らせているように見えるが、接合部の剥離かもしれない。磨



第26図 土器溜まり出土遺物実測図(2) (S=1:3)

減が進んでおり、調整は見えない。

25-4も同様の壺である。25-1~3と異なり、複合部の突出は無く、口縁部も外形して開きながら立ち上がるようである。頸部外面に縱方向のハケメがあり、その後に櫛描沈線文を入れている。

25-5・6は、内傾する瘦い口縁部を持つ壺である。口縁部は内傾させて上下に拡張した形状で、口縁部外面には櫛によると思われる3条の凹線を施す。磨滅が著しく、他の調整は不明である。

第25図に図示した壺類は、それぞれの出土位置が近く、比較的大きな破片ばかりであり、一括性が高いものと考えられる。

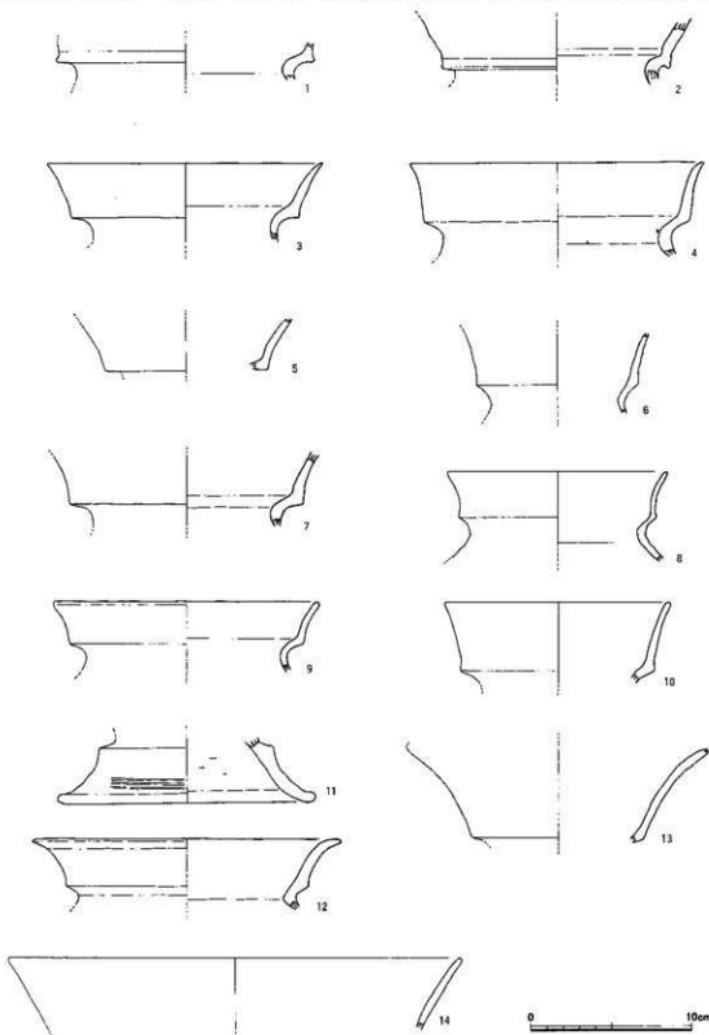
第26図に図示したものは、突帯を持つ破片である。いずれも吉備系特殊壺を模倣したものと思われ、26-1・2・4は頸部の、26-3・5は肩部の破片と思われる。26-5は、突帯張り付け前にハケメを施している。

27-1~10は、壺である。いずれも器壁が薄く、口縁部先端を尖り気味にするものが多い。27-1・2は、複合部を僅かに垂下させるが、他の個体は、折れ曲がるだけで、強く突出させるものは見られない。口縁部は直立から緩やかに外反させる形状で、外面をヨコナデし、文様を持つものは見られない。松本編年のV-4様式から大きく外れないものと考えられる。

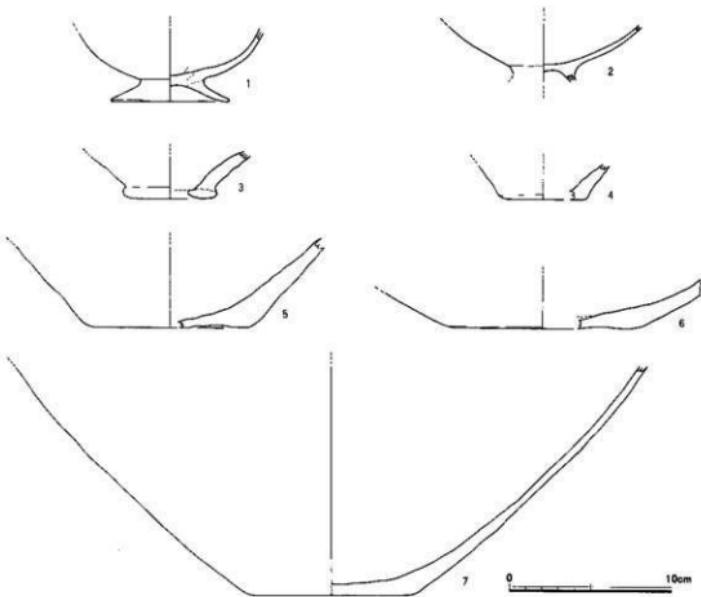
27-11~14は、鼓形器台と考えられるものである。27-11は、脚台部小片で、比較的小型のものである。器壁が厚く、脚端部を丸く納めるもので、複合部外面には援凹線が入っている。松本編年のV-3様式に含まれるものと思われ、土器溜まり出土遺物では、最も古い様相を示す。27-12も器壁の厚いものであるが、口縁端部を尖り気味にし、口縁部外面に文様を施さないものである。複合部から上を直線的に延ばした後、口縁端部近くで、強く折り曲げた形状となっており、複合部の後も強くは突出させない。27-13・14は、器壁の薄いもので、複合部から上方を外反気味に引き延ばすものである。口縁端部は、丸く納めている。

28-1・2は、低脚壺である。28-1は、壺部が緩やかに内湾して、直立気味の口縁部を持つと思われるもので、脚台部は薄手で広く張り出すものである。壺部内面に、脚台部取り付けによると思われる、指押さえの痕跡が見られる。28-2も同様のものである、器壁が薄く、脚台部が下方に向けて延びている。磨滅が著しく調整は不明である。

28-3~7は、底部である。この内28-3は、底部中央が欠損しているが、意図的に外面側から穿孔されているように見える。外見は、底部の上側にくびれがあり、円盤状の底部に開き気味の洞部を接合して成形しているようである。風化により表面の剥離が目立つが、内面調整はケズリに見える。28-4は、平底のものである。底径からすると器壁が厚く感じられる。28-5~7は、平底の大型品である。この内28-6は、25-2と胎土が似ており、同一個体の可能性がある。また、



第27図 土器窯より出土遺物実測図(3) (S=1:3)



第28図 土器溜まり出土遺物実測図(4) (S=1:3)

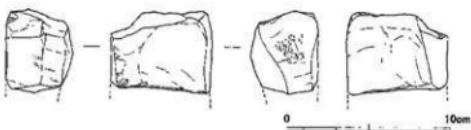
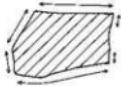
28-5は、暗褐色を呈しており、25-1に似た印象を受ける。

第29図に示したものは、土器溜まりから出土した砥石である。欠損が認められるが、黄白色で硬質の石材で、4面以上を使用している。使用面の内1面には打痕も見られる。

土器溜まりで出土した遺物は、27-11を除き、おむね松本編年のV-4様式に含まれるものと考えられる。大幅に時期の異なる遺物が無く、ある程度の一括性を想像させる土器群と言える。吉備系特殊壺を出土する県内の遺跡は、その大半が墳墓であり、上野遺跡での出土土器にも底部穿孔を行ったと思われるもの(28-3)が含まれていることから、付近に弥生墳墓が存在した可能性が考えられる。

吉備系特殊壺を出土する遺跡は、一般的には松本編年のV-3様式の時期が多く、上野遺跡での例は、やや新しい印象があるが、出雲市西谷2号墓出土⁽²⁷⁾遺物等、V-4様式に含まれると思われる例もあり、1様式あたりの時間幅を考慮すれば、上野遺跡での状況も矛盾しないと思われる。

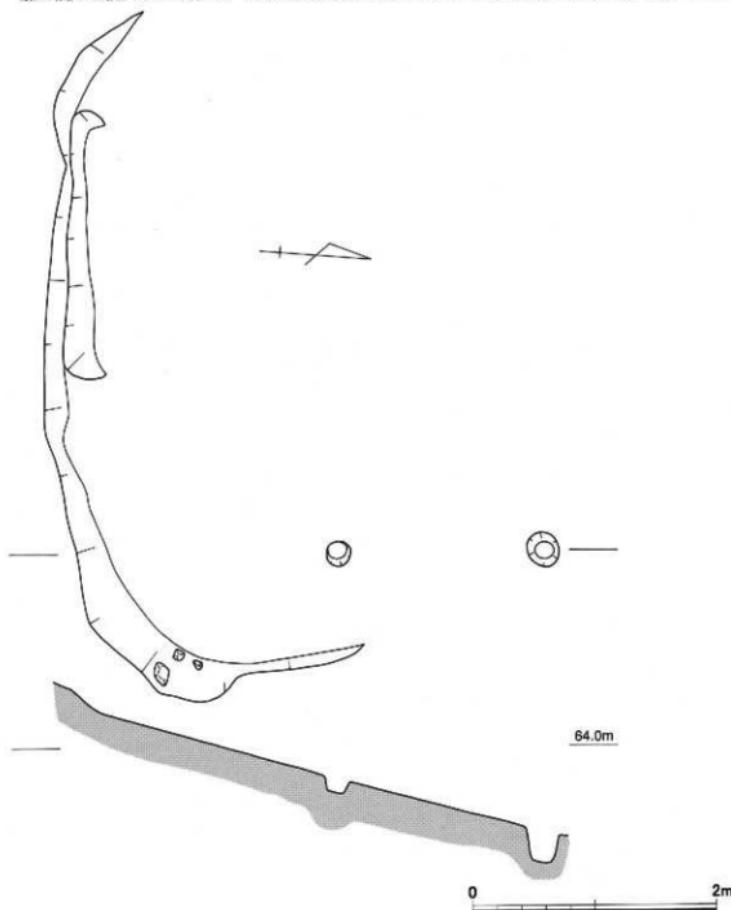
加工段1 加工段1は、2号建物跡下方斜面、標高64m付近で検出した加工段(第30図)で、「コ」字形に加工した壁面と柱穴状の落ち込み2基を検出した。付近は、西



第29図 土器溜まり付近出土砥石実測図(S=1:3)

側の急斜面直上で、堆積土の流出が多かったものと思われ、表土直下での検出となった。検出した床面は、北側に向けて大きく傾斜しており、本来の床面は存在しないものと思われる。柱穴状の落ち込み 2 基は、南北方向に並ぶようにして検出したが、斜面上方に位置する南側のものの方が浅く、北側のものの方が深い事から、北側にもう一段の別の加工段が存在した可能性がある。落ち込みの位置関係は、加工段壁面の方向と主軸を揃えており、建物跡が存在した可能性も考えられる。加工段 1 は、幅約 5.3m、東側の壁面を検出した長さ約 1.9m、北側の柱穴から南側の壁までの長さ約 3.9m である。加工段 1 南東隅からは、弥生土器と思われる小片 2 点が出土しているが、図示できる大きさではなかった。

加工段 1 を検出した部分は、2 号建物跡付近から北西方向に広がる緩斜面部分で、前述のとおり、



第30図 加工段 1 実測図 ($S=1:40$)

流出土が多く、遺構をほとんど検出できなかったが、上野遺跡Ⅰ区に於いて尾根筋以外では最も広い緩斜面部分になっている。後述する1～3号溝など遺構の痕跡が点々と見られる他、地形的に囲んでいる部分からは多くの弥生土器小片が出土することから、付近には、弥生時代の遺構が多く存在していたものと考えられる。

加工段2 加工段2は、尾根筋の西斜面に面した69m付近に位置する加工段である。平面三角形を呈した、ほぼ完全な水平面を検出したが、東側の形状は道によって破壊されているため、確認できなかった。付近は尾根筋が南から北へ僅かに傾斜した部分に当たっており、南側の壁は高さ約65cmを測るが、北側は5cm程の段になっている。検出できた平坦面は、東西約2.8m、南北約2.2mである。周囲には溝などが見られず、排水は西側の壁面の切れ目部分でしかできない。

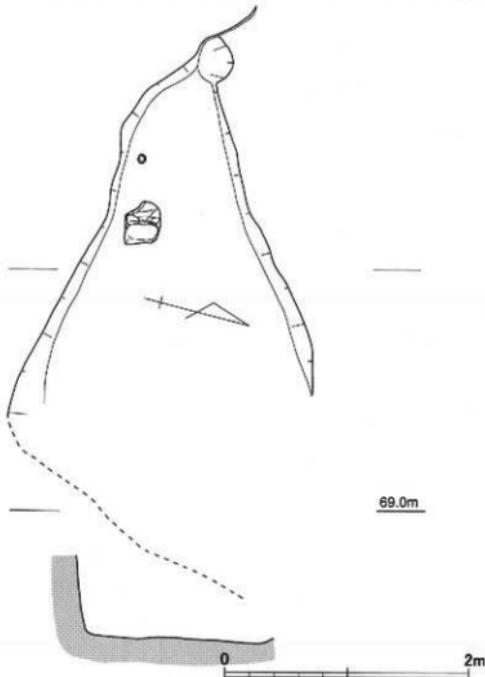
加工段2からは、時期を特定できる遺物は出土しなかったが、長さ40cm程の扁平な自然石を検出している。この石には、明瞭な擦痕は見られなかったが、1面が非常に平滑になっており、砥石として使用された可能性が考えられる。付近に位置する4号建物跡からは、同様の大きさの砥石が出土しているほか、上野遺跡Ⅱ区の5号建物跡からも同様の砥石が出土している。付近の弥生時代の建物跡には大型の砥石を持つものが少なくなく、そうした建物跡との関係がうかがわれるものである。

1号溝付近 1号溝（第32図）は、2号建物跡北側の緩斜面、標高約66m付近で検出した、斜面を横方向に走る浅い溝である。検

出した長さ約2m、幅約40cmを測り、非常に浅い。断面形状は緩い弧を描く。溝内には小石の他、土器が入っていたが、小片のため図示できず、時期も不明である。

また、溝の周囲からは柱穴状の落ち込み3基を検出している。P1・2は、溝1を挟むような位置関係で、南北に約1.5m離れて位置し、いずれも直径約30cmである。P1は10cmに満たない浅いもので、P2は20cm程の深さがある。いずれも底面が平らで、壁面が直立に近い角度で切り立っている。P3は、P2から東に4m程離れて位置し、直径約40cm、深さ約40cmである。底面が水平で、壁面が直立している。いずれも遺物を作つておらず、時期は不明である。

2・3号溝 2・3号溝は1号溝



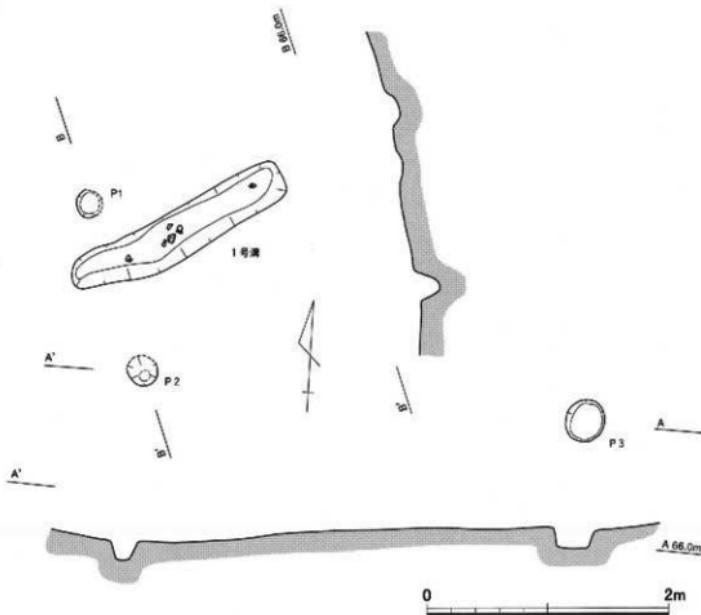
第31図 加工段2実測図(S=1:40)

の北東側で検出した溝である。2号溝（第33図）は標高65m付近を南北に走る浅い溝で、断面半円形を呈している。検出長約3.6m、幅約30cm、深さ10cm程度である。隣接して柱穴状の落ち込みが見られる。2号溝周辺からは遺物が出土しておらず、機能や時期は不明である。

3号溝（第33図）は2号溝の南側、標高約66m付近で検出した溝の壁面で、約4mに涉って検出したが、更に南北に延びるようである。溝は断面箱形を呈し、壁面の高さは約40cm、底面の幅は20~40cmである。僅かに蛇行しながらも南北に続いている。東側に位置する現代の道と主軸を一致させている。炭化物や腐植土を多く含んだ土が堆積し、床面が平らになっていることから古道と考えられる。

第3節 時期不明の遺構

土壤1 土壌1（第34図）は、1号建物跡東側の斜面で検出した長方形の土壌である。北東に面した急斜面の標高約70m付近に掘り込まれた土壌で、長さ約2m、幅約1mを測る。周囲の壁は、ほぼ完全に直立し、床面も水平である。上面の肩は斜面方向に傾斜しているが、南側の壁面付近で深さ44cmである。土壌内部の堆積土は、焼土と思われる赤色土と炭層、粘土が交互に重なって堆積していた他、床面や壁面も繰り返し火を受けたらしく、一部で赤変し、硬く焼き締まっていた。この様な状況から、土壌1は、粘土を使用した上部構造を持つ遺構であったと思われ、火を使用する施設であったと考えられる。また、その使用が複数回あったことが判る。土壌1からは遺物が出土



第32図 1号溝付近実測図(S=1:40)

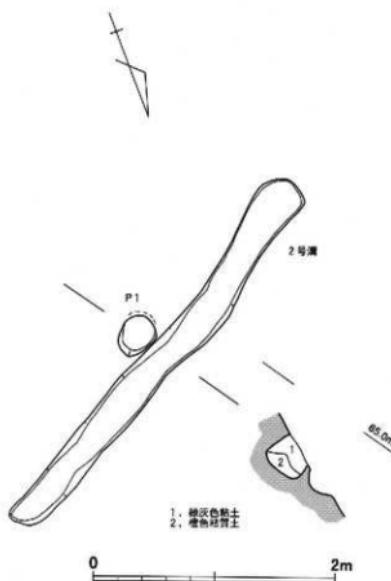
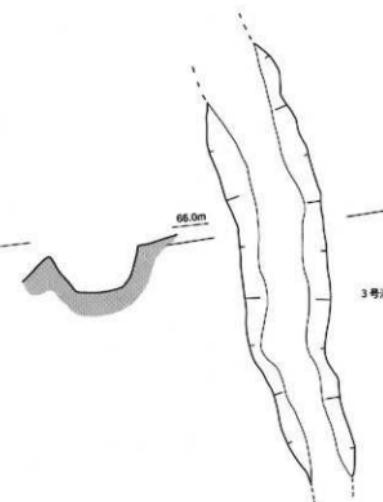
しておらず、用途は判然としないが、炭窯であろうか。図示しているが、上野遺跡では、II区も含め10か所程度の小型の炭窯と思われる土壙を検出している。それらはいずれも、浅い半球形の被熱した土壙で、土壙内には炭が詰まっている。検出時点ではほとんど埋没していないといつた共通点が見られる。それに対し、土壙1は、明らかに形状・規模が異なっている他、完全に埋没した状態で検出されている点で異なっている。土壙1は、隣接する1号建物跡と比べると、埋土が非常に軟らかいことから、比較的新しい時期のものと考えられる。

第4節 遺構に伴わない遺物

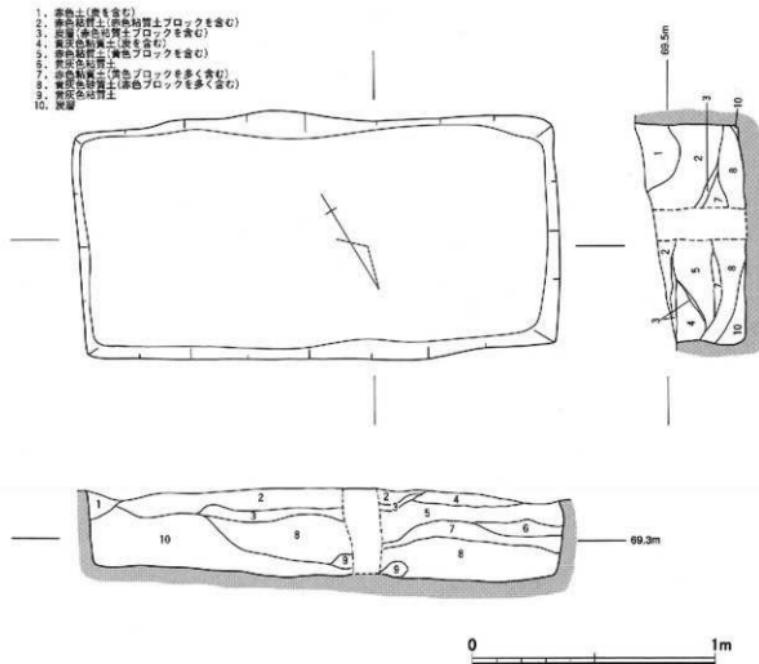
第35~38図に図示したものは、上野遺跡I区で出土した遺物の内、遺構に伴わないものである。

第35図には赤生土器と考えられるものを示した。35-1~9は、甕である。口縁部を複合部から緩やかに外反させるものには、口縁部先端を丸く納めるもの(35-6)と、尖り気味にするもの(35-1~5)が見られる。磨滅が進んでいるが、口縁部外面に文様を施すものは見られない。

35-7~9は口縁部を直線的に引き延ばすもので、いずれも口縁部先端を丸く納めるが、35-8は僅かに面を持つように見える。口縁部外面はヨコナデされ、文様を施さない。松本編年のV-3~4様式のものと考えられる。



第33図 2・3号溝付近実測図(S=1:40)



第34図 土壌1実測図(S=1:20)

35-10は、高坏である。坏部は2段に造られ、緩やかに外反する口縁部は先端を丸く納める。全体に磨滅しており調整は不明である。松本編年のV-3様式に含まれるものと思われる。

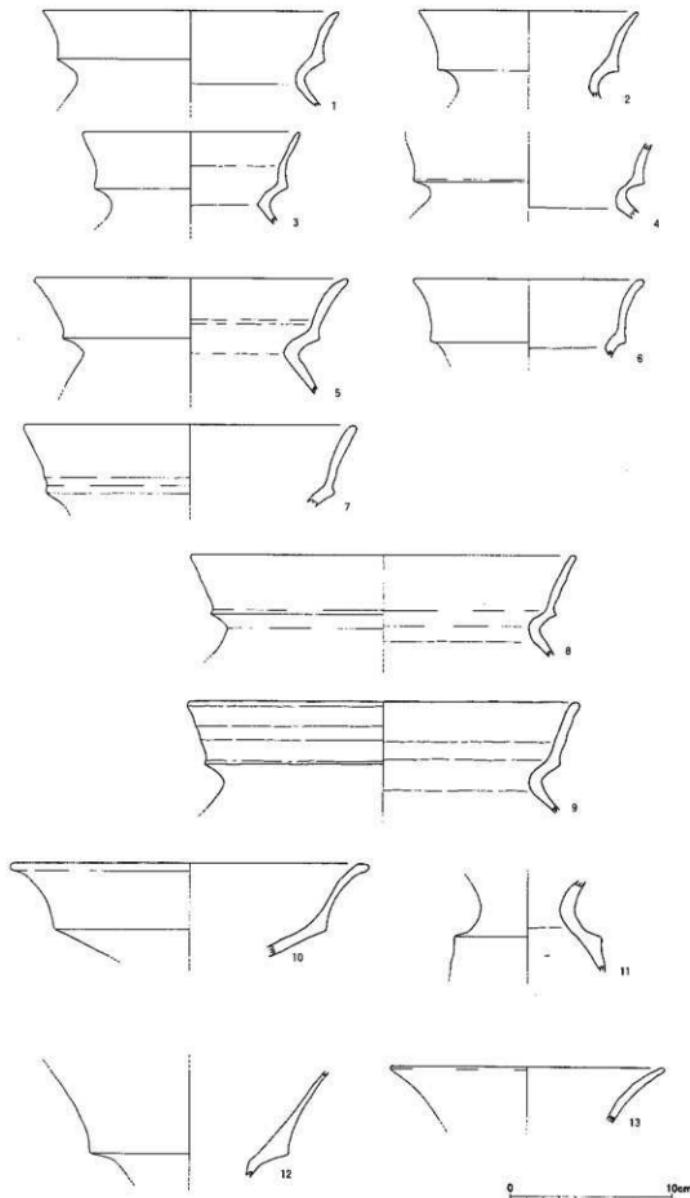
35-11~13は、鼓形器台と考えられるものである。35-11は、筒部がやや長く、脚台部を大きく開かないものである。磨滅により調整は不明だが、内面に僅かにケズリの痕跡を残す。35-12・13は、口縁部を薄く引き延ばすものである。いずれも磨滅のため、調整は見えない。松本編年のV-4様式頃のものであろうか。

第36図には古墳時代以降の土器を図示した。

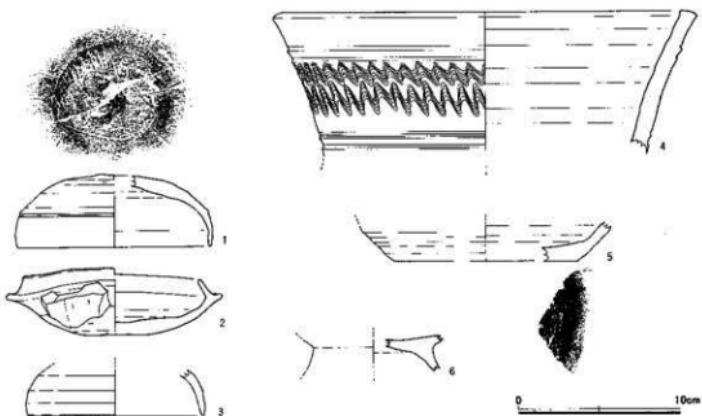
36-1は、復元口径約12cmを測る須恵器蓋である。口縁端部を丸く作り、頂部を荒くヘラケズリする。頂部には、ヘラケズリの後に付いた板目状の圧痕が残っている。36-2は、須恵器坏である。僅かに内傾する高いカエリを持つものである。全体に大きくなっているほか、体部外面に他の須恵器が窓着している。36-1・2は、大谷分類の坏A4型に含まれるものと思われ、出雲4期前後のものと考えられる。^(図4)

36-3は、須恵器蓋と考えられる小片である。復元口径は約11cmで、出雲6期前後に置かれるものと思われる。

36-4は、須恵器蓋の口縁部である。口縁部先端に面を持ち、外面には沈線で区画した中に2段に掛け波状文を施す。内面調整は丁寧な横方向のナデである。



第35図 遺構に伴わない遺物実測図(1) (S=1:3)



第36図 上野遺跡 I 区出土遺物実測図(S=1:3)

36-5は、須恵器壺の底部であろうか。底部は回転糸切り痕をそのまま残し、体部は内外面とも強いナデによって調整している。

36-6は、土器器の壺と思われる小片である。「ハ」字形に強く張り出す高台を持ち、体部は内湾しながら立ち上がるものと思われる。平安時代後半頃のものと考えられる。

37-1は、叩き石である。明灰白色の石材を使用し、6面に明瞭な打痕が見られる。

37-2は、石塔などの部材の一部と考えられるものである。下半部分は断面円形を呈し、筒状の部材のソケットになるものと思われ、別の部材と組み合わせて使用されることが想像される。下方は外側に僅かに開き、上方は水平方向に広がる形状を持つ。淡灰白色の硬質の石材を使用している。

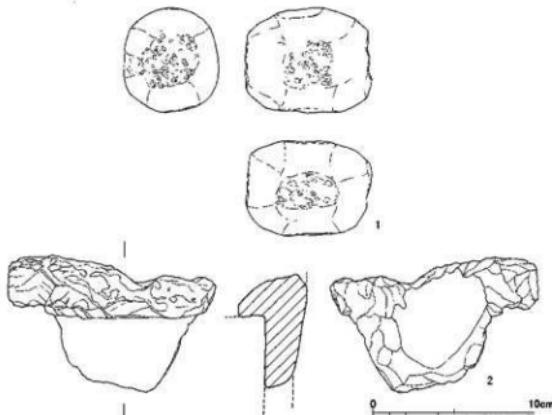
第38図には鉄製品を示した。

38-1は、鉄斧と考えられるものである。厚く鏽が付着しており、細部の形状は不明であるが、

刃部近くまで比較的
厚手に造られている。
刃部の一端を欠く。

38-2は、刀子であ
ろうか。一側辺に刃部
を持ち、両端を欠く。

38-3・4は、断面
長方形のもので、用途
不明の鉄片である。38
-4には、炭化物が付
着している。いずれも
形状や大きさから刀
子や鐵鎌のシャフト
のようなものを想像

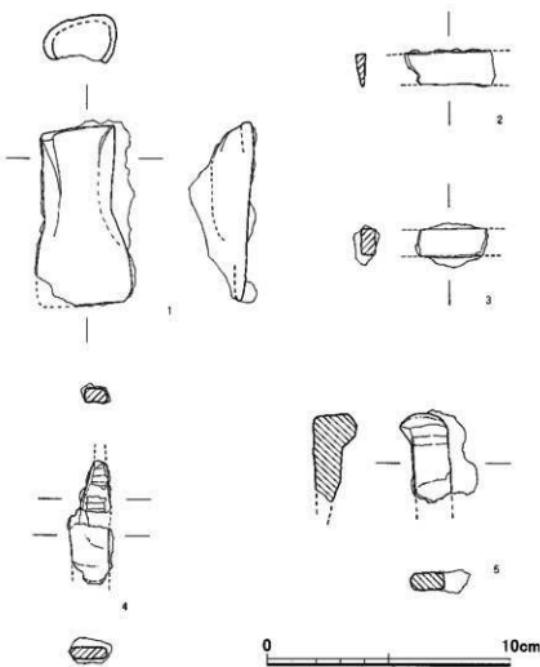


第37図 遺構に伴わない遺物実測図(2) (S=1:3)

している。

38-5は、頭部をL字形に折り曲げた、断面長方形の鉄製品である。頭部に破断面と思われる部分ではなく、下端部を尖り気味に細くしたところで破断している。用途は不明である。

これらの遺物の時期は不明であるが、周辺は弥生時代後期の集落遺跡であること、周辺から弥生時代後期以外の遺構遺物がほとんど出土していないことから、これらの多くが弥生時代後期に含まれる可能性がある。



第38図 上野遺跡I区出土金属品実測図(S=1:2)

第5節 小 結

上野遺跡II区で検出した主な遺構は、弥生時代の集落と土器溜まりで、他の遺構は時期不明のものが多かった。また、遺構に伴わずに出土した遺物も、弥生時代後期が中心となっており、他の時期のものは少ない。弥生後期の遺構としては、建物跡として確認できたものが4棟あるほか、用途不明の加工段にも同時期と思われるものが見られる。土器様式の時間幅の中で、どれほどの建物跡が同時並存していたかは不明であるが、1号建物跡のような大型の建物が住居跡として単独で建つ時期があったとは思えず、柱穴の無い加工段についても建物跡に伴う何らかの施設と考えられることから、複数の建物跡が同時併存したと考えたい。

上野遺跡II区の弥生集落からは、少量の砥石が出土しているほか、遺構に伴わない遺物には鉄製品も含まれている。西側に隣接するほぼ同時代の弥生集落である上野II遺跡が、鉄製品の製造に関係する遺跡と考えられていることから、上野遺跡II区も一連の集落の縁辺である可能性もある。

一方、土器溜まりからは吉備地方からの搬入品と考えられる特殊壺が出土している。同時にそれを模倣したと思われる在地に土器も出土しており、集落からの遺物とは想いにくい器種構成となっている。土器溜まり直上で遺構を検出することはできなかったが、付近では、弥生墳丘墓と考えられる清水谷2号墓^(現)もあり、上野遺跡II区にも弥生墳丘墓が存在した可能性がうかがわれるものであ

る。弥生後期の集落遺跡に同時代の墳丘墓が隣接することは少ないと想われるが、安来市の塩津丘陵遺跡群^{〔註1〕}では集落である柳・竹ヶ崎遺跡に塩津1号墓が隣接しており、同時期に存在した可能性がある。

また、上野遺跡I区が古墳群であるのに対し、尾根続きである上野遺跡II区で明確な古墳を全く検出できなかった。僅かに出土した須恵器類の時期はばらつきが大きく、窯着の見られる須恵器坏も見られたが、それらの遺物を歴史的に位置付けることはできない。

最後に、上野遺跡II区の主な遺構と、その出土遺物の年代を整理し小結とする。

大型建物である1号建物跡は、壺と鼓形器台から松本編年のV-3~4様式と考えられた。この遺構からは山陰系鏡形土器が出土している。

2号建物跡は、4本柱で隅丸方形を呈した縦穴建物跡ある。この遺構には2回以上の建て替えの痕跡が見られる。出土遺物の年代は松本編年でV-4様式の内にあると考えられる。

3号建物跡も4本柱で隅丸方形の堅穴建物跡であったが、床面出土遺物が全く見られなかった。

4号建物跡は4本柱と考えられる堅穴建物跡の縁辺で出土遺物は大型の砥石のみであったが、隣接する加工段3からは、松本編年のV-4様式の内にあると思われる壺が出土している。

土器溜まりからは、吉備系特殊壺を始めとする松本編年のV-4様式に含まれる遺物が多く出土している。付近からは明確な遺構は検出できず、周辺に弥生墳墓の存在がうかがわれた。

加工段3以外の加工段、溝等の年代は不明である。

炭と焼土の詰まった方形の土壙である土壙1の年代は不明である。

古墳時代の遺構は検出出来なかった。

註1 山根正明「七四佐々木要害山城」「宍道町史史料編」宍道町史編纂委員会1999年

『島根県中世城館分布調査報告書第2集出雲、隱岐の城館跡』島根県教育委員会1998年

山根正明『宍道町の山城』宍道町教育委員会1991年

註2 『女夫岩遺跡－第1次発掘調査報告書』島根県教育委員会・宍道町教育委員会1999年

『女夫岩遺跡を考える』宍道町教育委員会1996年

錦田剛志「五三女夫岩遺跡」「宍道町史資料編」宍道町史編纂委員会1999年

註3 『宍道町埋蔵文化財調査報告書6 水溜古墳群』宍道町教育委員会1988年

註4 弥生土器の編年観に関しては、次の文献を参考にしている。

松本岩雄「7出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」1992年

赤澤秀則「IV小結」「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年

註5 「(4)上野II遺跡」「島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ」島根県教育委員会2000年

註6 吉備系特殊壺(25-1)については岡山市教員委員会 宇垣匡雅 氏の指導を得た。

註7 『西谷墳墓群』出雲市教育委員会2000年

田中義昭・渡邊貞幸他『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』1992年

『古代の出雲を考える4西谷墳墓群』出雲考古学研究会1980年

『四隅突出型墳丘墓とその時代第二回山陰考古学研究集会』1997年

註8 古墳時代須恵器の年代観に関しては次の文献を参考にしている。

- 大谷見二「山雲地方の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』1994年
- 註9 「清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書」宍道町教育委員会1985年
- 稲田 信「一清水谷二号墓」「宍道町史史料編」宍道町史編纂委員会1999年
- 註10 「塩津丘陵遺跡群」島根県教育委員会1998年
- 『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』出雲考古学研究会1985年

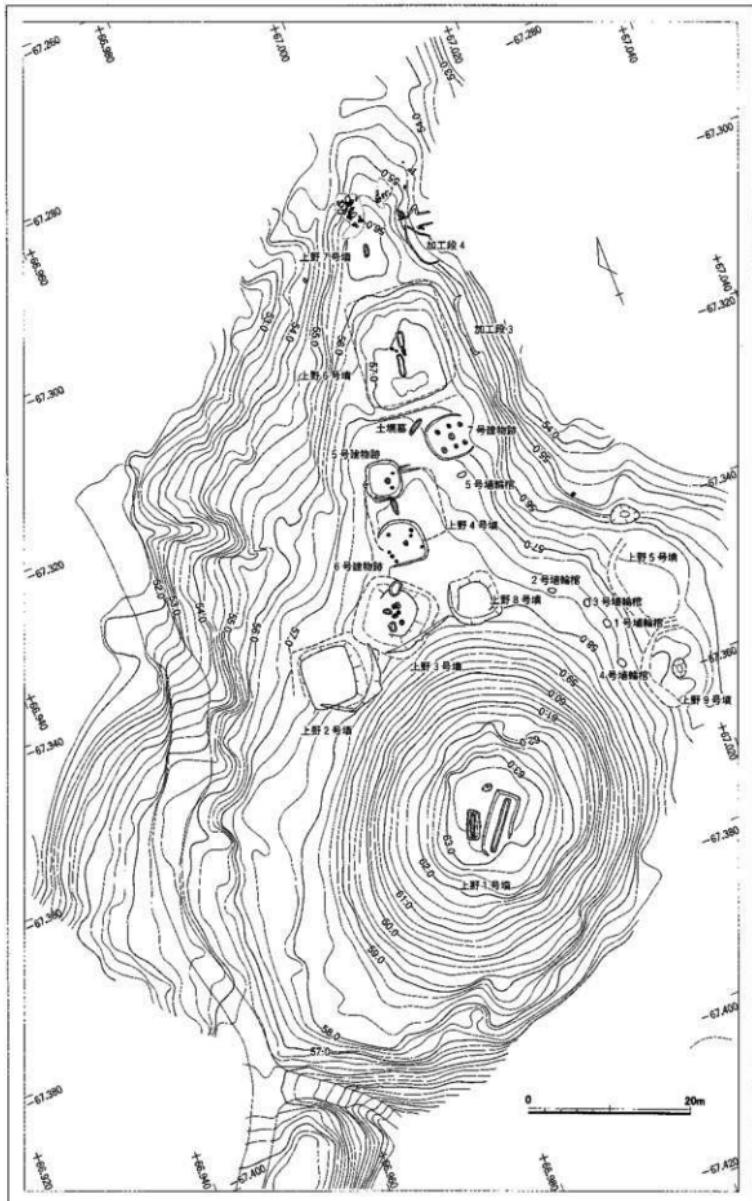
第4章 上野遺跡II区

上野遺跡II区は上野遺跡の北半にあたる部分で、上野1号墳を始めとする9基の古墳と弥生集落からなる(第39図)。上野1号墳から北側の尾根上は、幅約30m、長さ約80mに亘って平坦面が続いており、古墳群や集落には適した立地と思えた。I区と同様に東西の斜面は急傾斜になって両側の谷に落ち込んでおり、北側は調査区外側で尾根筋の平坦面が途切れ、大きくドリ妙岩寺に続いている。東側斜面は大きな馬蹄形の谷地形となっており、その谷地形の内側は、横穴墓と多量の土器類を出土した竹ノ崎遺跡となっている。上野1号墳頂からは、西側に上野II遺跡や城山遺跡が、北には穴道湖から北山の山並みが、東側には佐々布の谷を挟んで女大岩遺跡や水溜古墳群が位置する山塊などを見渡すことができる。

上野遺跡II区については、伐採の時点でマウンド状の高まりが数か所で見られたことから、古墳群の存在が確実となったため、範囲確認のためのトレンチ調査は行っていない。上野1号墳を除くと、マウンドはいずれも小規模で、直径10m前後の塊が点在した状況であった。全面調査では上野1号墳の調査と並行してマウンド毎にトレンチを設定し、古墳であることを確認することに周囲に調査区を拡大していく方法を探り、確認順に上野2号墳・3号墳と呼び9号墳までを確認した。また、4号墳西側にセンターの大きな歪みがあり、10号墳としてトレンチを設定したが、実際には道による残丘で古墳ではなかった。更に古墳時代の墳墓としては、調査区を拡大していく過程で上野4号墳と6号墳の間で、古墳時代の墳丘を持たない土壙墓を発見したほか、上野1号墳を取り巻くように、多数の円筒埴輪を転用し棺とした墳墓、埴輪棺群を確認している。この内1号埴輪棺は埋没しておらず、草刈を行った時点では大半が露出し、周辺の埋土の流出が著しいことが予想された。

上野遺跡II区は上野1号墳頂部で標高約63m、平坦面付近の標高は約55~59mを測る。上野1号墳の東側と南側は急斜面となっていて明確な遺構は見られない。また、西側は緩斜面となっているが、道が通るなど後世の変更が及んでいるものと思われ、遺構は検出できなかった。上野1号墳の北側の裾には、西側より上野2号墳・3号墳・8号墳・埴輪棺群・5号墳・9号墳と1号墳を取り巻くように小型の古墳が造られる一方、尾根筋には北に向けて上野4号墳・6号墳・7号墳と、やや大型の古墳が造られている。5・9号墳の墳形は不明確であるが、墳形を確認できた古墳は1号墳を除きいずれも方墳であった。尾根筋の古墳は、7号墳より北側の調査区外にも続くようで、妙岩寺に続く尾根筋下方でも古墳と思われるマウンドが少なくとも2基以上見られる。上野5・9号墳がある付近は、竹ノ崎遺跡のある東側に向けて小さな尾根が延びる部分に当たる。標高55mより下方の尾根筋にはトレンチを設定し遺構の広がりを追ったが、少量の埴輪片が出土したのみで、5号墳より下方には古墳は見られなかった。上野7号墳より北側の調査区外側では、北側の妙岩寺方面に向かう尾根筋が、東に延びる小さな尾根筋と枝分かれしている。この尾根筋は、国道54号線に面した東先端付近で、凝灰岩質の岩盤が露出する。この岩盤には横穴墓が掘られており、竹ノ崎遺跡として発掘調査を行っているが、その上の尾根筋にも段が見られ、小規模な古墳が点在する可能性が高い。

上野2~4号墳の調査中には、墳丘盛り土の下に弥生時代の建物跡が残存することが判ったため、再度、遺跡全体の精査を行い建物跡3棟、加工段等の弥生後期の遺構を検出した。これらの遺構は



第39図 上野遺跡II区遺構配置図(S=1:600)

上野遺跡Ⅰ区や上野Ⅱ遺跡から続く弥生集落の縁辺と考えられる。

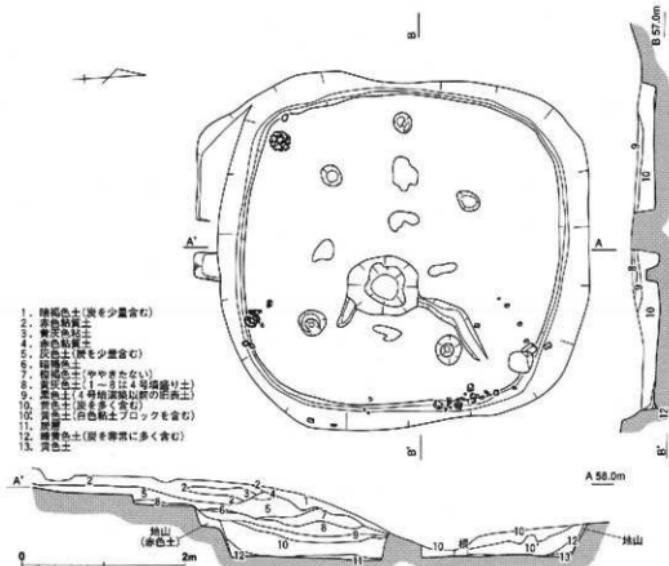
弥生・古墳時代以外の遺構としては、上野1号墳墳頂周辺から13世紀頃の常滑系と考えられる壺（第140図）が表採されるなど、中世に再利用された可能性が考えられたほか、戦国時代に山城として使用された可能性も認められる。調査開始時の上野1号墳には道によると思われる溝状の窪みが多く走り、墳頂部付近には石が散乱していたほか、標高62m付近のテラス状になった部分には大きな石塔の一部（第140図）と判断される米待石の塊が落ちていた。

第1節 弥生時代の遺構・遺物

上野遺跡Ⅱ区での弥生時代の遺構は、古墳によって埋められたり、中世に地形の改変を受けている場合が多かった事から、当初はその存在に気付かなかった。上野2号墳周溝の調査中に、少量の弥生土器が出土したことから、古墳の盛り土の下に弥生時代の建物跡が埋没している可能性が浮上し、改めて遺跡全体の精査を行った。その結果、4号墳盛り土の下層から2棟の竪穴建物跡を、東側斜面から竪穴建物跡1棟と加工段等を検出した。上野2・3号墳周辺では、古墳築造に伴う地形の改変が著しかったらしく、建物跡等を検出することはできなかった。

5号建物跡 5・6号建物跡は、上野4号墳直下で検出した竪穴建物跡で、4号墳北側に位置するものを5号建物跡、南側に位置するものを6号建物跡と呼んだ。いずれも4号墳周溝の検出作業中に発見したもので、尾根筋の平坦面に位置し、付近の標高は約58mである。

5号建物跡（第40～44図）は、南北4.5m、東西4.2mの隅丸方形で、周囲の壁面が一周する竪穴建物跡である。4号墳周溝により削平されている可能性はあるが、北側の状況より地表から40cm

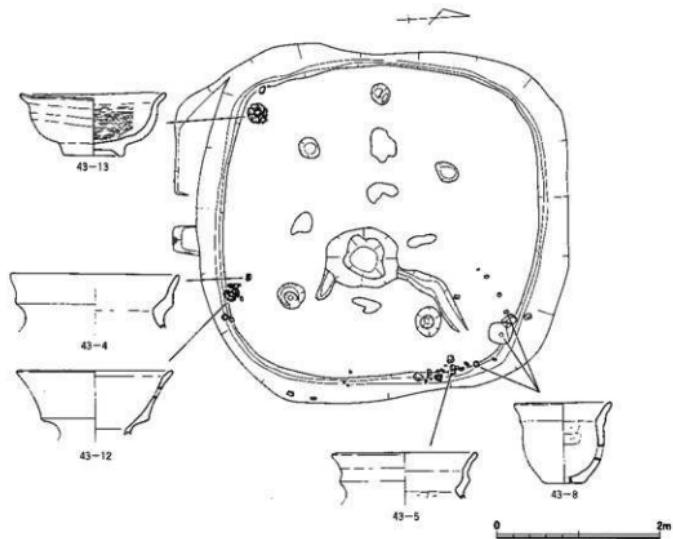


第40図 5号建物跡平面図・土層堆積状況(S=1:60)

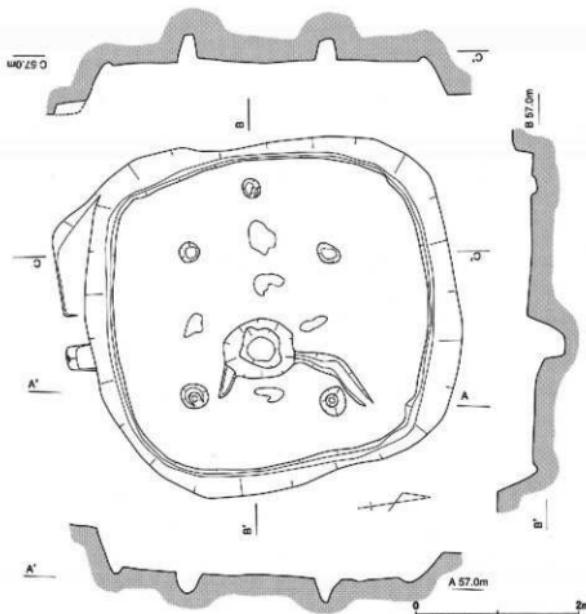
程掘り下げて作られたようで、床面の標高は57.1mである。土層断面(第40図)では建物跡南側に4号墳の盛り土が厚く堆積する一方、建物跡中程に4号墳周溝が巡り、ほとんど堆積が見られない状況であった。建物跡、南側に堆積する1暗褐色土から8黄灰色土は、4号墳の直接の盛り土と考えられ、その下層の9黒色土が4号墳築造時点での表土と考えられる。床面上には11炭層が見られる他、比較的段階での堆積土と思われる12暗黄色土にも多くの炭を含んでいる。遺物検出時には若干の木炭も出土しており、建物跡が焼失した可能性がうかがわれる。

建物跡床面からは、弦生土器を中心多くの遺物が出土している(第41図)。出土遺物は、建物跡中程にはほとんど見られず、壁体溝周辺に多く見られる。小片で出土するものについては流れ込みと思われるが、43-13は完形を保って出土した。43-13は高台状の底部を持つ鉢であるが、建物跡南西隅の壁体溝近くで、口縁部を下に伏せた状態で出土している。また、建物跡南東隅で出土した43-12も比較的大きな破片であったが、完形ではない。43-4は甕口縁部の小片で、43-12も完形ではないが、出土位置は床面直上であり、建物跡が埋没する前に建物跡内に落ちている。北東隅で出土した43-8もほぼ完形を呈した小型の壺であるが、この土器は小片を接合したもので、一部の破片は大型の砥石(44-4)の下から出土している。44-4は壁体溝に掛けた場所から出土しており、43-8の破片がその下から出土したことから、建物を放棄した際に投げ込まれたような状況が想像される。また、43-8周辺からは第44図に図示した砥石類が比較的まとまった状態で出土している。

5号建物跡では、中心からやや東に寄った場所に中央土壤があり、その周囲に4基の柱穴、5か所の被熱した場所、1か所の浅い柱穴状の落ち込みを検出した(第42図)。4か所の柱穴の間隔は1.8~1.9mであるが、南西側の1穴がやや離れ場所に位置し、全体に壁体溝との位置関係がずれて



第41図 5号建物跡遺物出土状況(S=1:60)



第42図 5号建物跡 平面図・断面図(S=1:60)

いる。中心よりやや東側に位置する中央土壇からは2本の溝が南東と北東に延びている。

5号建物跡床面には、5か所に亘って被熱した部分(第42図の黒で囲んだ部分)が見られる。被熱した部分は建物跡床面の柱穴間にそれぞれ位置しており、建物が建っている状態で、火を使用したように思われる。複数箇所で規則的に被熱した床面があり、多くの砥石を出土していることから鉄の加工との関係が想像されるが、5号建物跡からは鉄製品は出土していない。

第43・44図に示したものは、5号建物跡から出土した遺物である。

43-1~8は、甕と考えられるものである。43-1は、屈曲した口縁部を持ち、口縁部外面に貝による直線文を持つ甕である。口縁部は大きく屈曲し、先端を丸く作る。口縁部外面の直線文はヨコナデによって消そうとしているように見える。松本編年のV-3様式に含まれる。43-2・3は複合部から上を薄く引き延ばし、口縁部先端を尖らせる甕である。松本編年のV-4様式に含まれるものと思われる。43-6も43-2・3と同様のものと思われる。43-4・5は、厚手の屈曲した口縁部を持ち口縁部外面に文様を施さないものである。43-4は、口縁部先端が尖り気味になる。松本編年のV-3様式に含まれるものであろうか。

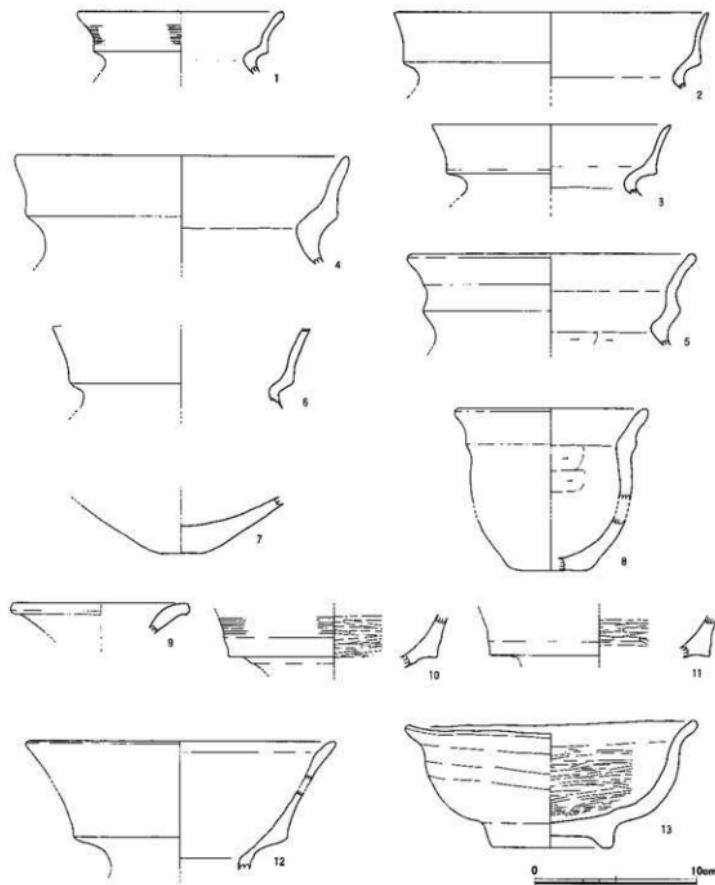
43-7は弥生土器甕の底部と考えられるものである。

43-8は小型の甕である。復元直径5cm程の平底で、緩やかに内湾する厚手の体部を持ち、口縁部先端近くまで厚く作られ、先端を丸く納める。松本編年のV-3様式に含まれるものと考えられる。

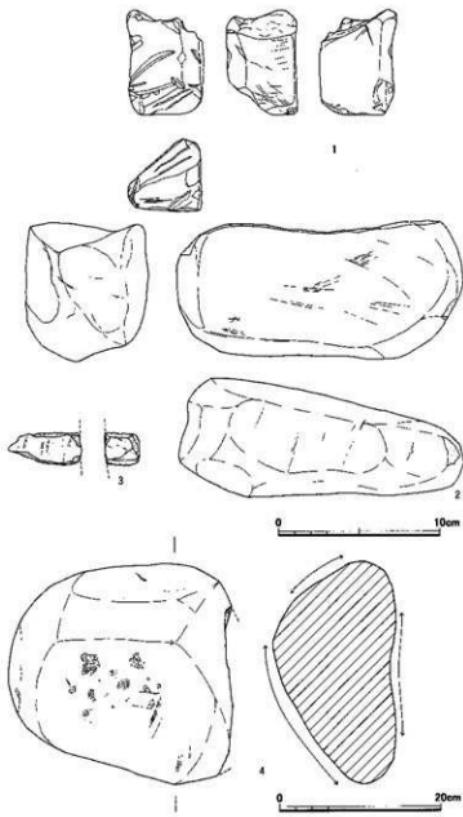
43-9~12は器台である。43-9は小型の鼓形器台で、復元口径は11cm程にしかならない。器盤が厚く直線的な体部を、口縁部近くで強く外反させている。磨滅により調整は見えないが、松本編年のV-3様式に含まれるものであろうか。43-10・11は、器盤が厚く複合部の稜を垂下させるものである。外面はヨコナデし、内面調整は丁寧なハラミガキを施す。43-10は複合部外面に樹による直線文を施した後、ヨコナデによってナデ消そうとしているように見える。いずれも、松本編

年のV-3様式に含まれるものと思われる。43-12は複合部から口縁部にかけてを薄く引き延ばしたものである。複合部から上を直線的に引き延ばし、口縁部内面に強いアクセントを付ける。内面調整はハラミガキと思われるが、磨滅より明瞭でない。外面はヨコナデする。この破片は6号建物跡の48-7と接合している。床面直上から比較的大きな破片で出土しており、5号建物跡での出土状況では、あたかも43-4を乗せて建物横に置かれていたかのように見えるが、脚台部が6号建物跡内から出土しており、原位置は4号墳墳丘内の別の遺構の存在を想像させる。松本編年のV-4様式のものであろうか。

47-13は、高台状の底部を持つ鉢である。断面台形の削り出しによる高台状の底部を持ち、内湾した深い体部から口縁部を強く折り曲げるものである。器壁が厚く強い赤橙色の色調は、5号建物



第43図 5号建物跡出土遺物実測図(1) (S=1:3)



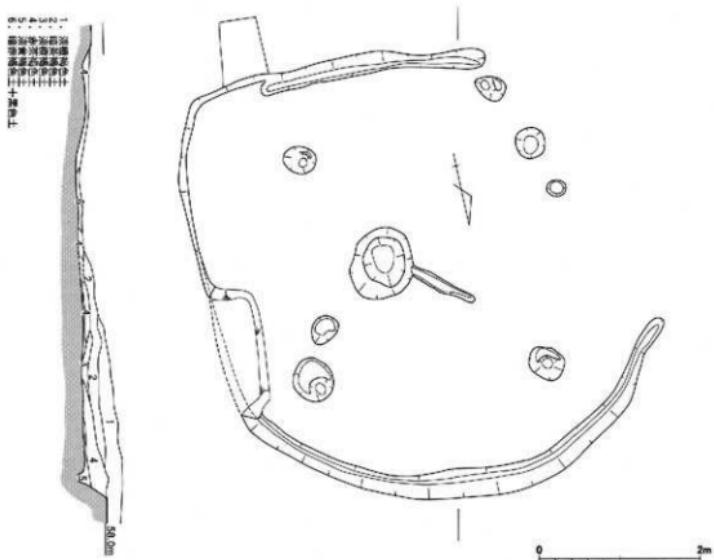
第44図 5号建物跡出土遺物(2) (S=1:3)

凝灰岩質の軟質で白色を呈するもので、44-1に似た石材である。砥石の角部分の小片で、大半の面を失っているが、元は直方体を呈するものであろうか。細かい擦痕が多く、使用回数が多い。44-4は、5号建物跡北東隅の床面で検出したものである。壁体溝に掛かる位置で出土し、下から43-8の破片が出土していることから、建物には直接伴っておらず、建物が放棄された直後に落ち込んでいるものと思われる。一抱えほどもある大きな自然石の3面に擦痕が見られるが、その内の2面には擦痕と共に多くの打痕が見られる。擦痕も打痕を伴う面に集中しており、他の2面の擦痕は不明瞭で使用回数は少ない。灰色から青灰色を呈し、硬質の石材を使用している。

5号建物跡の床面には、5か所にも及ぶ被熱痕が見られる他、多くの砥石を出土していることから金属の加工に関わる遺構であったことが想像される。また、建物内の現位置とは思えない遺物が床面直上から多数出土しており、意図的に建物が廃棄されたか、建物の放棄に伴う儀礼の存在が想像される。

跡出土の他の土器と大きく異なる印象を持つ。外面には、強いヨコナデによる稜を持ち、内面は丁寧にヘラミガキされる。外面に部分的にススによる黒変が認められ、二次焼成を受けている可能性が高い。この土器は、5号建物跡南西隅で完形品の状態で伏せて出土したもので、外面側の風化による劣化が著しい事から建物の放棄後に一定期間露していたものと思われる。松本編年の中V-3様式のものであろうか。

第44図に図示したものは、5号建物跡で出土した砥石である。5号建物跡からは4点が出土し、いずれも床面直上からの出土であることから、非常に砥石が多いと言える。44-1は、橙味がかった灰白色を呈するきめ細かい石材を使用するもので、破断面を除く6面に使用による擦痕が見られる。この内2面には、石材を抉り込むような深い傷も多い。44-2は、気泡の多く見られる黄褐色を呈した川原石の3~4面に擦痕の見られるものである。擦痕は不明瞭で、1面あたりの使用回数はあまり多くはない。43-3は、



第45図 6号建物跡平面図・土層堆積状況(S=1:60)

6号建物跡 6号建物跡（第45～48図）は、5号建物跡と同様に4号墳墳丘下で検出した堅穴跡で、4号墳の墳頂を境に5号建物跡と背中合わせになるような位置関係にある。4号建物跡床面直上から出土した鼓形器台(43-12)の破片が、埋土のほとんど無い6号建物跡からも出土したことから、両建物跡は比較的近い時期に埋没したと考えられ、同時に存在した可能性も考えられる。6号建物跡は尾根筋の中央に立地し、床面の標高は約58mである。

6号建物跡は5号建物跡に比べ床面の標高がやや高い位置にあり、4号墳周溝の底面が建物跡床面には接していたため、壁体溝などを完全に検出することができなかった。土層断面（第45図）の6暗赤褐色土・黒色土は4号墳周溝の埋土で、4号墳築造時点で掘り返された部分と考えられる。また、2暗茶褐色土は4号墳の盛り土であることが確実で、4赤茶褐色土以上も盛り土である可能性が高い。

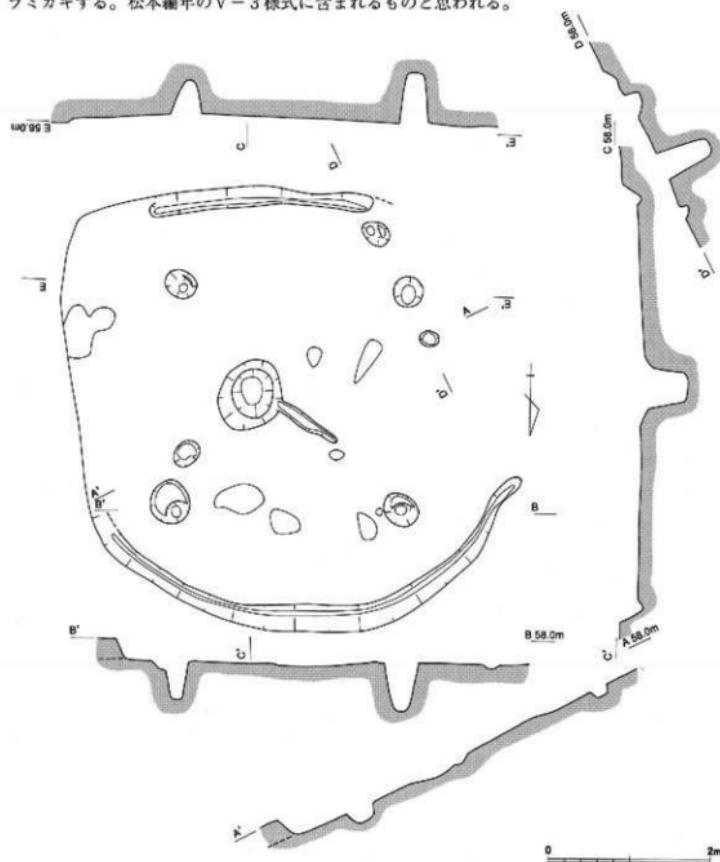
遺構の平面形（第46図）は、前述のとおり4号墳周溝によって削平されているため、西側の形状が不明であるほか、南東隅の壁面も明瞭ではない。壁体溝と考えられる溝を建物跡北側と南側で部分的に検出し、平面形は隅丸方形から円形と考えられる。中央土壇とそれから延びる1本の溝があり、主柱穴は4穴と思われる。主柱穴以外にも3基の柱穴状の浅い窪みが見られる他、床面の各所に被熱して赤変した部分が見られる。中央土壇は直径約90cmで、肩付近は斜めになっているが、下半はほぼ垂直に60cmほど落ち込むものである。底面は、直径30cmの水平面になっており、埋土中には炭が多く含まれていた。中央土壇からは北西方に約80cmに亘って、断面U字形の溝が伸びている。主柱穴はいずれも直径約40cm、深さ約70cmで、底面標高を57.1m付近に据えている。主柱穴間は約2.8mを測る。北側の壁体溝は幅15～20cm、深さ5cm程で、断面は緩いV字形を呈す

る。南側の壁体溝も同様であるが、両端は不明瞭で、深さはほとんど無い。主柱穴以外の柱穴状の落ち込みは直径20~50cmで、深いものでも30cmに満たない。底面が傾斜した形状で、用途は不明である。6号建物跡でも床面に多数の被焼痕が見られたが、5号建物跡のように規則的な配置にはなっておらず、主に北側の柱間に見られる。

6号建物跡は、4号墳による削平を受けているため、床面からの出土遺物は少ない(第47図)。壇の口縁部(48-2)、砥石(48-9)が床面から出土しているほか、器台(48-1)が中央土壙内から出土しているが、いずれも小片で、原位置を保つものではない。

第48図には、6号建物跡で出土した遺物を示している。

48-1は、中央土壙内から出土した小型の器台である。複合部の稜を横方向に強く突出させ、口縁部を緩やかに外反させる。口縁部外面には櫛によると思われる直線文を密に施し、内面は荒くヘラミガキする。松本編年のV-3様式に含まれるものと思われる。



第46図 6号建物跡平面図・断面図(S=1:60)

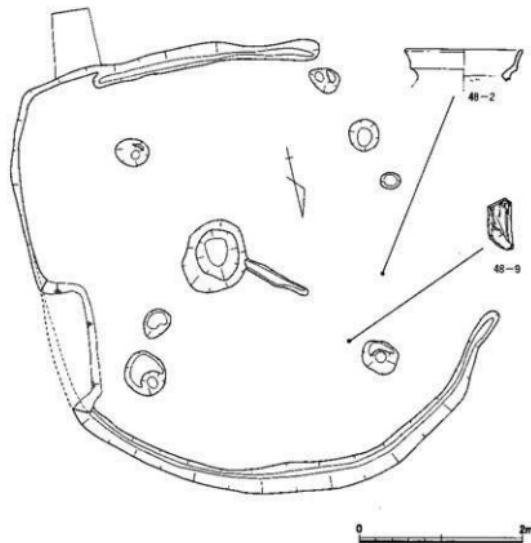
48-2~4は、壺である。いずれも複合部の稜を強く突出させず、緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁部先端を丸く納めるものである。48-3は、先端を尖り気味にしている。また、48-4は、器壁が厚く頸部が長い。いずれも磨滅により口縁部外面の文様の有無は不明である。松木編年のV-3~4に含まれるものと思われる。

43-5・6は、弥生土器底部の小片である。

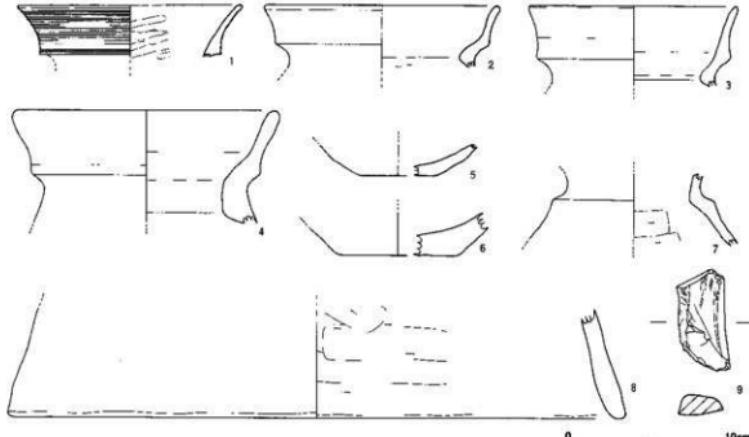
48-7は、5号建物跡出土の43-12と接合した器台である。脚台部を薄く引き延ばすもので、複合部の稜はあまり突出させない。

48-8は、山陰系瓶型土器の端部である。外面は磨滅し、調整不明である。内面側が赤変しており、被熱しているようである。

48-9は、砥石である。淡黄白色を呈し軟質の石材を使用した小片である。3面以上に擦痕が残



第47図 6号建物遺物出土状況(S=1:60)

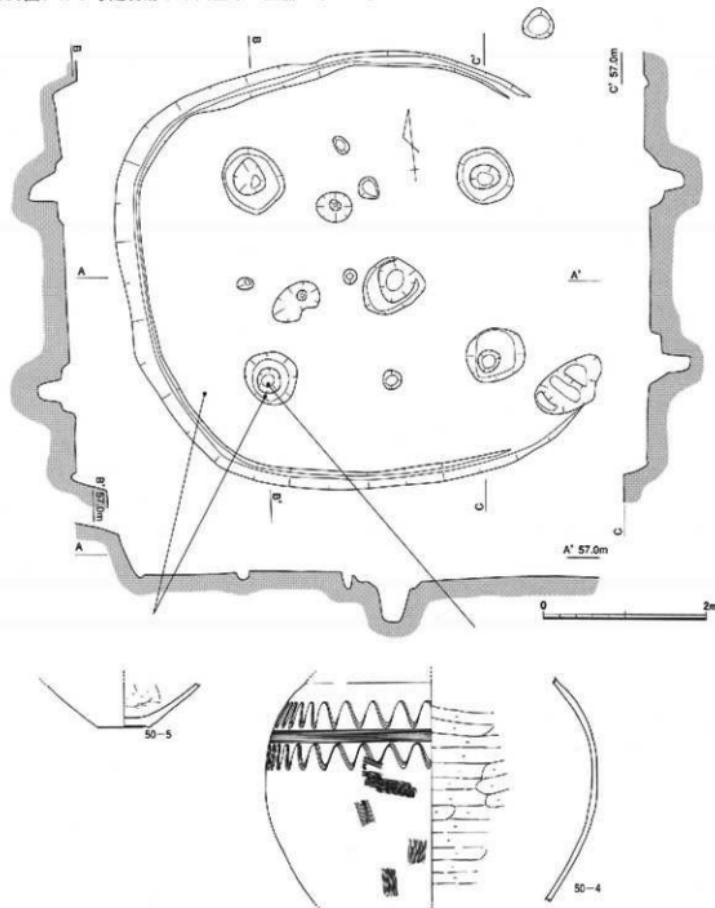


第48図 6号建物跡出土遺物実測図(S=1:3)

るが、面によって使用方向が異なっている。

7号建物跡 7号建物跡は、竹ノ崎遺跡に面した東側斜面の標高約57m付近に位置する堅穴建物跡である。尾根筋を外れた傾斜地に位置しているため、東側の形状は不明である。1辺約5.5mの隅丸方形を呈し、中央土壇と4基の主柱穴、9カ所の柱穴状の落ち込みを確認した。2段に掘り込まれた中央土壇は長径約80cm、短径約60cmの楕円形を呈し、深さは約60cmである。中央土壇からの溝は確認できなかった。主柱穴はいずれも2段に掘り窪められており、直径60cm前後、深さ50cm前後を測り、柱間は2.3~2.8mである。7号建物跡には、中央土壇・主柱穴以外に多くの柱穴状の落ち込みが見られるが、それらはいずれも埋土が軟らかく、後世のものと思われる。

第50図には7号建物跡から出土した土器を示した。



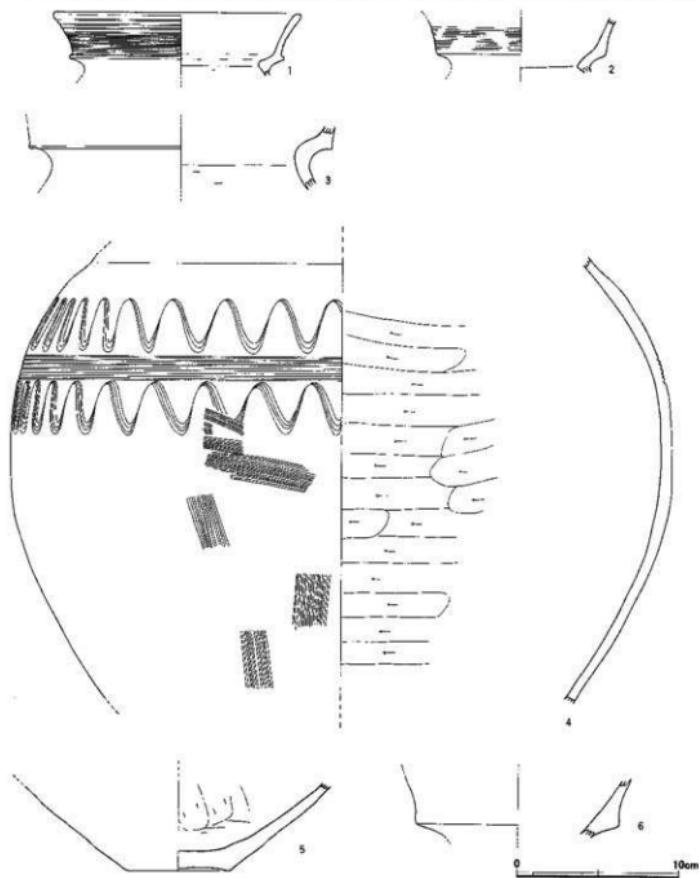
第49図 7号建物跡平面図・断面図・遺物出土状況(S=1:60、遺物は1:6)

50-1～3は、甕の口縁部である。50-1は、複合部の稜を横方向に強く突出させ、口縁部外面に貝による平行線文を密に施すものである。口縁部を僅かに外反させ、先端を丸く作る。50-2は、複合部の稜を突出させないもので、口縁部外面に貝による平行線文を施している。磨滅により内面調整は不明である。50-3も同様のものと思われるが、磨滅が著しく調整は見えない。いずれも松本編年のV-3様式前後のものであろうか。

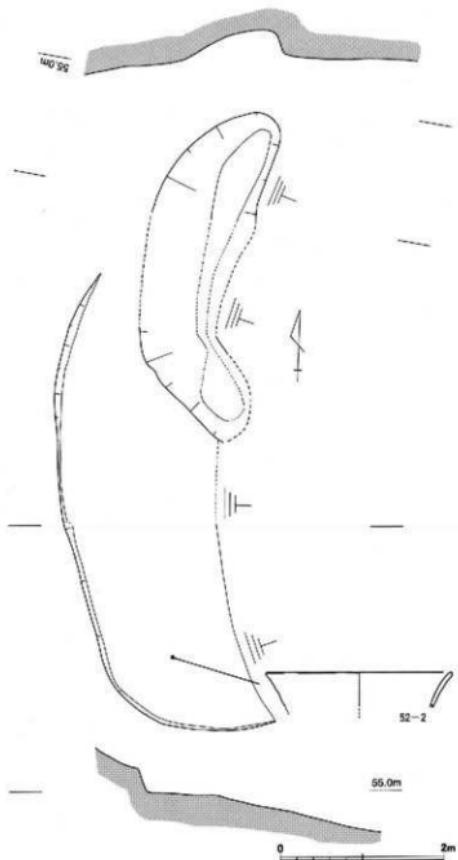
50-4は、甕の胴部である。胴部最大径付近に櫛による直線文を施し、その上下に櫛による波状文を配している。胴部下半には、荒いハケメを施しており、深いハケメが波状文を切っているかのように見える部分もある。内面は横方向のケズリである。

50-5は、弥生土器底部である。底面を僅かに持ち上げ、断面三角形の高台状の底部を持つ。

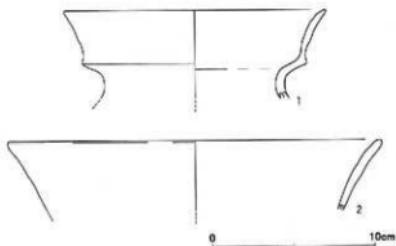
50-6は、器台である。磨滅のため調整は不明である。器壁が厚く内面は直線的に立ち上がる。



第50図 7号建物跡出土遺物実測図(S=1:3)



第51図 加工段3、4平面図・遺物出土状況(S=1:60)



第52図 加工段3出土遺物実測図(S=1:3)

加工段3・4 竹ノ崎遺跡に面した東側斜面では、用途不明の加工段3か所を検出した。いずれも弥生後期の土器がまとまって出土しており、5~7号建物跡と同時期に機能したものと考えられる。

加工段3(第51図)は、東側の急斜面に面する、標高55m付近で検出した半円形の加工段である。溝等は見られず、西側の壁面の高さは約30cmあり、平坦になった部分は南北約6m、東西約1.8mを測る。柱穴や焼土面は見られない。加工段のほぼ全面に亘って土器小片が出土しているが、図示できる大きさを持つものは僅かであった。北側の一画を加工段4によって切られている。

加工段4(第51図)は、加工段3の北側を切る、三日月形の遺構である。加工段と言うよりは溝に近い形状で、平坦面と言えるような面はない。西側では、深さ60cm程度も掘り込まれており、南北の両端も立ち上がっていることから、雨水は抜け難い形状になっている。加工段3を切り込んで作られているが、埋土には弥生土器小片が多数含まれており、加工段3と大きな時期差は認められない。特異な形状があり、その用途は不明である。

第52図に図示したものは、加工段3から出土した遺物である。加工段3・4からは多くの弥生土器が出土しているが、いずれも小片で、図示できるものは少なかった。

52-1は、壺である。複合部の稜を突出させず、口縁部を緩やかに外反させながら引き延ばし、口縁部先端を尖らせている。磨滅し

ているが、口縁部はヨコナデし、内面頸部より下をヘラケズリする。松本編年のV-4様式に含まれるものと思われる。52-2は、器台の口縁部と考えられるものである。磨滅しており、調整はほとんど見えないが、外面に櫛状工具による直線文が施されているようにも見える。

加工段5 加工段5 (第53図)は、加工段3・4の北側、標高約56mの傾斜地で検出した、L字形の溝を持つ平坦面である。検出できた平坦面は南北約7m、東西1.2mの細長い形状で、西側と南側に断面U字形の浅い溝が巡る。西側の壁面と溝の間には、僅かに隙間が見られる。

加工段5からは、多くの土器片が出土しており、第54図に示した。

54-1は、壺の頸部である。14条の櫛によると思われる平行線文の下に巻き貝に見える刺突を施したもので、松本編年のII-1様式に含まれるものであろうか。上野遺跡出土の弥生土器としては最も古い様相を示す。

54-2・3は、口縁部先端を尖らせる壺である。いずれも複合部の稜は突出させず、薄く引き延ばした口縁部を僅かに外反させ

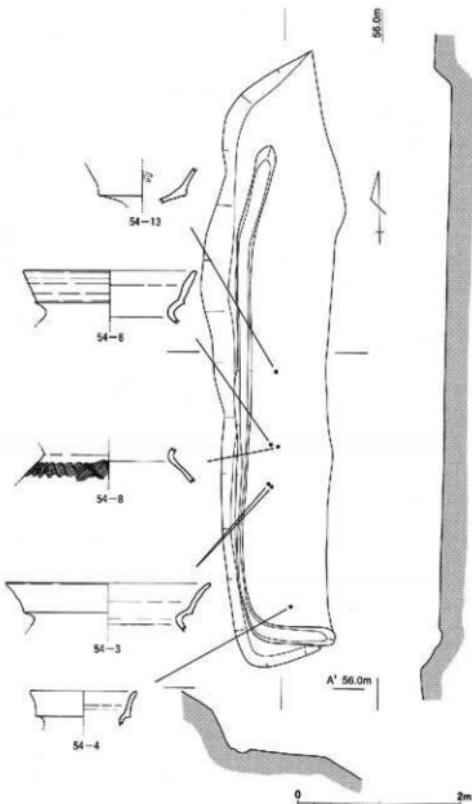
ている。口縁部外面はヨコナデしている。松本編年のV-4様式のものであろう。

54-4は、小型の壺である。複合部の稜は僅かに垂下し、緩やかに外反する口縁部は先端を丸く納める。口縁部外面には、文様は施さず、ヨコナデしている。松本編年のV-3様式のものであろうか。

54-5・6は、複合部の稜を横方向に突出させ、口縁部を引き延ばすものである。口縁部外面には強いヨコナデによる稜が走り、口縁先端の外側にアクセントを持つ。V-4様式でも新規に含まれるものと思われる。

54-7・8は、壺の頸部から胴部上半の破片である。54-8は、肩部に櫛による波状文を施す。

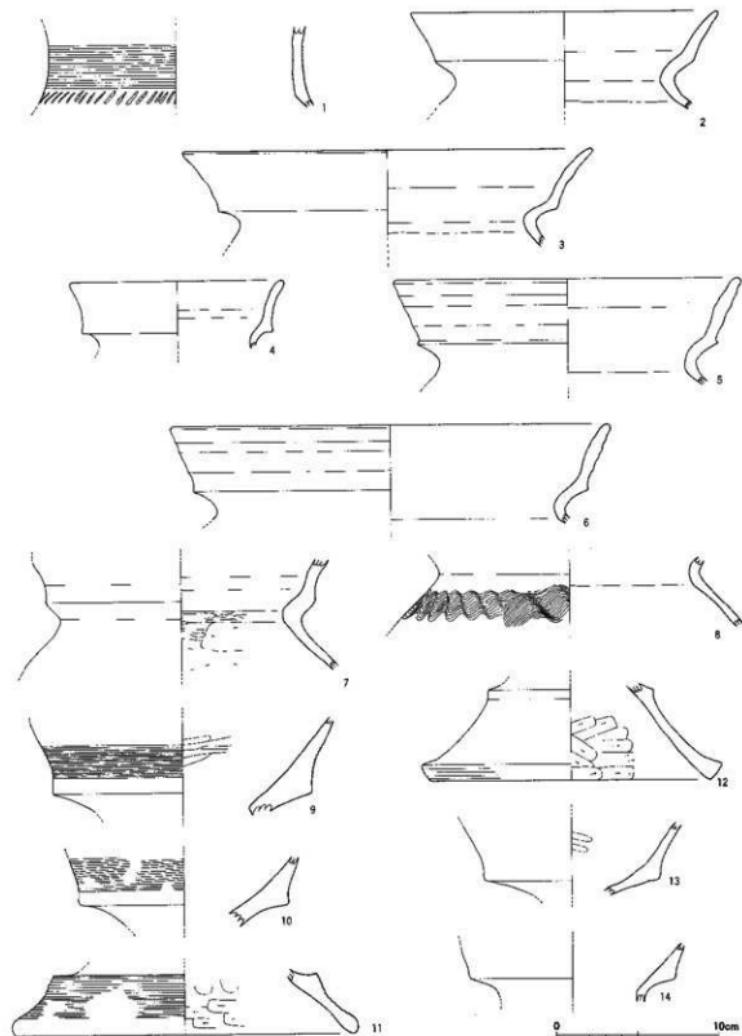
54-9~11は、口縁部(脚台部)外面に平行線文を施すものである。原体は不明であるが、54-11は貝であろうか。54-13~14も同様のものと思われる。



第53図 加工段5 平面図・断面図・遺物出土状況(S=1:60)

が、磨滅が著しく外面調整が見えない。いずれも松本編年のV-3様式に含まれるものと思われる。

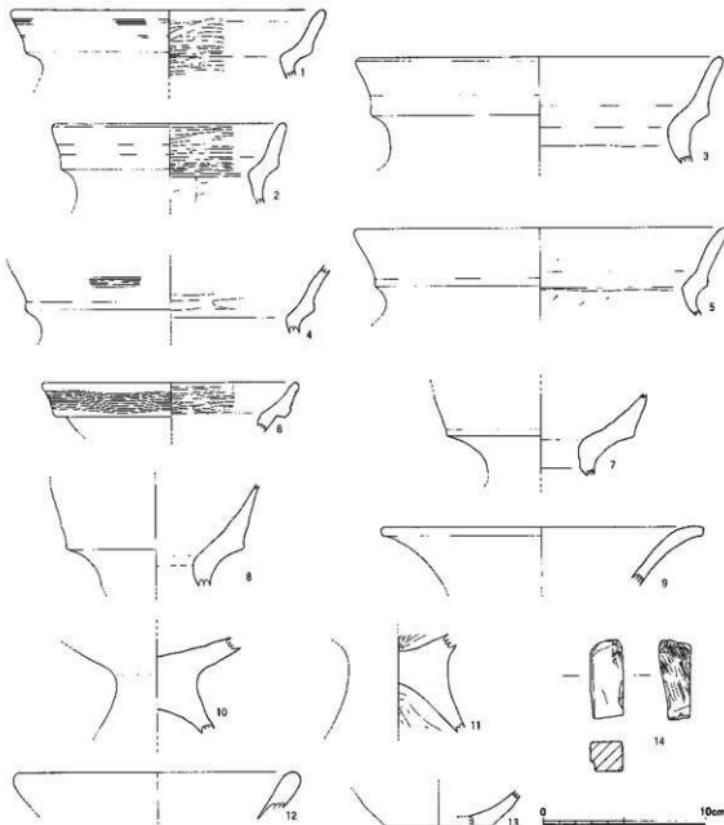
54-12は、脚端部に面を持つ器台である。磨滅により明瞭ではないが、端部の面に2条の直線文を施しているように見える。外面はヨコナデし、内面調整はヘラケズリである。あまり見かけない器形であるが、鳥取県青木A区SI04から同様の脚端部を持つものが出土している。



第54図 加工段5出土遺物実測図(S=1:3)

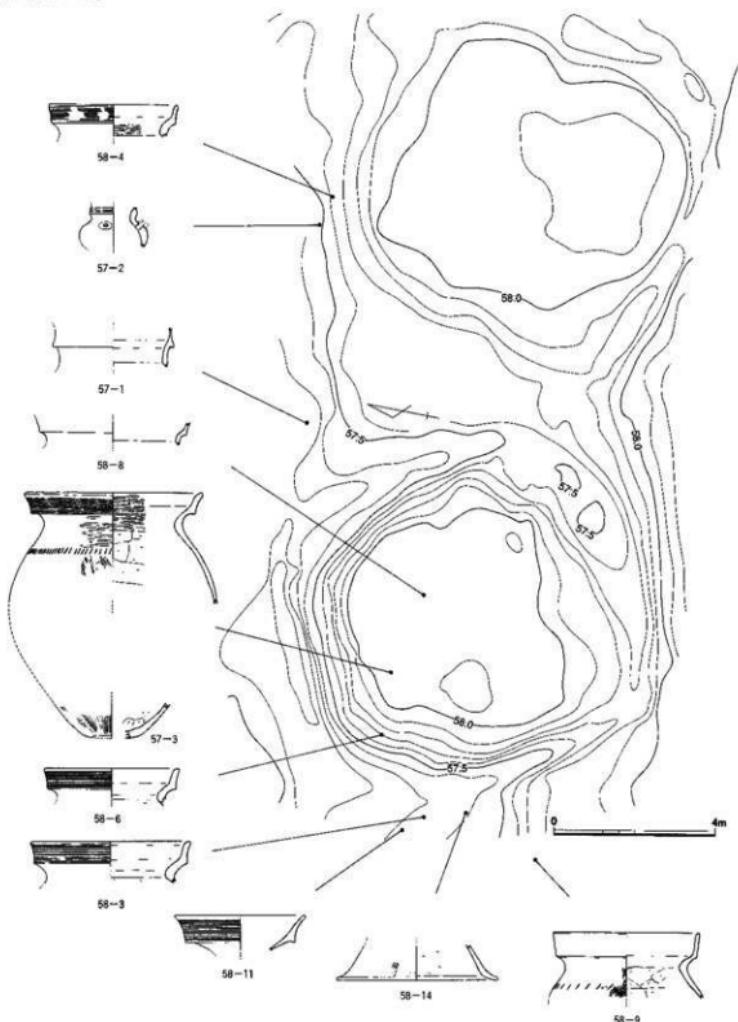
上野 4 号墳付近から出土した弥生時代の遺物 上野 4 号墳は 2 棟の弥生時代の建物跡の上に造られていることもあり、墳丘盛り土内や古墳周辺からは、多くの弥生時代と考えられる遺物が出土している。55-1~5 は、壺である。いずれも器壁が厚く、複合部の稜を突出させないので、口縁部は僅かに外反し、口縁端部を丸く作る。55-1・2 は口縁部内面に横方向のヘラミガキを施し、55-1 は口縁部外面の平行線文をナデ消そうとしているように見える。55-4 は、口縁部外面に僅かに櫛による平行線文の痕跡を残している。

55-6~9 は、器台と考えられるものである。55-6 は、複合部から口縁部先端までが短く、口縁部外面に櫛状工具による 4 状の平行線文を施すものである。器壁が厚く、内面には丁寧なヘラミガキを施す。55-7・8 は器壁が厚く、筒部の長いものである。いずれも磨滅しており、口縁部外面の調整は見えない。55-9 は、器蓋の薄いものである。受け部は直線的に延び、口縁部近くで外反する。内面は磨滅しているが、外面調整はヨコナデである。



第55図 上野 4 号墳付近出土遺物実測図 (S=1:3)

55-10・11は、高壺と思われるものである。いずれも器壁が厚く、55-11は壺部内面にヘラミガキが、脚部内面にケズリが見られる。55-12は鉢であろうか。器壁が厚く、口縁端部を丸く作っている。55-13は、底部の小片である。復元直径約6cmの平底で、底面はナデである。55-14は淡黄褐色を呈し、硬質の石材を使用した砥石である。1辺2cm程の角柱状を呈し、4面に密に擦痕が見られる。



第56図 上野2、3号墳付近赤生土器出土状況(S=1:40、遺物はS=1:6)

上野 2・3号墳付近の弥生時代の遺物 西側斜面に面した上野 2号墳の周溝を検出作業中には、比較的まとまって弥生土器が出土している（第56図）。付近に弥生時代の遺構が存在したものと推定し周辺を精査したが、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。比較的大きな破片がまとまって出土するのは、上野 2号墳西側の周溝内で、57-3・58-6などの破片が散乱した状態であった。また、3号墳北側の周溝から2号墳西側にかけて、点々と弥生土器片が出土しており、付近の弥生時代の遺構を削って2・3号墳が構築されたものと思われる。

第57-58図には、上野 2・3号墳周辺から出土した弥生土器と思われるものを図示した。

57-1は、複合口縁を持つ壺であろうか。複合部は大きく垂下し、頸部が直線的で長い。調整は内面頸部下からケズりが見られる以外は、磨滅のため不明である。

57-2は、ミニチュアの注口付き壺と考えられる。複合口縁になっているものと思われ、口縁部外面に3条以上の平行線文を施す。

57-3・58-1～10は、壺である。口縁部外面に直線文を施すもの（57-3・58-1～7）が多く、原体を推定できるものはいずれも貝によると思われる。57-1・58-9は、肩部に貝殻腹縁による刺突を施している。58-9は複合部から上を薄く引き延ばすので、口縁端部を尖り気味にするものである。

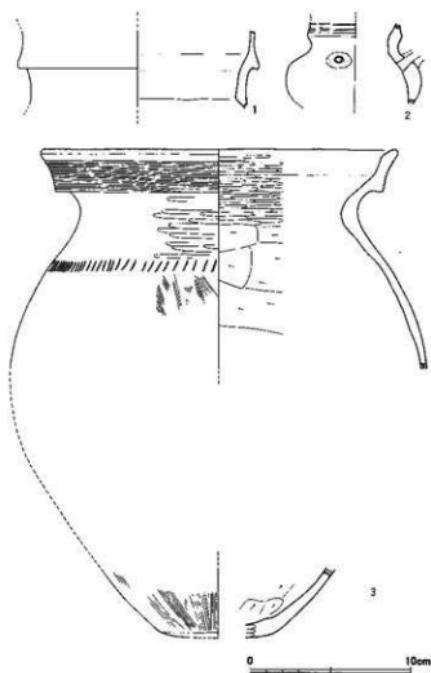
58-11～16は、器台である。58-11は複合部の稜を大きく垂下させるもので、拡張された口縁部外面には、貝による平行線文を施す。

58-12も平行線文を施すものであるが、複合部の稜は垂下させない。

58-13～16は、口縁部外面に平行線文を施さないものである。斜めに長く張り出す脚台部を持ち、脚端部内面にアクセントを持つ。外面に縦方向のハケメを残すものが多い。

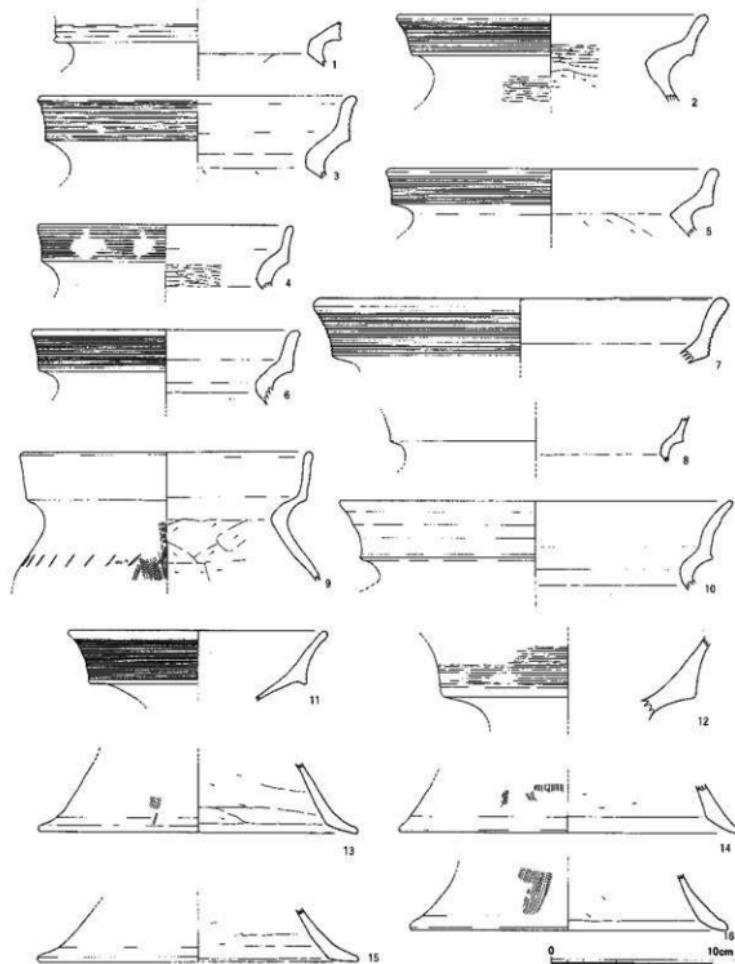
遺構に伴わない弥生時代の遺物 上野遺跡Ⅱ区からは遺構に伴わない多くの弥生時代と考えられる遺物が出土しており、これらを第59図に示した。上野遺跡Ⅱ区は、上野遺跡Ⅰ区や上野Ⅱ遺跡などと同様の弥生集落であったと考えられるが、後の古墳築造や中世の改変によって、その多くが削平されているものと想像される。表土掘削中には、遺跡の隨所から弥生土器片が出土しており、検出できた遺構以外にも多くの弥生時代の遺構が存在したものと考えられる。

59-1～17は、壺と考えられるもの

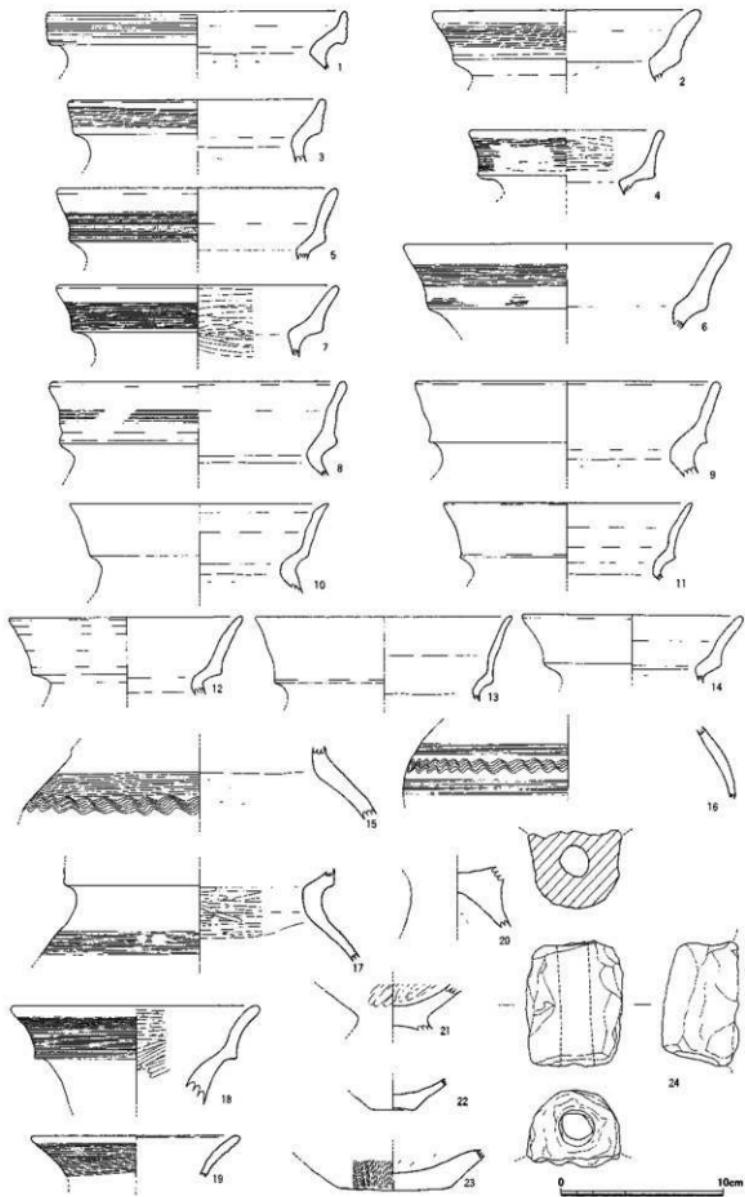


第57図 上野 2・3号墳付近出土遺物実測図(1)
(S=1:3)

である。59-1は、口縁部を上下に扯張し、口縁部外面に4~5条のヘラ描き直線文を引くものである。59-3も同様のものと考えられるが、複合部下端の垂下が無く、施文は梯による。59-2・4~8は器壁が厚く、口縁端部を丸く作り、口縁部外面に平行線文を引くものである。59-2は、口縁部を大きく開くもので、施文は貝によるものであろうか。59-4・7は、口縁部内面をヘラミガキする。直線文を施さないが、59-9・14も同様のものと思われる。59-10~13は、口縁部を薄く引き延ばし、口縁部先端を尖らせるものである。59-15~17は、甕の肩部と考えられるものである。59-15・16は、頭部をヨコナデし、その下に櫛描きの平行線文と波状文を配している。59-



第58図 上野2、3号墳付近出土遺物実測図(2) (S=1:3)



第59図 上野遺跡 II 区出土弥生土器実測図 (S=1:3)

17には、波状文が見られず、頸部内面をヘラミガキするものである。59-16は、外面にススが厚く付着している。

59-18-19は器台と考えられるものである。口縁部外周に平行線文を密に施し、口縁端部を丸く作るもので、59-18は、受け部内面にヘラミガキを明瞭に残す。59-19は小型のもので、器壁が薄く作られている。小片のため判断できないが、口縁部がやや長い印象を持つ。

59-20は、高坏である。全面磨滅しており、脚部内面のケズリ以外の調整は、ほとんど見えない。

59-21は、低脚坏と考えられるものである。坏部は内外面ともヘラミガキする。

59-22-23は、底部の小片である。59-22は、高台状に底面を持ち上げている。59-23は、平底で、外面に縱方向のハケメを入れている。

59-24は、山陰系瓶型土器の吊り手と考えられるものである。雑にナデつけることによって調整され、1面に本体からの剥離痕を残す。吊り手としてはやや長く作られており、本体に対して縱方向に付くものであろうか。磨滅が著しく被熱痕等は確認できない。

上野遺跡II区で出土する弥生土器は、松木編年のV-3~4様式を中心で、59-1など僅かに古いものも含まれる。上野遺跡I区が概ね松木V-4様式を中心とする時期と思われることから、時期的に重なるか、やや遅るものと思われる。上野遺跡I区以上に砥石を多く持つ集落であるが、鉄製品の出土は見られなかった。

第2節 上野古墳群

上野遺跡II区では、尾根筋を中心に古墳9基と土塙墓1基を検出したほか、調査区外にも2基以上の古墳が見られる古墳群である。上野遺跡の古墳群は、長径約40mの円墳である上野1号墳を除くと、いずれも一辺10m前後の方墳からなり、総数は12基以上と思われる。

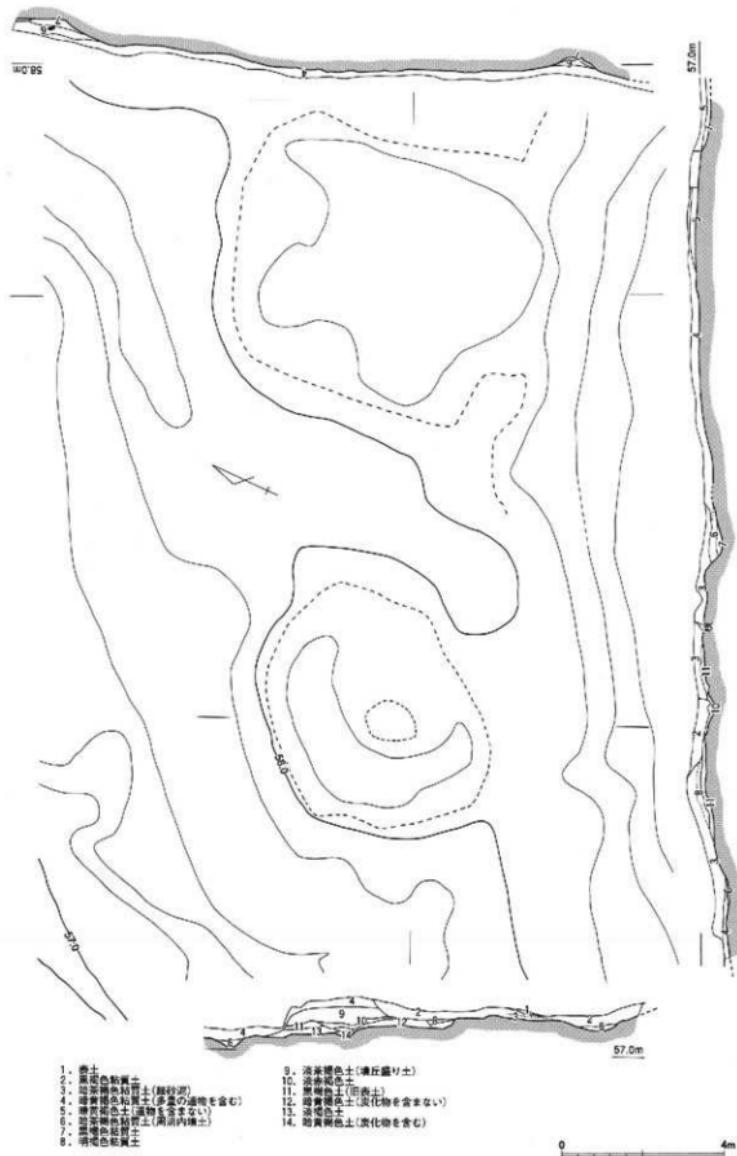
上野2・3号墳 上野1号墳周辺の古墳群は、尾根筋に立地する上野8号墳を中心に西に上野2・3号墳、東に上野5・9号墳と、あたかも上野1号墳の墳丘を取り囲むように造られている。この内、上野2・3号墳（第60~66図）は、隣接して造られた一辺7~8mの方墳である。

上野2号墳の墳丘（第60図）は、後世の改変で、大きく変形しており、調査前の時点では墳丘の形状を円墳と判断していた。土層観察用畔を隣接する3号墳と同時に設定したこともあり、結果として対角線に近い位置での土層断面となった。それによると、2号墳の墳丘南東側は地山を削り出し、薄い盛り土を施しているようであるが、墳丘北西側は多くを盛り土で構築されている。地山面をほぼ水平に削平した後、9淡茶褐色土を中心とする盛り土が施されてようで、地山面から連続して旧表土と思われる、11黒褐色土が見られる。11黒褐色土より下層にも、12暗黄褐色土など地山でない土層が見られるが、これらが弥生時代の遺構であった可能性も考えられる。

6暗茶褐色粘質土と7黒褐色粘質土は、周溝に伴う変色と思われ、古墳構築以後の堆積土である。4黄褐色粘質土は、北西側周溝まで途切れることなく連続して堆積しており、4黄褐色粘質土より上層は、全て後世の堆積土と考えられる。

上野3号墳の墳丘は、墳頂部のほぼ全面に4暗黄褐色粘質土が見られ、墳頂部を大きく削平されているものと思われる。上野2号墳と接する周溝に共有関係が見られるが、後世の堆積土である4黄褐色粘質土が切り込んでいるため、明確な切り合いは確認できなかった。

2号墳の墳丘（第61図）は一辺約7mを測り、周囲に周溝が巡らせるが、傾斜地に立地するため



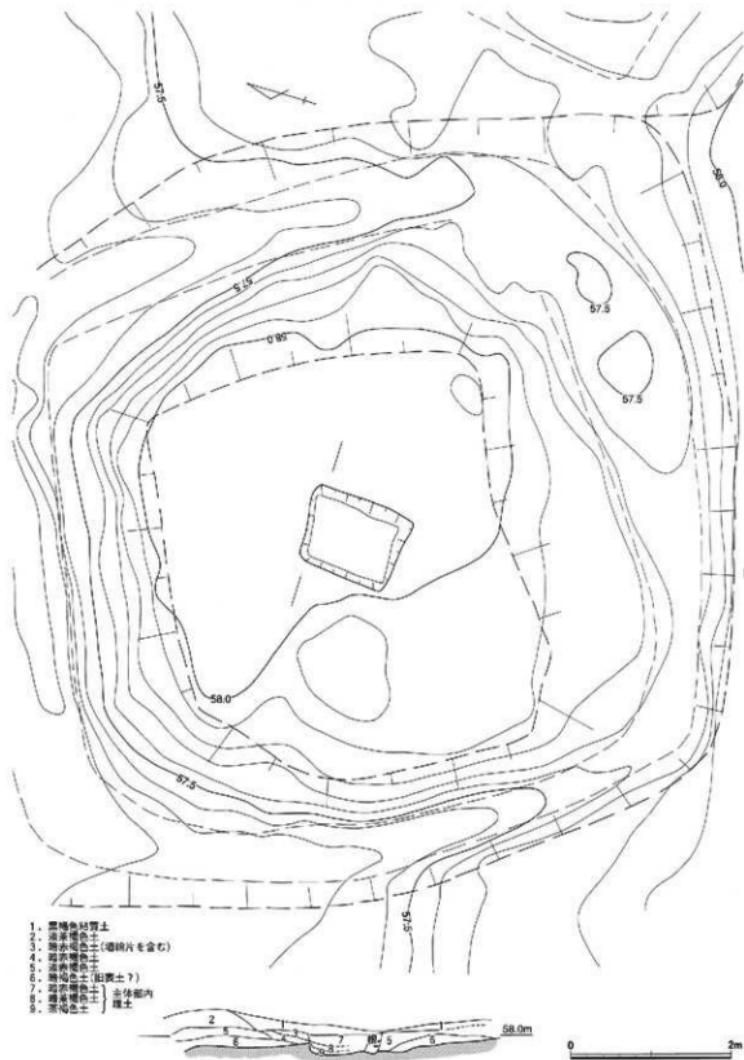
第60図 上野2、3号墳調査前地形測量図・土層断面図 (S=1:120)



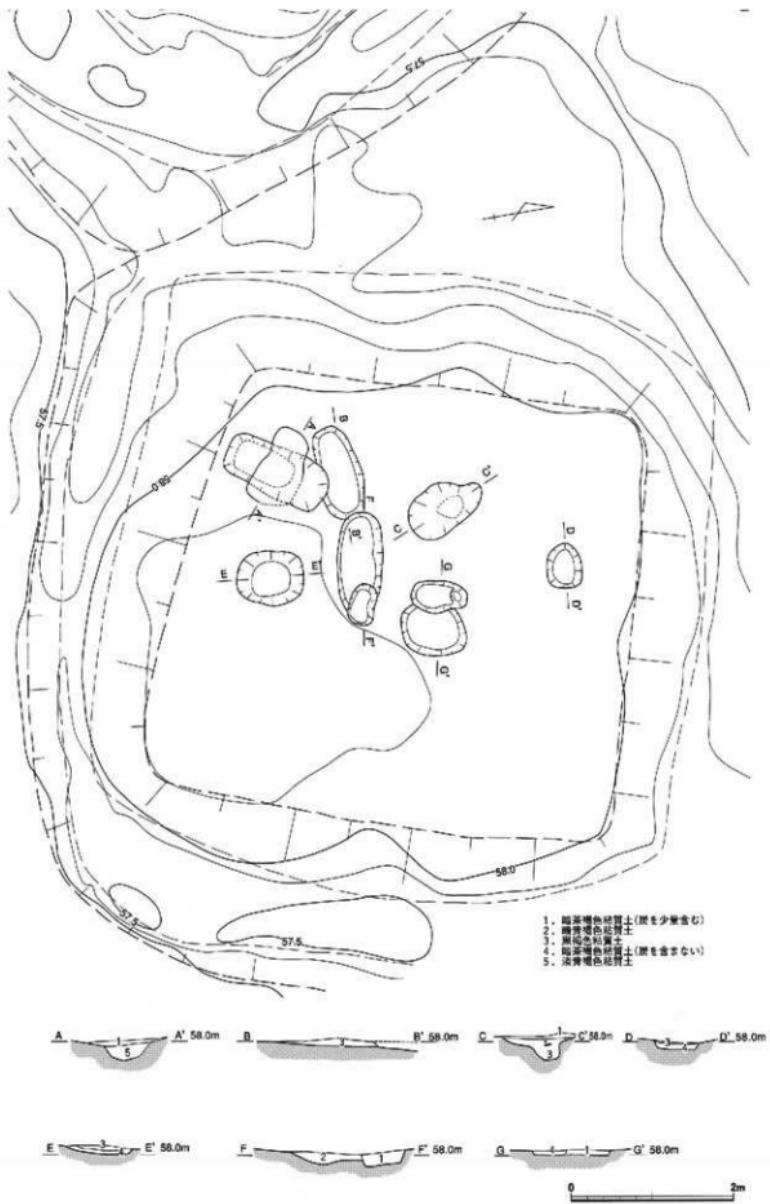
第61図 上野2、3号墳地形測量図・断面図 ($S = 1:120$)

周溝南側がやや高くなっている。4 黄褐色粘質土の堆積状況から、墳頂部は削平を受けているものと想像されるが、現状で墳丘頂部の標高が約58mを測り、北側での墳丘の高さは約90cmである。

3号墳は一辺約8mの方墳であるが、墳丘の主軸は上野2号墳と異なっている。周溝床面が2号墳より20~30cm程高く、残存する墳丘の高さは約40cmである。



第62図 上野2号墳主体部実測図(S=1:60)

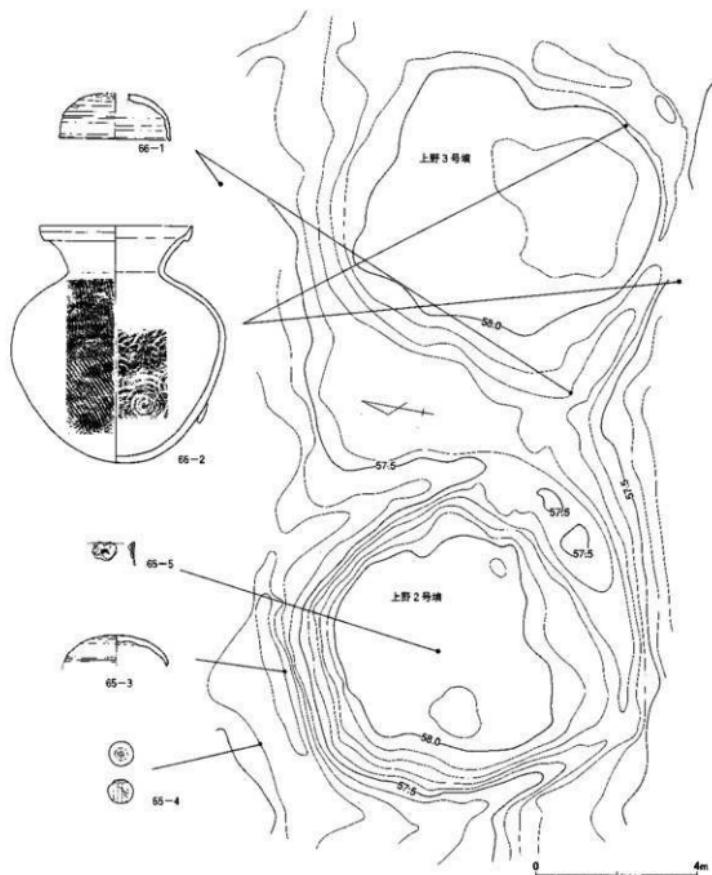


第63図 上野3号墳主体部実測図(S=1:60)

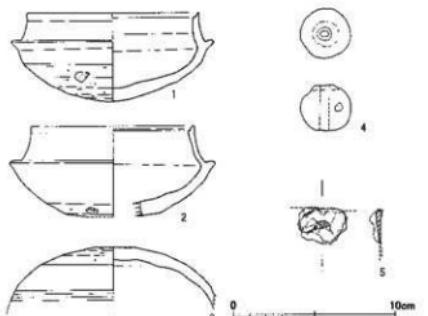
2号墳墳頂部では、主体部と考えられる長方形の土壙1基を確認した(第62図)。3暗黄褐色土(第60図の5層)から切り込まれているもので、長さ約1.2m、幅約1m、深さ25cmを測る。幅が広く不自然な形状であるが、墳丘中央に位置し、埋土からは用途不明の金属器(65-5)も出土している。

第63図は3号墳墳頂部の精査後の状況であるが、削平を受けており、確定な主体部を検出することはできなかった。検出した落ち込みはいずれも根攪乱等によるものと思われ、壁面が明瞭でなく、主体部ではないと考えている。

上野2号墳主体部付近から鉄製品の破片が出土した以外は、上野2・3号墳墳頂部からは遺物は出土していない。2・3号墳周辺での出土遺物は、全て周溝からの出土である(第64図)。上野2



第64図 上野2、3号墳遺物出土状況(S=1:120)

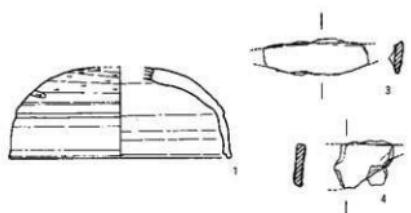


第65図 上野2号墳出土遺物実測図 ($S = 1:3$)

号墳近くからは須恵器と土玉（第65図）が出土しているが、いずれも北西側周溝内からの出土である。3号墳では、南側の周溝から須恵器が出土しているが、このうち須恵器壺（66-2）は、南側周溝の中程で小片となってまとめて出土したものである。

第65図には、上野2号墳出土遺物を図示した。

65-1・2は須恵器壺である。65-1には歪みがあり、65-2が小片のため、い



ずれも復元口径が小さめに出ているが、カエリが高く立ち上がり、丁寧なケズリが見られることから、大谷分類のA2～3型に含まれるものと思われる。蓋（66-3）は端部を欠くため口径が不明だが、丁寧なケズリが見られる一方、肩部の稜は沈線化しており、大谷分類のA3型と思われる。出土状況からはこれらの土器が確実に2号墳に伴うとは言い難いものの、大過無いものと思われることから、上野2号墳は出雲3期前後の構築と思われる。

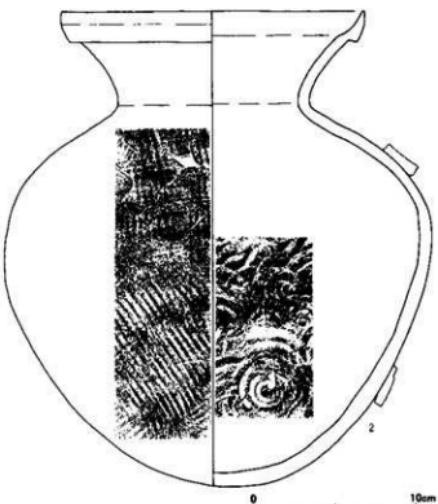
65-4は、2号墳西側周溝から出土した土玉と考えられるものである。淡黄褐色を呈し、一部に煤が付着している。

65-5は、主体部の埋土から出土した金属片であるが、出土位置は床面ではない。一側辺のみが原型を留める薄い板状のもので、表面には鏽に混じって炭が付着している。本来の形状や用途は不明である。

第66図に図示したものは上野3号墳出土遺物である。

66-1は、2・3号墳の間の周溝から出土した須恵器蓋である。出土位置が近かったことから3号墳に伴うものと考えた。頂部に丁寧なヘラケズリが見られるが、肩の稜は沈線化しており、復元口径が約14cmであることから大谷分類のA3型に含まれる。

66-2は、須恵器広口壺である。頸部から口縁部にかけては無文で、肩部と胴



第66図 上野3号墳出土遺物実測図 ($S = 1:3$)

部下方に窓着が見られる。3号墳出土土器は2点のみであるが、蓋が、A3型であることから出雲3期と思われる、広口壺の口縁部の形態も矛盾しないと思われる。

66-3・4は、周溝内の堆積土中から出土した金属器であるが、いずれも形態は不明である。66-4には、木質と思われる付着物が見られる。

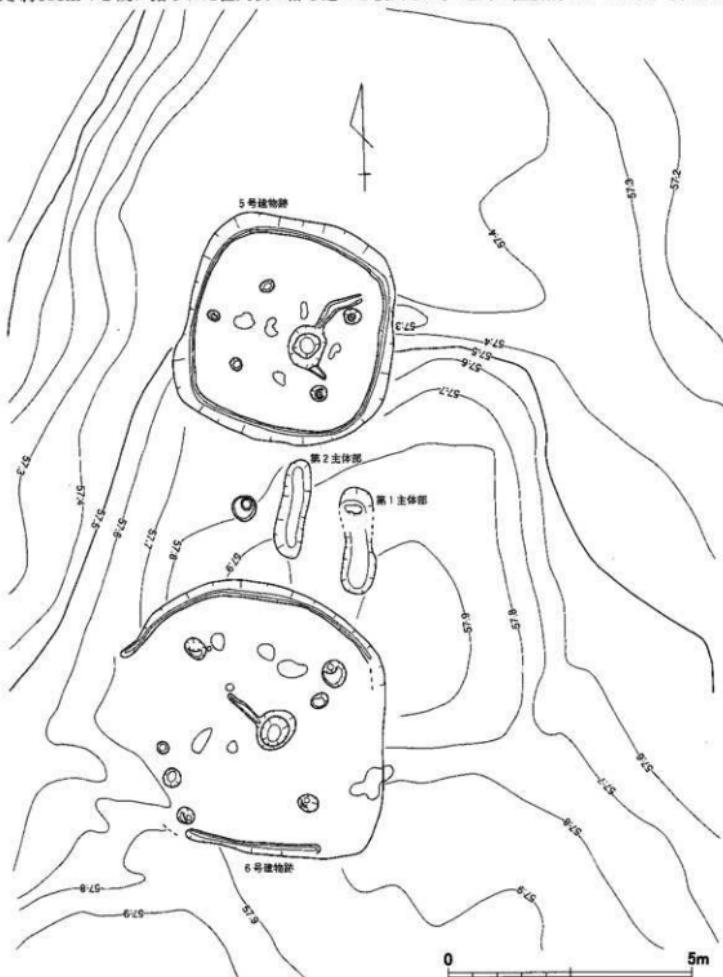
上野4号墳 上野4号墳は、尾根筋の標高約58mに立地する1辺約6mの方墳である。尾根筋に位置する古墳は上野8・4・6・7号墳があるが、いずれも方墳で墳丘の主軸をほそろえている。4号墳(第67図)は、弥生後期の建物跡である5・6号建物跡直上に構築されたもので、5号建物跡に直接掛かる部分には多くの盛り土が施される一方、南側でやや標高の高い6号建物跡付近は削り出している。上野遺跡の他の古墳と異なり、古墳間の距離が離れているため大きく感じるが、一辺約6m、北側での高さ約80cmの小規模な古墳である。周囲の地形は、道などによる中世以降の



第67図 上野4号墳墳丘測量図・土層断面図(S=1:150)

改変が及んでいるが、北側に周溝が残り、他の3面にも十層観察では周溝の痕跡が見られる。墳丘は、南側で地山を削り出し、北側で盛り土を行っている事までを確認したが、墳頂部からの掘り込みが全く見られず、当初は主体部が存在しないものと考えていた。第68図は、盛り土除去後の状況であるが、地山面に掘られた2基の主体部と柱穴状の落ち込みを検出した。

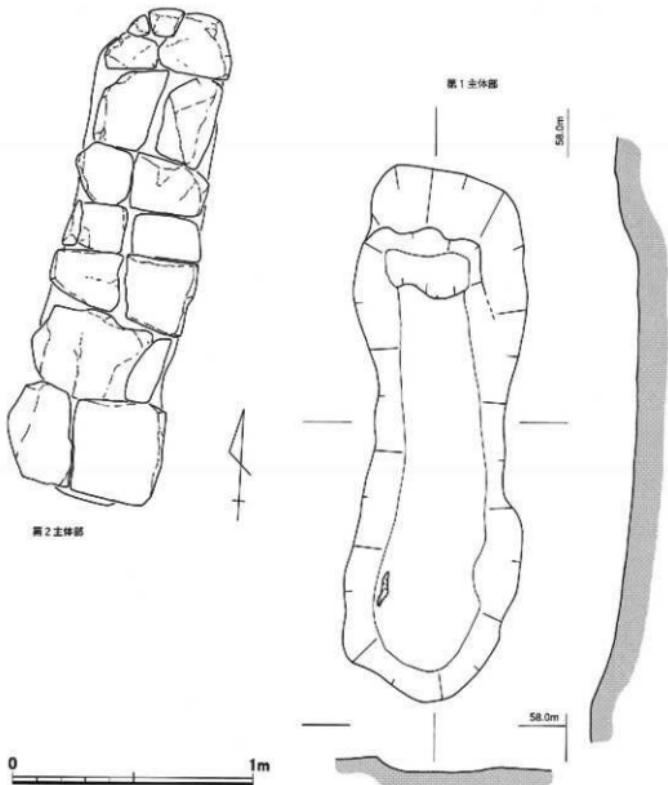
検出した2基の主体部は発見順に東側のものから第1・2主体部と呼んでいる。いずれの主体部も主軸を南北方向に取り、墳丘の主軸と一致させている。また、第2主体部の西側から直径約50cm、深さ約60cmの2段に掘られた柱穴状の落ち込みを検出した。地山に直接掘られており、墳丘面か



らの掘り込みが確認できなかったため、4号墳構築時かそれ以前に掘られたものと考えられるが、遺物を作つておらず、時期・用途は不明である。

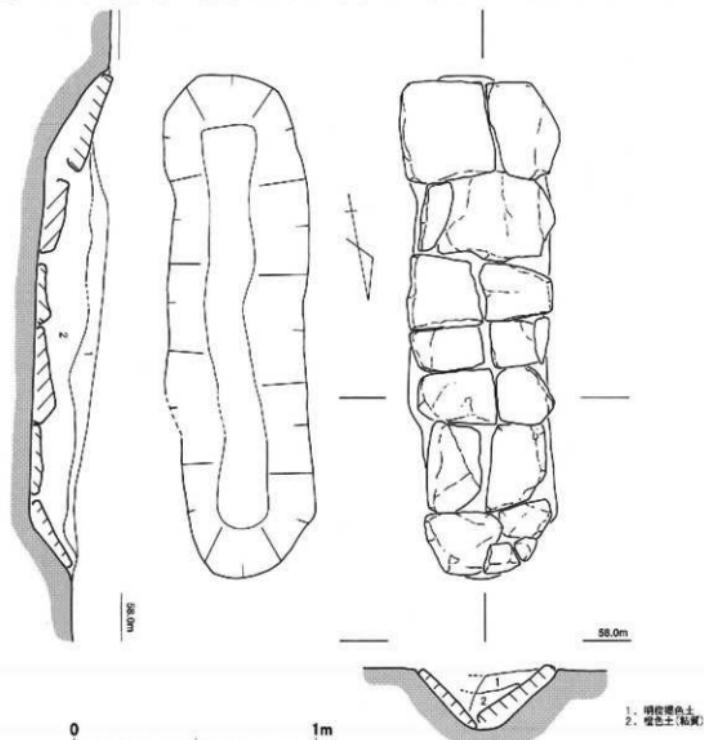
4号墳第1主体部(第69図)は、地山面での浅い落ち込みとして検出したもので、墳丘盛り土の途中から掘り込まれたものと思われる。長さ約2.2m、幅約50cm、深さ約10cmを測り、中程が掘れた不整形である。床面は僅かに湾曲しており、北側がやや低く、小さな落ち込みが見られる。各壁面は直立せず、外側に向いている。土壤内部の堆積土は、地山風化土である暗褐色砂質土だけが入っていたり、木棺等の痕跡は確認できなかった。第1主体部の南側の床面直上からは小型の刀(73-1)が出土しており、床面の高さと合わせ、南が頭位方向であろう。第1主体部からは、他に遺物は出土しなかった。

第2主体部(第70図)は、第1主体部の西に1m程離れて検出した石蓋土壤である。主軸方向は第1主体部と一致するが、墳丘中央からやや北側に位置している。4号墳盛り土除去後に石蓋を検出したもので、盛り土上面では掘り込みを検出していない。石蓋を検出した範囲は南北約2m、東



第69図 上野4号墳第1、2主体部実測図(S=1:20)

西約60cmの範囲で、いずれも土壌内に落ち込み周縁だけが露出していたことから、当初は2列に並んだ石列として検出した。蓋石の周縁の内側には、2種類の粘質土が入り込んでいたが、第67図の6黄褐色土に相当する土と認識しており、4号墳の盛り土そのものと考えられる。蓋に使用される石材は砂岩質の非常に脆い石材で、いずれも中央付近で折れ、17点に分かれて出土したが、当初は、幅80cm前後の長方形の板石が5~6枚程度であったものと思われる。現地では、蓋石の復元を試みたが、周縁が磨滅して丸くなってしまっており、持ち上げただけでも崩れ落ちるほど劣化しており、当初の枚数を確認できなかった。石蓋土壌の形状は、蓋石の幅が80cm前後と推定され、墓壙の上面の幅が60cmしか無いことから、蓋石が墓壙上面に掛かっていたものと思われる。検出状況より、地表面に墓壙を掘削し、その上面に直接蓋石を掛けたものと思われる。蓋石を取り去ると、下部構造は素掘りの土壌となっており、南北約2.1m、東西約0.6mの楕円形を呈している。各壁面は大きく傾斜し、東西方向の断面はV字形に近いものとなっており、深さは約25cmである。床面は、南北約1.7mの長さを持つが、東西幅は約20cmと狭い。折れた蓋石は、墓壙床面に完全に接触しており、蓋石と床面の間にはほとんど隙間ではなく、木棺の痕跡は確認できなかった。検出面では南側がやや高いものの、床面は第1主体部と異なりほぼ水平で、墓壙の幅にも明確な変化が見られないことか



第70図 上野4号墳第2主体部実測図(S=1:20)

ら、頭位方向は不明である。第2主体部は、次に説明する墳丘の構築過程から考えて、4号墳の中心主体部と考えられるにも関わらず遺物は出土しなかった。

第1主体部が、墳丘盛り土の途中から掘り込まれた可能性がある一方、第2主体部の蓋は地山面に直接かけられていることから、4号墳の構築過程は、地山面を形成した後、第2主体部が地山面に直接掘り込まれ、その後に墳丘の盛り土を開始した。墳丘の盛り土を始めてから第1主体部を掘り込み、更に墳丘全面に盛り土を施したものと考えられる。

上野4号墳に、確実に伴うと思われる遺物（71図）は、第1主体部出土の刀（73-1）のみで、4号墳の時期を特定できる遺物は出土していない。71図に図示したもの以外にも墳丘盛り土からは多数の土器片が出土しているが、いずれも弥生土器と考えられるもので、4号墳に伴うと考えられるものは見られなかった。また、周溝内の埋土からは、少量の円筒埴輪片が出土しているが、いずれも小片で原位置を保つものとは考えられず、1号墳からの流れ込みであろう。他に、4号墳に伴う可能性が高いものは、管玉（73-3）のみである。

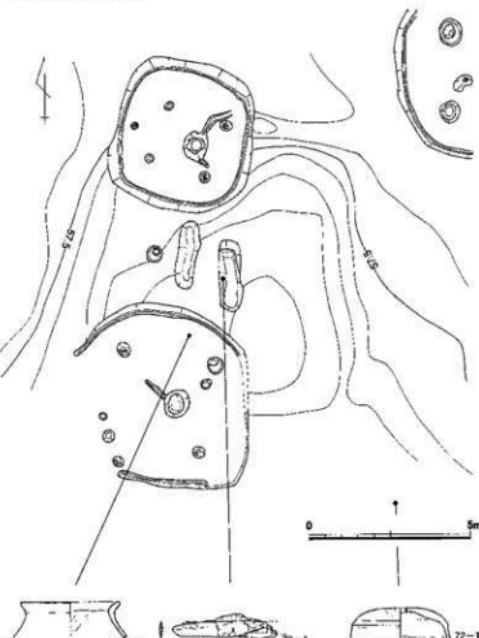
72-1は須恵器蓋であるが、出土位置は周溝より外側で、むしろ8号墳に伴う可能性が高い。周辺は、中世に削平され、平坦面に加工する造成が行われているものと見られ、遺物の位置が大きく移動しているものと思われる。72-2は、6号建物跡への流入土から出土した土師器である。古墳時代のものと考えられるが、口縁部付近の小片のみで、他に接合する破片が見あたらなかった。

第72・73図は、4号墳周辺からの出土遺物である。

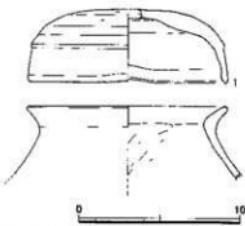
72-1は、小片を接合して復元した須恵器蓋で、破片は比較的まとまって出土した。4号墳と8号墳の間から出土したもので、出土時は4号墳に伴うと判断したものである。歪みが見られるが、復元口径は13.5cm前後になると見られ、頂部に丁寧なヘラケズリを施し、肩部の稜を明瞭に残すものである。大谷分類のA1型に当たり、出雲1期のものであろう。

72-2は、土師器の壺である。復元口径12cm程の小型のもので、厚く短い口縁部を大きく開く。内面は縦方向にケズリが施され、器壁は薄い。胴部外面に僅かに焦が付着している。

73-1は、4号墳第1主体部から出土した小型の刀と考えられるものである。柄装具と思わ



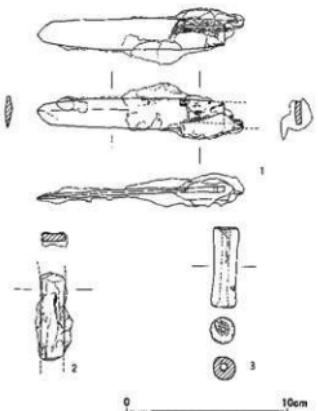
第71図 上野4号墳付近遺物出土状況(S=1:150)



第72図 上野4号墳付近出土遺物 実測図(S=1:3)
の峯側が木質上端と接しており、刃部を下にして峯側から落とし込んで装着したものと思われる。現状で柄装具本体に当たる部分は、直径1.5~2cmの円筒形を呈すものであるが、断面形状ではその外側に板状のものが付着しているように見える。これが装具から統くものなのか、別の付着物なのかは現状では判断できない。

73-2は断面長方形を呈する金属器片で、墳丘上面から出土した。両端を欠くが、残存長5.8cmを測り、上端側が僅かに開き気味になる。鋲が厚く付着しているが、木質に見える部分もあり、木製のシャフトに装着して使用するものと思われる。

73-3は、大型の管玉である。墳丘盛り土を掘削中に出土したもので、墳丘盛り土より下に位置していたと考えられる。長さ49mmを測る大きなもので、僅かに気泡の入る淡緑灰色を呈したものである。ガラスであろうか。両端部の開口部は軸から僅かにずれる窪み(73-3図の立面図の左上に延びる弧)が見られるが、両端とも同一方向に延び、糸擦れによる窪みに見える。73-3の出土位置は盛り土の内側であり、墳丘面ではない。よって、どちらかの主体部内に有った可能性が高いが、石蓋土壙である第2主体部は、蓋石が完全に残存していたことから、内部の遺物が外に出ることは考えにくく、第1主体部に有ったものと想像される。第1主体部は、墳丘盛り土の途中から掘り込まれた可能性が高く、検出時にはほとんど床面であったことから、主体部内の遺物を盛り土掘削中に採取した可能性は高い。



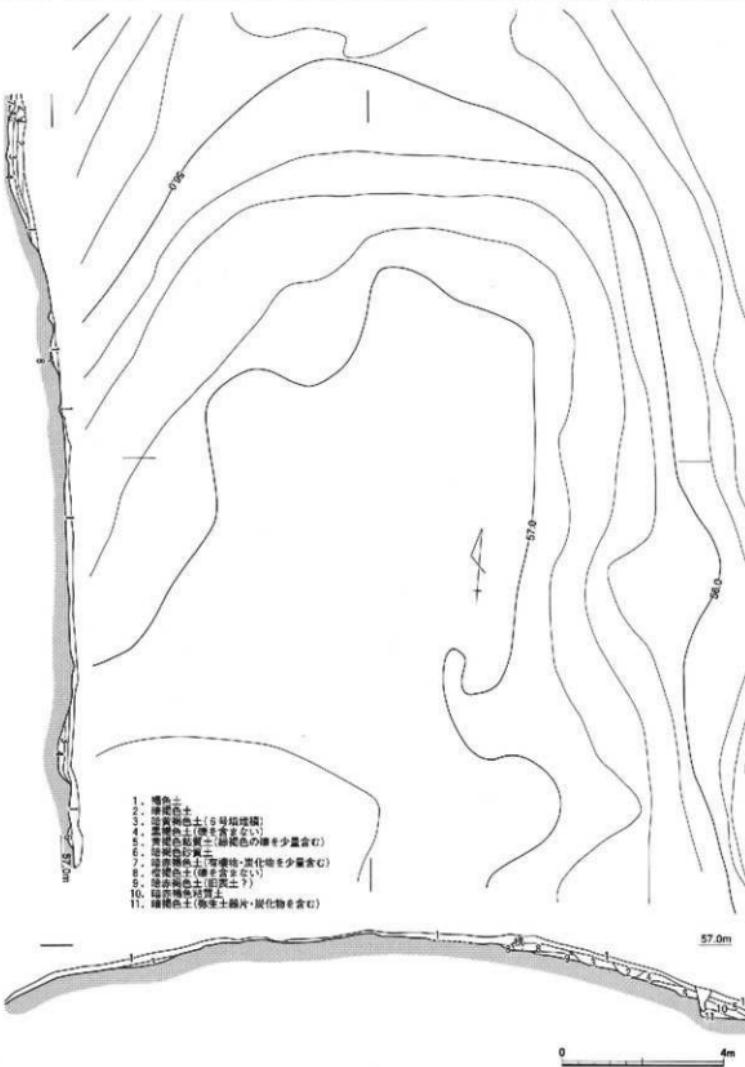
第73図 上野4号墳出土遺物実測図
(S=1:3)

れる木質が残存しているほか、刀身付近にも木質らしい付着物が見られ、鞘があった可能性がある。切先は峰側からも斜めに落ちる特異な形状になっており、鏡は片側にしか見えない。刃身の形状は峰側は直線的に延びるが、刃部側は僅かに丸みを帯びながら、切先に向けて細くなっている。切先の形状が特異なことから、折れた刀を研ぎ直して短刀としたものであろうか。茎の形状は短い台形を呈し、目釘穴は1か所である。柄装具と思われる木質の形状は明瞭ではないが、茎

上野4号墳の東側には、5号埴輪棺(第137図)が位置している。5号埴輪棺自体に墳丘や周囲の区画は見られず、上野1号墳や他の埴輪棺からも離れた位置にあることから、5号埴輪棺は4号墳に伴う可能性がある。5号埴輪棺は埴輪用棺であるが、上野遺跡で1号墳以外に埴輪を持つ古墳は見られない。上野4号墳出土遺物で時期を確定できる資料には恵まれなかつたが、5号埴輪棺が4号墳に伴うものとすると、上野4号墳は1号墳築造以降のもので、1号墳と大きく時期差はないものと思われる。

上野6号墳 上野6号墳(第74~77図)は、尾根筋の標高約57m付近に立地する、南北約14m、東西約11m

の方墳である。傑出した規模を持つ上野1号墳以外では、上野遺跡で最大の古墳である。上野4号墳北側に隣接し、周溝の一部を上野7号墳と共有する位置関係にある。土層堆積状況(第74図)では、墳丘上面は表土の一部である1褐色土で覆われ、その直下に地山が見られることから、墳頂部は大きく削平されているものと考えられる。東西の斜面では明瞭でないが、南北の周溝は4黒褐色



第74図 上野6号墳調査前地形測量図・土層断面図(S=1:120)

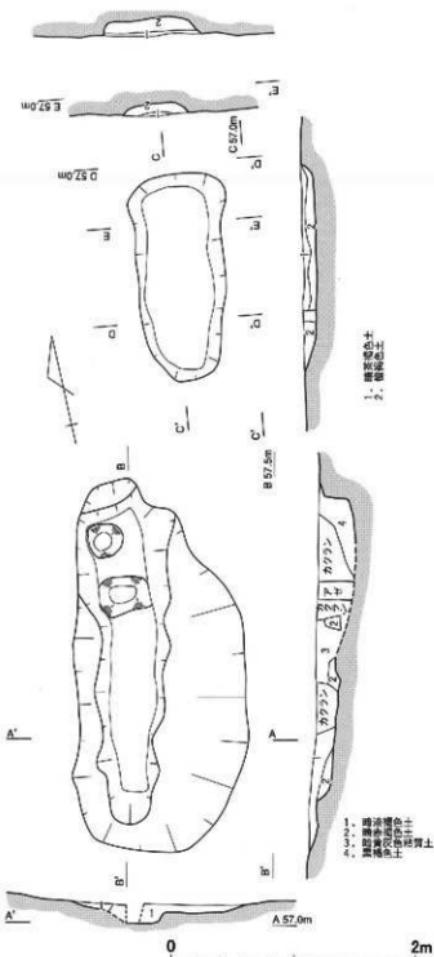
土が明瞭に見える。北側の7号墳との間の周溝は、幅が広いものの、堆積土で見る限り南側の周溝と明確な差が見られず、7号墳との切り合いは確認できない。土層断面東側の複雑な状況は、弥生時代の造構である加工段5との切り合いによるもので、5黄褐色砂質土より下層は加工段5の埋土で、9暗赤褐色土が6号墳構築時の旧表土であると考えられる。6号墳墳端は3暗黄褐色土が堆積している付近と考えられるが、後世の掘り込みによって明瞭ではない。墳頂部が削平されているが、南側周溝から墳頂までの高さは約1mである。

6号墳墳頂部は削平が及んでいるが、精査の結果、南北に並んだ主体部と考えられる2基の落ち込み（第75・76図）を検出した。検出した場所は、墳丘のほぼ中央で、落ち込みの主軸は墳丘の主軸とはほぼ一致する。

北側の落ち込みは、長さ約1.7m、幅約70cmの楕円に近い形状で、深さ10cm程度の浅い土壌である。床面はほぼ水平で、東西の壁面は直立気味に立ち上がるが、南北の壁面は明瞭でない。遺物はなく、土層堆積状況からは、木棺等の痕跡も見られなかった。

南側の落ち込みは、北側の落ち込みから1mほど離れて位置し、主軸は北側のものと同様に南北方向に取る。根による攪乱が多く入っているため、検出した形状は不安定なものとなったが、長さ約2.9m、幅約1.4mを測り、2段に掘り窓められている。土層断面では攪乱土が多く入っており、床面も平らではない。床面は南側がやや高いが、床面幅は北側の方が広くなっている。遺物は見られず、木棺等の痕跡も見えなかった。

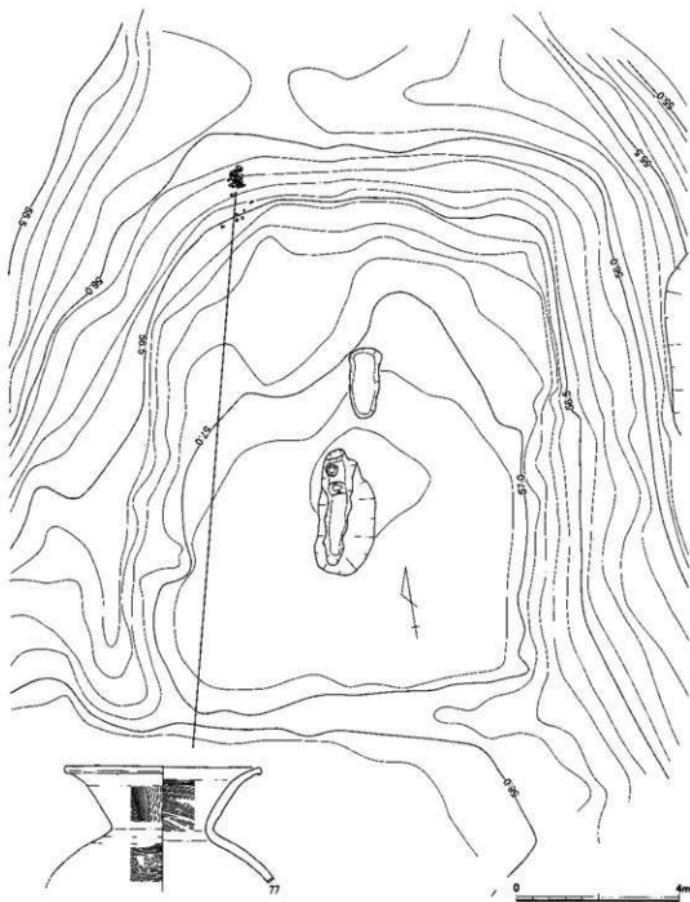
上野6号墳は、南北両辺に明瞭な周溝を残している。北側周溝の4黒褐色土掘削坑には、土師器片がまとまって出土する場所が見られた（第76図）。墳丘の傾斜した地山面に張り付いた状態で出土しており、集中して出土する部分より上側には、小片が点々と見られる。土師器が出土した場所は、墳丘の北西コーナーに近い標高56~56.5mの範囲で、周溝底面より20cm程度高く、墳頂部からの比



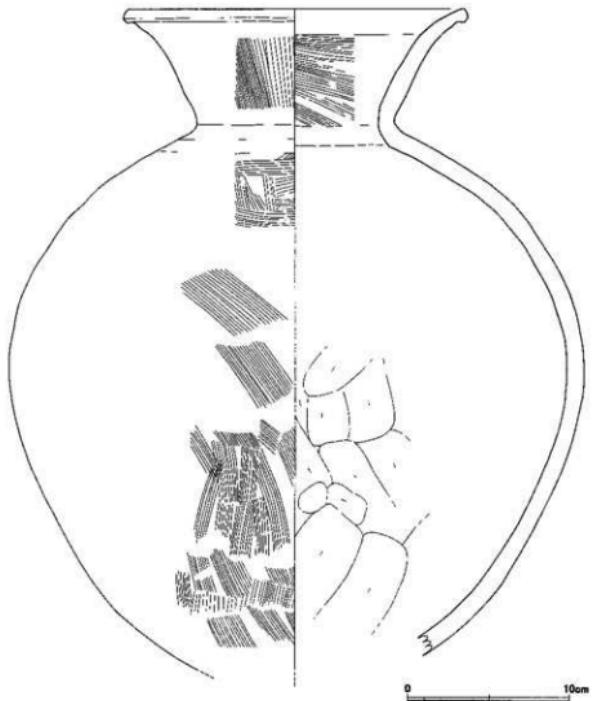
第75図 上野6号墳主体部実測図 (S = 1:40)

高差は約50cmである。風化により遺存状況が悪かったが、底部近くから口縁部までの破片があり、検出位置よりやや上で、つぶれた状態であったものと考えられる。主体部付近の状況より墳頂面が削平されているのは確実であるが、周溝や斜面部分は古墳築造当時の地形が残っていることが予想され、土師器(77)は元々墳頂部付近に置かれていたものと思われることから、6号墳の築造時期を示すものと考えられる。6号墳については、周溝内や周辺の斜面を精査したが、少量の弥生土器片が見られたのみで、77の他に古墳の時期を推定できる遺物は出土しなかった。

第77図は、6号墳周溝から出土した土師器壺である。明橙色を呈し、肩の張らない、丸い胴部を持つものである。頭部は大きく屈曲し、口縁部が直線的に開くもので、口縁端部外面を須恵器壺のように玉縁状に作るものである。胴部外面は、縦方向のハケメで調整し、頭部から肩部にかけて、



第76図 上野6号墳遺物出土状況(S=1:120、遺物はS=1:6)



第77図 上野6号墳出土土器実測図(S=1:3)

横方向のハケメが入るようであるが、磨滅のため明瞭でない。口縁端部の玉縁状になつた部分近くと頭部はヨコナデされるが、口縁端部より下から頭部までの間には、綫方向のハケメを強く入れている。口縁部内面には横から斜め方向のハケメが入り、胸部内面は、綫方向を中心とする荒いケズりが入る。口縁部から底部近くまで器壁は一定し、胴部が薄くなることはない。遺存状況が悪く歴質である。この土器は出土位置

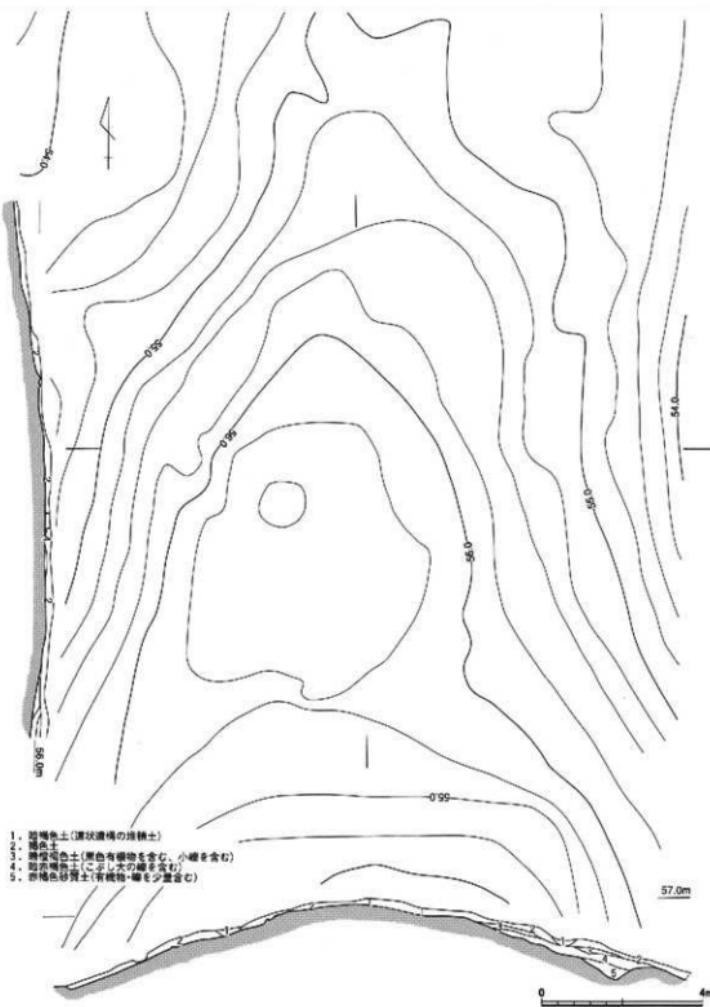
が周溝内ではほぼ完形品として出土したことから、土器棺の可能性も考えられるが、出土位置周辺では墓壙等の痕跡は見られなかった。

77と同様のものは、松江市北小原古墳群で土器棺に使用されているものがあるが、北小原古墳群のものは、口縁端部が玉縁状にならず、面を持つような形状になっており、肩部に波状文を施すなど相違点も多い。なお、北小原古墳群出土土器については、「外來の影響を示唆する資料」とされ、「胎生的に見ても非在地的特徴」があることを示唆している。この様な広口壺は、神原神社古墳出土の広口壺などの系譜を引くものと考えられるが、北小原古墳群出土土器と上野6号墳のものとの相違点はむしろ神原神社古墳出土土器との共通点となり、上野6号墳出土遺物の持つ新しい要素を見て取れる。類例の少ない十器のため断定しがたいが、上記の点より5世紀前半代のものであろうか。なお、本書に収録した竹ノ崎遺跡からは同様の器形を程した口縁部付近の破片が数個体出土しており、焼成や色調の異なるものも見られる。

上野7号墳 上野7号墳（第78～80回）は、調査区北端の標高約56m付近に立地する一辻7m前後の方墳と考えられる。付近は調査前から風化した岩盤が露出し土の部分が少なく、古墳の立地には向かない位置と思えたが、南側には周溝を構え、主体部らしき落ち込みが見られたことから7号

墳とした。7号墳は6号墳北側に隣接し、周溝は6号墳周溝と接している。7号墳の位置は上野1号墳付近から続く尾根上の平坦面の北端あたり、7号墳より北側は尾根筋も大きく下る地形となる。調査区外北側の尾根筋には少なくとも2か所以上の高まりがあり古墳群自体は更に続くようであるが、7号墳北側の平坦面は両側が括れ地形的に狭くなっている、北側下方に見られるマウンドとは距離が離れている。

7号墳の墳丘は、北側と西側が岩盤の影響で不明瞭だが、南側の6号墳との間には溝が見られ、東

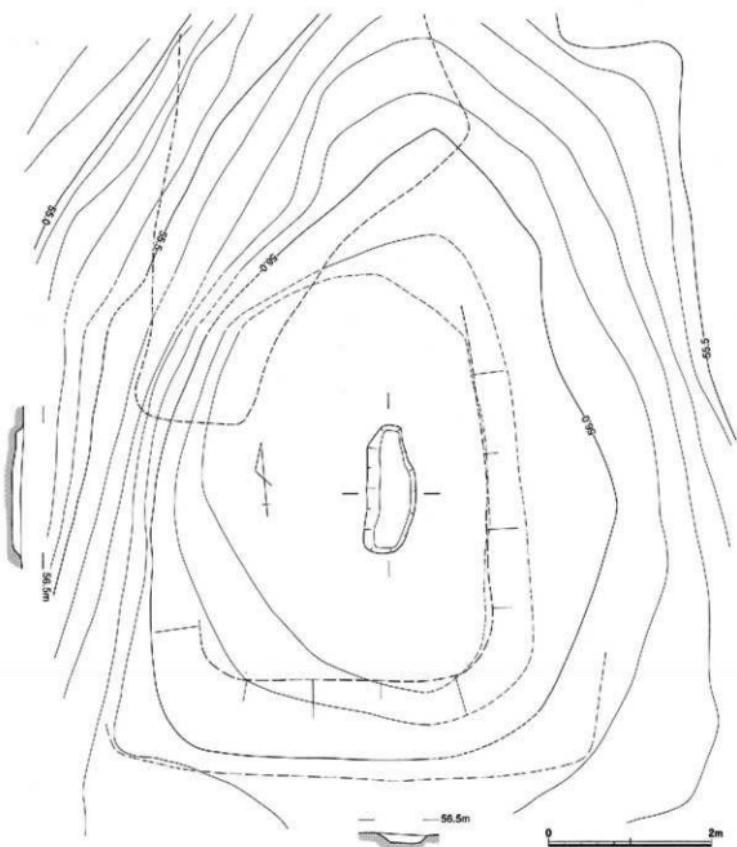


第78図 上野7号墳調査前墳丘測量図・土層断面図(S=1:120)

側にも明確に傾斜変換点が見られる。土層断面(第78図)では、削平や道の影響で古墳に直接伴う土層はほとんど見られないが、6号墳との間の周溝の堆積土は明瞭に残存しており、その下面の8暗赤褐色土は7号墳墳丘の盛り土であった可能性がある。残存する墳丘は、南側の周溝底面から墳頂まで40cm程の高さしかなく、各斜面の傾斜変換点からは南北約7m、東西6m前後の規模が推定される。古墳主軸はほぼ南北方向を取るものと思われ、4・6号墳と一致する。

第79図に見られる墳丘北側に点線で囲んで示した範囲内は、調査前から凝灰岩の風化した岩盤が露出している部分である。この周辺での土の見える部分も少し掘れば岩盤が露出する場所で、表土





第80図 上野7号墳主体部実測図(S=1:60)

が極端に少なく、土砂が流出しやすい状況であったものと思われる。この付近は、尾根筋の幅が最も狭くなる場所に当たり、尾根筋の両側はすぐに急斜面となっている。

推定される墳丘の中央からやや東よりの位置に、主体部と考えられる落ち込み1基（第79図）が見られる。7号墳主体部と考えられる落ち込み（第80図）は、主軸を北から僅かに東に振った方向を指し、墳丘主軸とも僅かにずらしている。長さ約1.6m、幅約60cmの長方形に近い形状で、検出できた深さは15cmである。壁面は傾斜し明瞭でないが、床面は平らに作られ、北側を僅かに高くする。落ち込みの埋土は、暗褐色粘質土1層で、木棺等の痕跡は見られず、遺物も見られなかった。

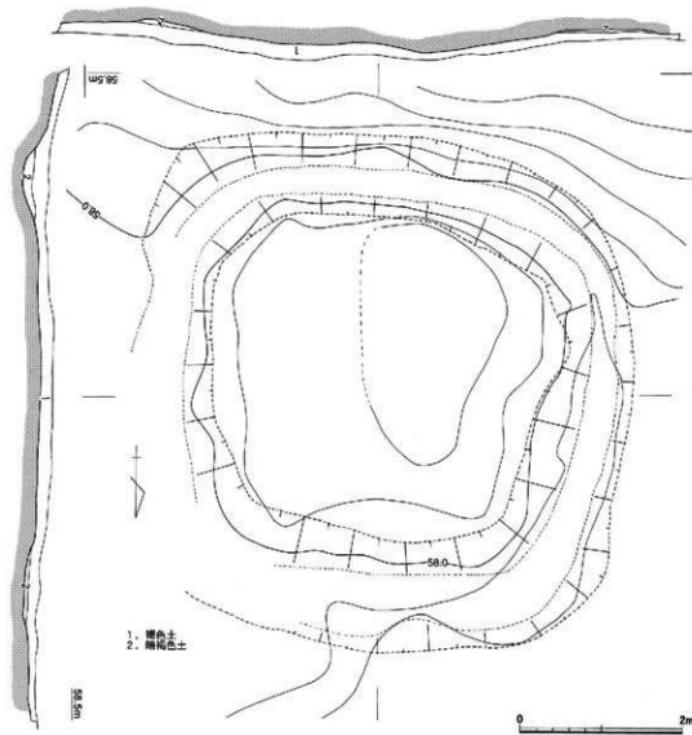
上野7号墳周辺からは、東側斜面から弥生土器と思われる土器小片が出土した以外は、遺物は出土しなかった。

上野8号墳 上野8号墳（第81～83図）は、上野1号墳直下の標高約58m付近に造られた小規模の方墳で、一辺は約5mである。上野1号墳墳頂直下に位置しているが、1号墳墳丘には影響して

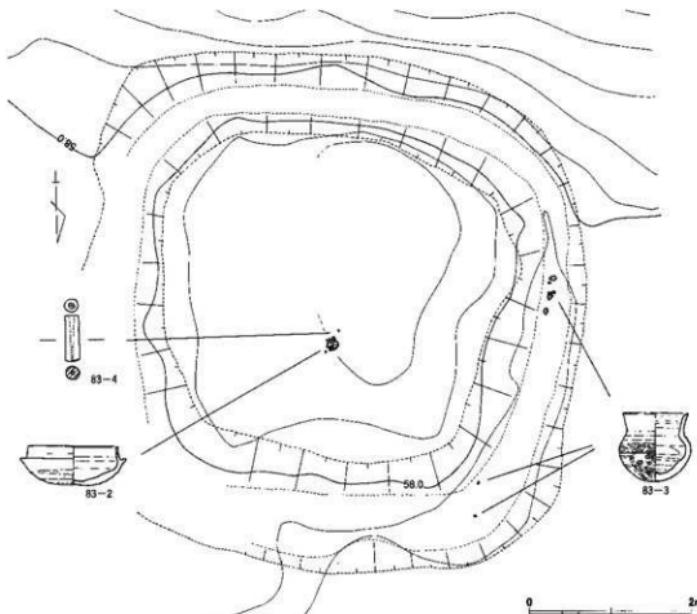
いない。東側は表土が流出しており、明瞭でないが、四方に周溝を巡らしており、周溝の幅は約1mである。墳頂部は削平が及んでおりやや歪になっているが、墳丘は1辺約5mの正方形を呈し、主軸をほぼ方位に合わせる。

土層断面(第81図)では表土である1暗褐色土が、遺構外も含め全面を覆っており、墳丘が完全に削平されていることが判る一方、周溝内には2黒褐色粘質土が堆積しており、周溝底面は古墳構築時の状況を残していると思われる。周溝底面から墳頂までの高さは30cm程しかなく、表土直下が地山面となっている。

墳頂部が大きく削平されていることが確実であったため、主体部の確認は絶望的であったが、墳丘中央部からは遺物が比較的まとまって出土する場所(第82図)があり、この付近に主体部が在ったものと考えられる。遺物は、標高58.2mの墳丘中央部で地山面の僅かな窪みから出土しており、周辺を精査したが、主体部を検出することはできなかった。墳頂部から出土した遺物は、須恵器壺(83-2)、管玉(83-4)の他、須恵器蓋(83-1)が見られる。83-1は口縁部付近の小片であるが、4号墳近くから出土した72-1と同一個体である可能性がある。他に8号墳出土遺物としては、西側の周溝底面から出土した須恵器壺(83-3)がある。



第81図 上野8号墳地形測量図・土層断面図(S=1:60)



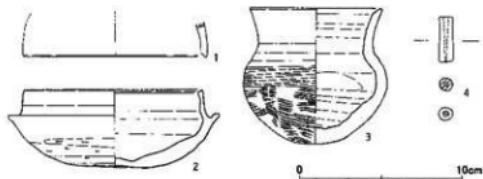
第82図 上野8号墳出土遺物出土状況(S=1:60)

第83図には、上野8号墳出土遺物を図示した。

83-1は、須恵器蓋である。口縁部の小片で、歪みのため復元口径が小さめに出たが、72-1と同一個体であったとすると、口径13cm前後である。大谷分類のA 1型と考えられる。

83-2は、須恵器壺である。底部に丁寧なケズリを施し、カエリが高く直立するもので、器高が高く、口径がやや小さい。口縁部内側を突出させるような形状で、沈線状のアクセントを持ち、大谷分類のA 1型に含まれるものと思われる。

83-3は、須恵器の小型の壺である。丸みがある体部から、僅かに外反する口縁部が鋭く立ち上がるるもので、一見すると土師器小型丸底壺に似る。胴部下半から底部は、小さな平行タタキによって調整されるが、僅かに砂粒の移動が認められることから、手持ちヘラケズリの痕跡をタタキによって消そうとしたものかもしれない。肩部のカキメは、タタキより先に施されている。頸部付近には、強いナデによる凹線状のくぼみが2状走り、頸部より上は回転を利用したナデである。内面の胴部下半は強いナデによる棱が走り、内面底部は僅かに隆起している。この内面底部の隆起にはスタンプ状の圧痕が見られ、外面向にタタキを施す際の軸受けになっていたものと思われる。見かけない器形の須恵器である。



第83図 上野8号墳出土遺物実測図(S=1:3)

あるが、土師器小型丸底壺と形態が似ている一方、手持ちヘラケズリを消すと言った手法を取り、内面に強いナデを施すと言う特徴が見られる。8号墳周溝から出土しており、83-2との関係から、出雲1期のものと推定される。

83-4は、管下である。緑色凝灰岩と思われる淡青緑色で軟質の石材を使用し、片面穿孔している。各面とも丁寧に研磨される。83-2とともに墳丘中央から出土しており、8号墳主体部内に置かれていたものと考えられる。

出土した須恵器より、上野8号墳は、出雲1期の構築と考えられる。上野遺跡II区の古墳群は、4・7号墳出土遺物に明確な時期を示すものが見られないが、6号墳出土土師器は少なくとも須恵器が普及する以前のものと考えられる。よって、尾根上の古墳群の時期が判る古墳については、上野1号墳、6号墳、8号墳、2・3号墳の順番に造られたものと思われる。4・7号墳の構築順は明らかでないが、尾根上の1号墳に近い位置から造られるとすると、石蓋土壙を持つ4号墳が最も早く造られたと想像される。その後、6号墳の後に7号墳が造られ、尾根先端に古墳が立地できる場所が無くなった後に、1号墳と4号墳の間に8号墳を造った。後の2・3号墳は尾根筋から外れた西斜面に造った。といった構築順が想像される。1号墳より南側については古墳を確認していないが、上野遺跡I区では出雲4期からそれ以降の須恵器が出土しており、新しい時期の古墳が存在した可能性があるが、上野遺跡での古い主要な古墳が北側の尾根先端を指向しているように思えることから、古墳を構築した集団の居所としては上野遺跡より北側が想像される。なお、尾根筋の古墳はいずれも墳頂部が削平されているが、周溝にはほとんど手が付けられていない。こうしたことから、この削平は尾根筋を平らにしようとする意図がうかがえる。畑作による耕作が目的であれば、積極的に平らにする必要はなく、平地から離れた尾根筋を大規模に造成する意図がうかがえにくい。上野1号墳南側には堀切として尾根を切断したと思える地形が見られる他、南側の上野遺跡I区が山城による改変と思える平坦面が連続していることから、上野遺跡II区の古墳の削平も戦国時代に山城として利用した痕跡と思われる。

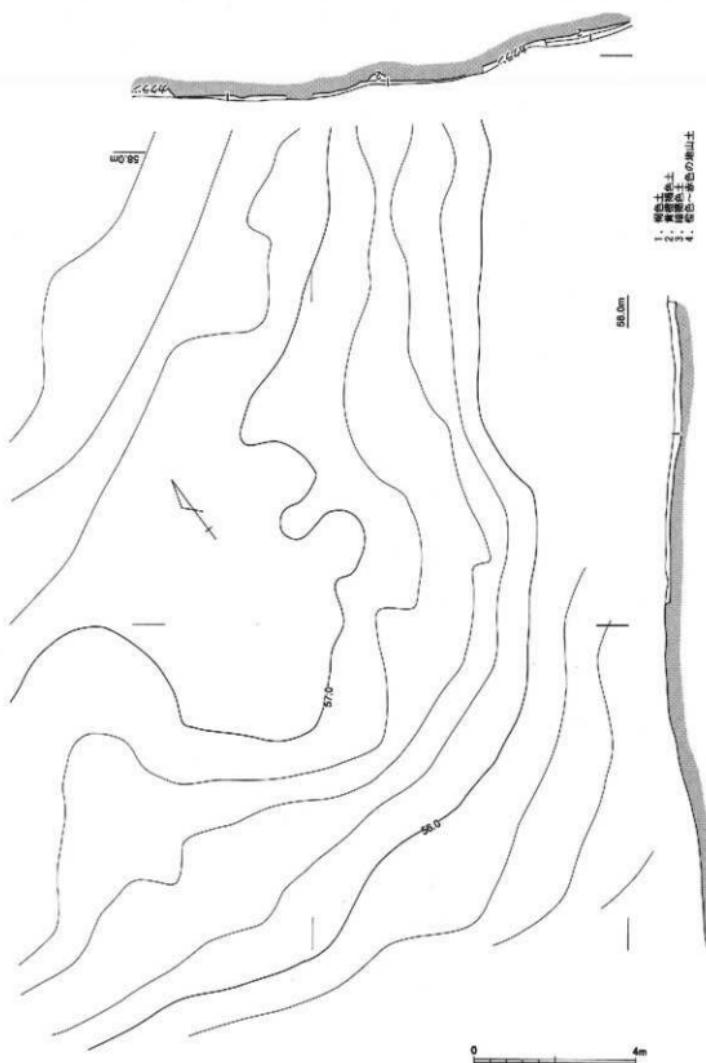
上野5号墳 上野5・9号墳は、尾根筋に位置する他の古墳から離れ、竹ノ崎遺跡の位置する東へ延びる小さな支尾根付近に位置する。5・9号墳は隣接して造られており、墳丘中心部間の距離は約12mである。5・9号墳が位置する場所は、東側へ落ちる急斜面の直上に当たり、封土も流出しやすい状況になっていたものと思われるが、尾根上の他の古墳は墳頂部に削平を受けていると言え、平面的な墳形自体が崩れているような状況は見られなかった。5・9号墳については、墳形自体が認識できないほどに改変されている。

5・9号墳が在る部分は、上野1号墳の周囲を取り巻くように埴輪棺群が造られている場所であるが、5・9号墳は埴輪棺が存在することを認識した上で、埴輪棺の位置を避けて構築されているよう見える。

上野5号墳（第84・85図）は東側斜面の標高約57m付近に立地する古墳である。周囲は後世の削平を受けているものと見られ、墳形は明確ではない。封土は全く見られず、表土直下が地山に当たり（第84図）、墳端の位置も明確でない。表土を除去すると、北側から西側にかけては周溝状の窪み（第85図）が現れたが、丸から多角形状を呈しており、東・南側の地形が直角のコーナーになっている部分と大きく異なる。5号墳北西側は、上野1号墳の墳端近くの急斜面が接しており、この付近が地山面であることから方墳としての周溝の存在は考えられず、南西側のコーナーの形状の

方がむしろ後世の改変によるものと考えられる。よって、現状からは断定できないが、5号墳は直径10m前後の円墳であったのではないだろうか。

5号墳は、地形の改変に及ぶ削平を受けているため、主体部等を検出することはできなかった。また、5号墳周辺からは1号墳から転落してきたと考えられる埴輪片が出土した他は、遺物は見られ



第84図 上野5号墳調査前地形測量図・土層断面図($S = 1:120$)

なかった。

上野 9 号墳 上野 9 号墳（第86～88図）は、上野 5 号墳南側に隣接する、標高約 57m 付近に立地する古墳で、上野 5 号墳と同様に墳形は明確ではない。調査前から、墳丘中央付近に抜根の跡と思われる大きな穴が開いていた。

調査前の状況では、斜面中程の平坦面というような地形で、明確なマウンドは見られなかった。土層断面（第86図）では、1 号墳方向からの流入土である 3 淡茶褐色土が全面に堆積し、東側を除く 3 方向で周溝内堆積土と思われる 6 暗茶褐色土が見られた。中央に開口する穴の周囲には、縮まり

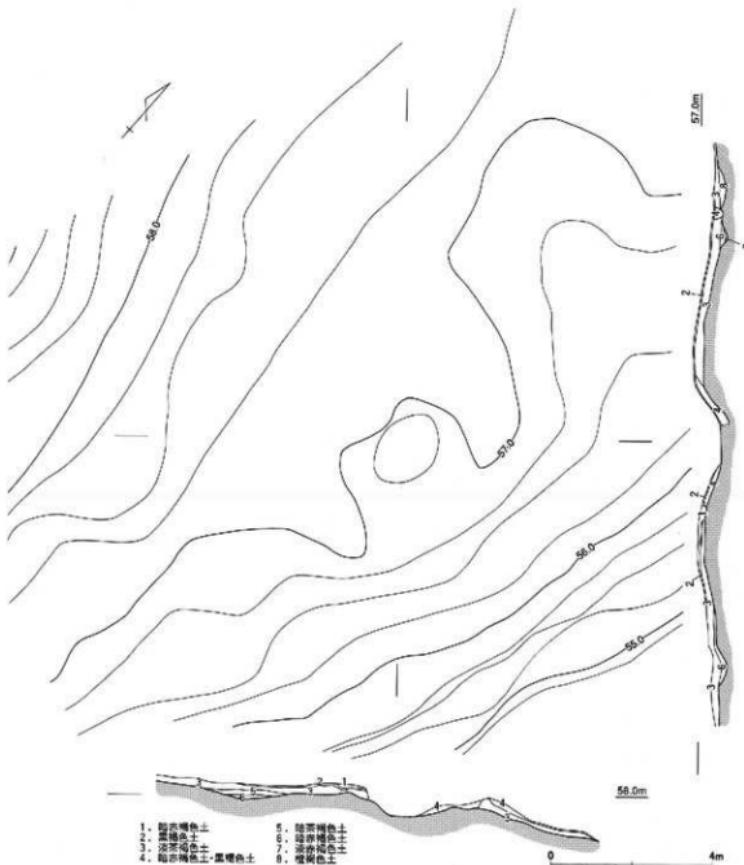


第85図 上野 5 号墳調査後地形測量図・断面図 ($S = 1:120$)

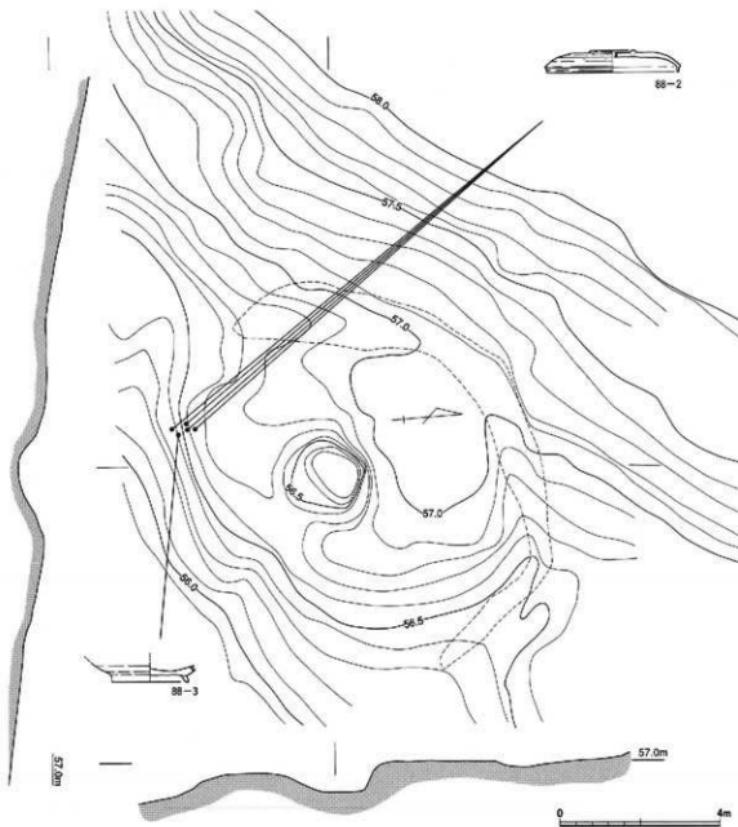
のない4暗赤褐色土と腐植土である黒褐色土が見られ、新しい堆積と考えられる。周溝底面の堆積土である6暗赤褐色土と3淡赤褐色土の関係から、墳丘上面は削平されているものと考えられた。封土を除去すると、1号墳に接する北西側の斜面をカットして浅い周溝を配した状況(第87図)が観察され、下り斜面にかかる南東側には明瞭な傾斜変換点は無い。周溝の状況から9号墳は、直径約10mの円墳であったと考えられる。

墳丘中央の穴は、周囲の状況からはやや深すぎる印象があり、盜掘坑とは考えにくい。周囲にも落ち込み等が見られず、9号墳からは主体部を検出することはできなかった。

墳丘南側の周溝延長線上にあたる、地山直上からは、須恵器片(88-2・3)がまとまって出土し、墳丘北西側の周溝内からは88-1が出土した(第87図)。9号墳周辺のみからまとまって出土しているという点で9号墳との関係を考えさせるが、いずれも7世紀末頃以降の土器と考えられ、9号



第86図 上野9号墳調査前地形測量図・土層断面図(S=1:120)



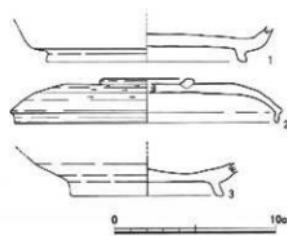
第87図 上野9号墳調査後地形測量図・断面図・遺物出土状況(S=1:120)

墳との直接的な関係を推定するのは疑問であり、9号墳の時期を示すものではないと思われる。

第88図は、9号墳周辺から出土した須恵器を図示した。

88-1は、壺底部である。全面が磨滅しており、細かい調整が見えないが、底部外周よりやや内側に、外に張り出す短い高台を張り付けたもので、体部は直線的に立ち上がるものと思われる。磨滅のため切り離しの痕跡が見えないが、回転糸切りであろう。8世紀前半台のものと考えられる。

88-2は蓋である。扁平でカエリが無く、低い輪状つまみを持つものである。高広編年のⅢb期にあたり、7世紀末から8世紀前葉のものと考えられる。

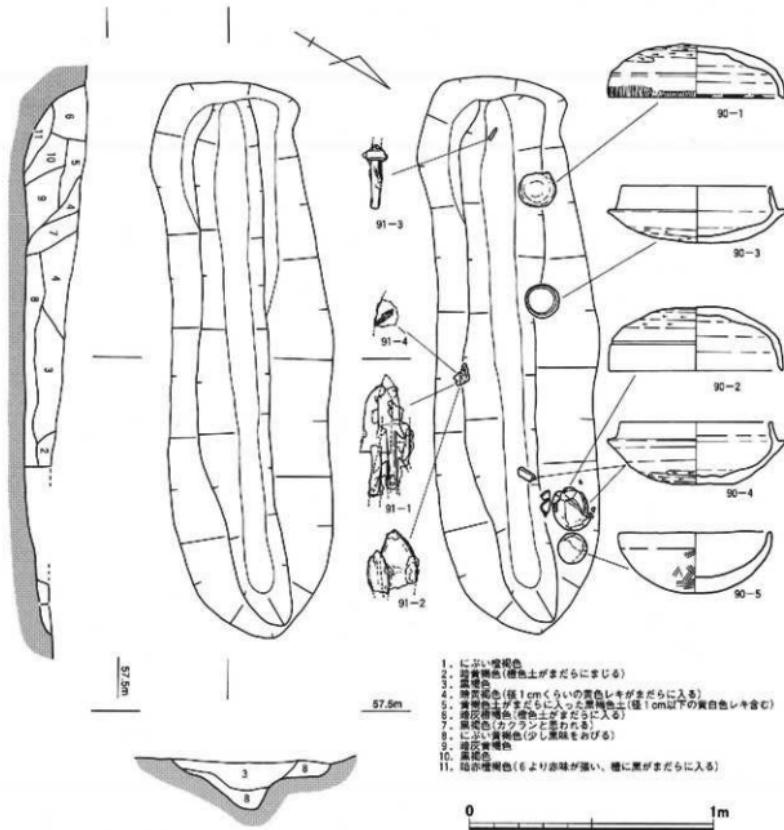


第88図 上野9号墳出土遺物実測図
(S=1:3)

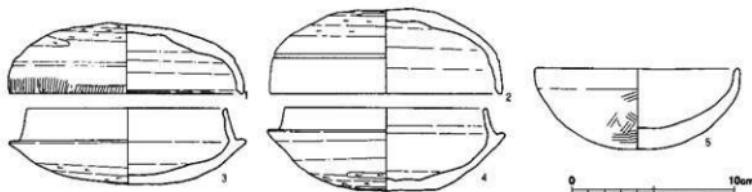
88-3は、壺底部である。やや高い高台を持ち、体部は内済気味に立ち上がるものと思われる。底部に回転糸切り痕を残している。出土状況から88-2に伴うものと思われ、7世紀末から8世紀前葉の年代観が与えられる。

土壙墓 上野4号墳と6号墳の間に広がる平坦面上の標高57m付近で、土壙墓1基（第89-91図）を検出した。地山面に直接掘られたもので、墳丘や周溝は見られなかった。土壙墓の位置は4号墳と6号墳の間にあたり、土壙墓の北側に6号墳の周溝が位置する。表土直下で検出し、他の遺構との切り合い関係は見られなかった。土壙墓の主軸は周辺の古墳と異なり、北東-南西を指している。土壙は長さ約2.3m、幅約60cmで2段に掘り込まれており、底の断面形状は直径20cm程の半円形である。

土層断面（第89図左）では根が多くはいるため明瞭ではないが、南西隅に10黒褐色土の立ち上がりが見え、木棺が入っていた可能性が考えられる。底面には8黄褐色土が厚く堆積しているが、横



第89図 土壙墓実測図・遺物出土状況(S=1:20)



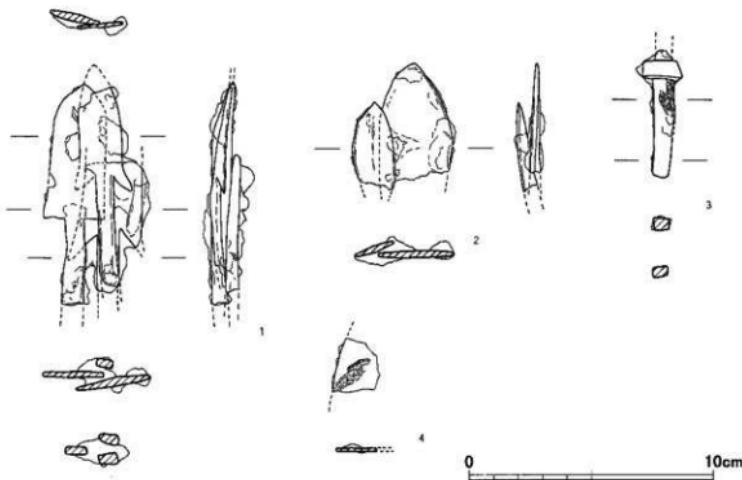
第90図 土壌墓出土土器実測図($S = 1:3$)

断面では造構上面から流入しており、流れ込みである。

土壌墓内からは土器を中心多く出土している(第89図右)。遺物は、2段に掘り込まれた土壌の上段側で多く出土しており、北側に土器類が南側に鉄鎌が束の状態で出土した。土器類はいずれも壺で、西側より須恵器蓋(90-1)、壺(90-2)が別々に置かれ、東側に須恵器の壺と身がセットになった状態(90-2・4)で置かれ、その東隣に土師器壺が伏せて置かれていた。西側の段の中程には鐵束(91-1・2・4)があり、南西に先端を向けて置かれていたようである。下段からは、南西隅から91-3が出土している。

90-1は須恵器蓋である。天井部は丁寧にヘラケズリされるが、肩部の稜は鋭さを欠き、口縁部の段も緩い。口縁部外面に縱方向の条線が見られ、制作時に輪のようなものから抜いた痕跡であると考えられる。90-2もほぼ同様のものであるが、肩部の稜は沈線化し、口縁端部には僅かに面を残すのみで、明瞭な段は見られない。いずれも口径14.4cmを測り、大谷分類のA 2型と考えられる。90-3・4は須恵器壺である。僅かに内傾するカエリが高く延びるもので、底部には明瞭なヘラケズリを施している。

90-5は土師器の壺である。底部から口縁端部まで丸みをもって緩やかに立ち上がるもので、口縁部外面をヨコナデし、体部から底部外面にはハケメが見える。外面のハケメは斜め方向のものが



第91図 土壌墓出土金属器実測図($S = 1:2$)

先に行われ、後に横方向のハケメが施される。内面調整は丁寧なナデで、ミガキは見えない。器壁は黄橙色を呈すが、内面には赤色顔料（丹か）が塗布されている。底部近くでは13mmと器壁が厚く、口径は12.6cmである。

第91図に示したものは、土壙墓から出土した鉄鎌と考えられるものである。接合しなかつたが、91-2・4は91-1と同一個体のものが含まれている可能性があり、総点数は4点程度であったものと思われる。

91-1は、3点の鉄鎌が鋸び付いたものである。3点とも柳葉形であるが、鎌身の幅や間の形状がいずれも違っている。図面左側のものは、逆刺のない直角闇となっている。

91-2は、鎌身先端のみが2点鋸び付いたものであるが、幅の広いものが91-1の内の1点と同一個体である可能性がある。他の1点は、小型のもので鎌身下方が大きく括れるものと思われる。

91-3は、鉄鎌の茎と思われるものである。金属製の帶状になった鎌が残っており、木質が付着している。

91-4は、鎌身の小片と考えられる。出土状況から91-1の一部と考えられるが、接合しなかつた。

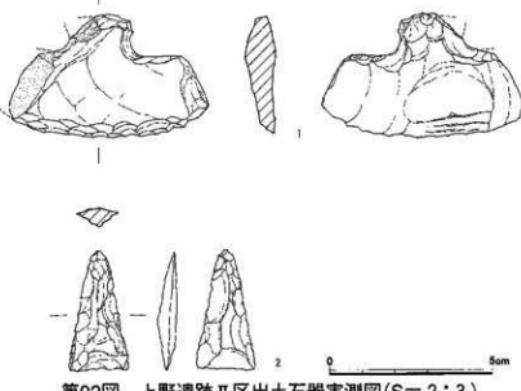
土壙墓出土遺物の内須恵器蓋は、いずれも大谷分類のA2型であり、出雲2期のものと考えられる。よって、土壙墓が造られた時期は上野8号墳より新しく、2・3号墳より古いと考えられる。

第3節 遺構に伴わない遺物

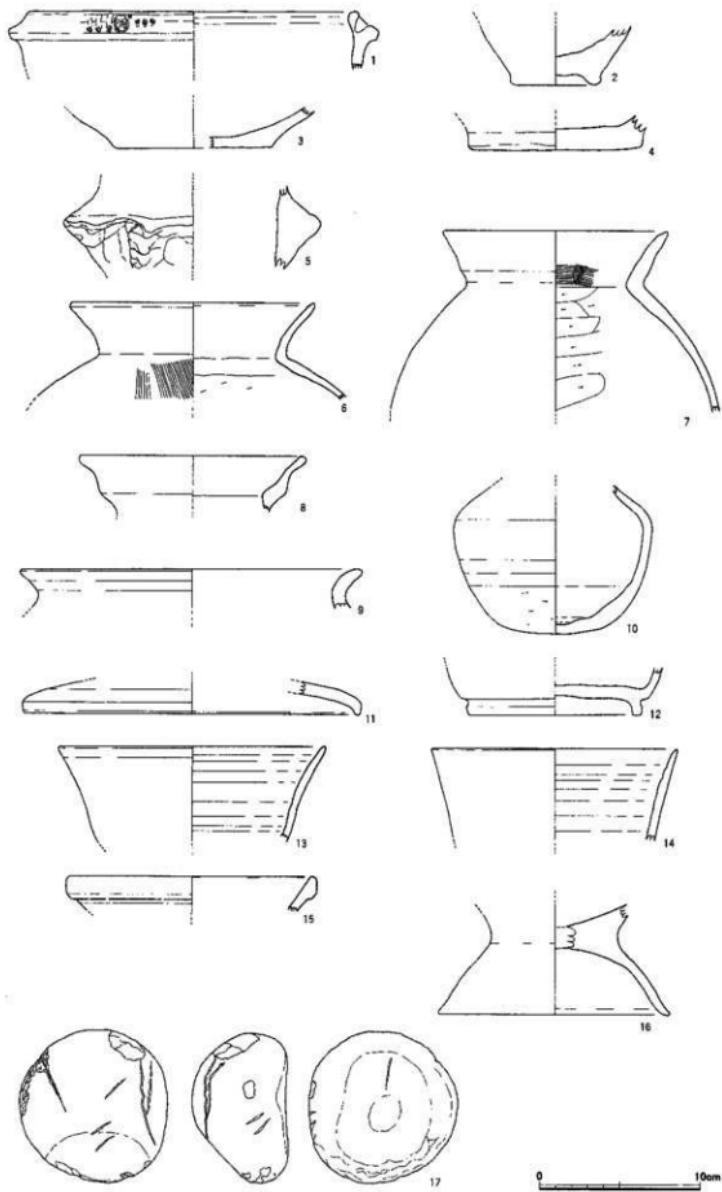
第92~94図には、上野遺跡II区出土遺物のうち遺構に伴わないものを示した。

92-1は安山岩製の石匙である。一部欠損が認められるが、左右対称になるものと思われる。刃部は、片面に1次剥離面を完全に残すもので、直線的ではなく、緩い弧を描く。つまみ部分は両面から丁寧に剥離される。92-2は安山岩製の石鏟である。平面二等辺三角形となっており、基部の抉りはない。全面を調整しており、1次剥離の痕跡を残さないが、1回の剥離が大きく、剥離の順も一定しない。上野遺跡の調査で、縄文時代の石器と考えられる遺物は上記2点のみで、上野遺跡I区からは出土していない。

93-1~4は、縄文土器と考えられるものである。93-1は鉢の小片で、口縁部を拡張し、外側から径1cm程の穴を穿ち、小さい刺突を加えたものである。磨滅しており、細かい調整は不明である。縄文時代後期のものと考えられる。93-2~4は、底部の破片の内縄文土器と考えられるものである。高台状のもの（93-2）と平底のもの（93-3・4）が見られる。磨滅のため調整は不明で、時期も判断しがたい。



第92図 上野遺跡II区出土石器実測図(S=2:3)



第93図 上野遺跡II区遺構に伴わない遺物実測図($S = 1:3$)

93-5は、4号墳南東側で出土したもので、山陰系壺型土器の突帯部分であろうか。断面三角形を呈しているが、岡上下半は、表面の剥離によるものである。1~2mmの砂粒が多く含み、暗黄褐色を呈している。被熱痕等は見られない。

93-6~8は、土師器の甕である。93-6・7は、口縁部が直線的に開くもので、口縁端部を尖り気味にする。93-6は胴部外面に縱方向のハケメを、93-7は口縁部内面に横方向のハケメを施す。松山編年のⅣ期に含まれるものと思われる。93-8は、複合口縁状に口縁部を曲げるものである。頸部内面より下方はケズリである。外面には煤の付着が見られる。松山編年のⅢ期に含まれるものと思われる。

93-9は、須恵器の甕である。口縁部が短いもので、文様等は見られない。

93-10は、須恵器甕である。底部外面は回転ヘラケズリし、内面はナデである。焼成がやや軟質で、外面は磨滅が進んでいる。

93-11は、須恵器蓋である。小片によるためか、復元口径が非常に大きい。口縁端部を折り曲げ、カエリを持たないもので、体部が斜めに立ち上がる。8世紀後半代のものであろうか。

93-12~14は、須恵器坏である。93-12は、高台を持つ底部の破片で、回転糸切り痕を残している。8世紀代のものであろう。93-13・14は、体部から口縁部までが直線的に延びるもので、内面に回転ナデの痕跡を強く残すものである。神田遺跡^(註1)や、古曾志平追田窯跡出土^(註2)のものほど開かないう器形で、9世紀代のものと考えられる。

93-15は、白磁碗である。口縁部の小片であるが、口縁部外面に大きな玉縁を持つもので、太宰府分類のⅣ類^(註3)にあたる。胎土中に黒色の微砂粒を含んでおり、釉は明灰色を呈している。平安時代終わりから鎌倉時代初め頃のものと思われる。

93-16は、土師器の鉢であろうか。高さ4cmにもなる高台を持ち、底部の器壁が厚く、内湾して立ち上がる体部を持つと思われる。底面もナデ調整され、ケズリの痕跡はない。平安時代のものと考えられる。

93-17は、擦り石である。一面が使用により産んでいる。

第94図には、上野遺跡で出土した古銭を示した。

94-1は、熙寧元寶と至道元寶が張り合わされたものである。両者とも北宋銭で、熙寧元寶^(註4)は1068年の、至道元寶は995年の初鋤である。上野遺跡Ⅱ区で、これらの古銭に近いと考えられる遺物としては、白磁碗（93-15）が12世紀後半を前後する時期と考えられる他、上野1号墳頂部から出土した常滑系の壺（140-1）が13世紀後半頃と考えられる。

94-2~6は寛永通寶である。



第4節 小結

上野遺跡Ⅱ区は弥生後期の集落と古墳群を中心とした遺跡であった。以下遺構ごとの年代観を整理し、小結と

第94図 上野遺跡出土古銭実測図(S=1:2)

する。

上野遺跡Ⅱ区からは縄文時代の石器類や弥生前期の遺物もあり、道構には現れないが、古い時期からの活動の痕跡が認められた。

5～7号建物跡は加工段などと共に松本V-3～4様式の時期と考えられる。低石類が多く見られたが、鉄製品は見られなかった。

上野2・4号墳付近には確認できない弥生後期の道構が在ったものと想定された。

1号墳を除く上野遺跡の古墳群の築造順は、上野4・6・7・8号墳の順に造られ、その後に土壙墓、2・3号墳、5・9号墳が造られたものと思われる。この内時期の判るものは、上野6号墳が5世紀前半頃、8号墳が大谷編年の出雲1期、土壙墓が出雲2期、2・3号墳が出雲2～3期と考えられる。

上野遺跡の丘陵上は、古墳時代以降も何らかの形で使用されていたらしく、奈良時代、中世の遺物が見られた。

註1 弥生土器の編年観については以下の文献での研究成果を参考にした。

松本岩雄「7出雲・隱岐地域」「弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－」1992年

赤澤秀則「IV小結」「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会1992年

註2 「青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」鳥取県教育委員会1978年

註3 古墳時代須恵器の編年観については、大谷晃二氏の研究成果を参考にした。

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」「鳥根考古学会誌第11集」1994年

註4 「北小原古墳群発掘調査報告書」松江市教育委員会2000年

註5 前島己基・松本岩雄「鳥根県神原神社古墳出土の土器」「考古学雑誌第62巻第3号」1976年
蓮岡法章「加茂町の古代」「加茂町誌」

註6 「高広遺跡発掘調査報告書」鳥根県教育委員会1984年

註7 古墳時代土師器の編年観に関しては、松山智弘氏の研究成果を参考にした。

松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」「鳥根考古学会誌第8集」1991年

註8 「神田遺跡」「北松江幹線・松江速絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」鳥根県教育委員会1987年

註9 「古曾志遺跡群発掘調査報告書」鳥根県教育委員会1987年

註10 横田賢治郎・森山勉「太宰府出土の輸入陶磁器－形式分類と編年を中心として」「九州歴史資料館論集4集」1978年

註11 古銭については、兵庫埋蔵銭調査会の成果を参考にした。

「日本出土銭鑑定」「兵庫埋蔵銭調査会1996年」